

江戸川乱歩の世界
④ 陰獣

目次

江戸川乱歩の世界

陰獣

- 一、 二人の出逢い
- 二、 女性の顔や姿の様子
- 三、 静子の生い立ち
- 四、 最初の脅迫の手紙
- 五、 大江春泥の作風と生活
- 六、 春泥の新たなる脅迫状
- 七、 屋根裏からの時計の音
- 八、 屋根裏の遊戯の探索
- 九、 屋根裏の遊戯のまとめ
- 十、 六郎氏変死事件
- 十一、 寒川の最初の推理
- 十二、 洋館の硝子窓に人の影
- 十三、 事件から約一ヶ月間
- 十四、 二人の関係の急接近
- 十五、 寒川の「二つの思い、つき」
- 十六、 本格的な推理一（全容を語る）
- 十七、 本格的な推理一（その検証）
- 十八、 ひとときの逢瀬
- 十九、 本格的な推理二（そのきっかけ）
- 二十、 本格的な推理二（きっかけの解説）
- 二一、 静子からの婿曳の手紙
- 二二、 静子の衣装と土蔵の中
- 二三、 本格的な推理二（天井裏の釘）
- 二四、 本格的な推理二（三つの推理）
- 二五、 本格的な推理二（二つの一致）
- 二六、 本格的な推理二（最終的推理）
- 二七、 本格的な推理二（全容を語る）
- 二八、 推理後の「二人の様子」
- 二九、 事件の結末

※ 参考文献

江戸川乱歩の世界
陰獣

江戸川乱歩の「陰獣」

例えば、江戸川乱歩には実に多種多様な「作品」があるかと思うが、その中でも、比較的评价の高い『陰獣』を取り挙げて、その「内容」をいろいろと考察してみたいと思う。

* *
まず、本文の「冒頭」は、次のような内容から始まるものである。つまり、「……私は時々思うことがある。探偵小説家というものには二種類あって、一つの方は犯罪者型でも言うか、犯罪ばかりに興味を持ち、たとえ推理的な探偵小説を書くにしても、犯罪の残酷な心理を思うさま書かないでは満足しないような作家であるし、もう一つの方は探偵型でも言うか、ごく健全で、理智的な探偵の径路にのみ興味を持ち、犯罪者の心理などには一向頓着しないような作家であると。そして、私がこれから書こうとする探偵作家大江春泥は前者に属し、私自身は恐らく後者に属するのだろう。従って、私は、犯罪を取扱う商売にも拘らず、ただ探偵の科学的な推理が面白いので、聊かも悪人ではない」とある。もちろん、江戸川乱歩という作家は、その「両方」を兼ね合わせた作家であったということになるのだろう。

そして、この前の「事件」を振り返っては、「……恐らく、私ほど道徳的に敏感な人間は少ないと言ってもいいのだろう。そのお人好して善人な私が、偶然にもこの事件に関係したというのが、抑も事の間違いであった。若し私が道徳的にもう少し鈍感であったならば、私にいくらかでも悪人の素質があったならば、私はこうまで後悔しなくても済んだであろう。こんな恐ろしい疑惑の淵に沈まなくても済んだであろう。いや、それどころか、私はひよっとしたら、今頃は美しい女房と身に余る財産に恵まれて、ホクホクもので暮らしていたかも知れないのだ」とある。

一、二人の出逢い

それは、昨年うえのの秋、十月なかばのこと、「……私は古い仏像ぶつぞうが見たくなって、上野の帝室博物館の、薄暗くガラシとした部屋へやを、足音を忍ばせて歩き廻っていた。部屋が広くて人気がないので、一寸した物音が怖いような反響を起すので、足音ばかりではなく、咳払いせきばらいさえ憚れるような気持であった。博物館というものが、どうしてこうも不人氣ふにんきであるかと疑われる程そこには人影がなかった。陳列棚だんなの大きなガラスが冷たく光り、リノリウム（建材で主に床材）には小さなほこりさえ落ちていなかった。お寺のお堂どうみたいに天井の高い建物は、まるで水の底にでも在るように、森閑と静まり返っていた。

丁度私が、ある部屋の陳列棚の前に立って、古めかしい木彫りの菩薩像ぼつぞうの、夢のようなエロティックに見入っていた時、うしろに、忍ばせた足音と、幽かな衣きぬずれの音がして、誰かが私の方へ近づいて来たのが感じられた。私は何かしらゾツとして、前のガラスに映る人の姿を見た。そこには、今の菩薩像と影を重ねて、黄八丈きはちじょうの様な柄がらの裕あわせを着た、品のいい丸鬢まるまげ姿の女が立っていた。女はやがて私の横に肩を並べて立止り、私の見ていた同じ仏像にじっと眼を注ぐのであった」とある。

* *
さて、これが、有名な「二人の出逢い」の場面であるが、ここで最も大事なことは、次

のようなことである。つまり、「……どうしてこうも不人気であるかと疑われる程そこには人影がなかった」とある。それなのに、そのような場所に、どうして「女性がたった一人」で、このような不人気な博物館に来たのだろうか？ しかも、展示されている陳列品などは、いたるところに数多くあるというのに、なぜ、彼女は、主人公のいるところへと敢えて近づいて来たのだろうか？ それは、主人公自身、「……誰かが私の方へ近づいて来たのが感じられた。私は何かしらゾツとして、前のガラスに映る人の姿を見た」とある。それは、一人の男性としてドキドキするような気持ちとともに、「……なにかおかしい、こんなところに、女がたった一人で来るのもおかしいし、また、迷うことなく、自分の方へと近づいて来るのもおかしい」と、直感的に感じたからこそ、まさに「……私は何かしらゾツとして、前のガラスに映る人の姿を見た」のである。つまり、ほかに誰もいない、しかも、どこの誰かも知れない男一人でいるところに、しかも、いつ何をされるかも知わらないそんな男一人のところに、何の躊躇もなく、女がたった一人で近づいていくものだろうか？ ふつう、警戒するものだろう。——つまり、彼女は、彼が誰であるかはよく知っていて、最初から、すべて「計画的に主人公に近づいて行った」ということである。だからこそ、彼女にはためらいというものが無いのである。

二、女性の顔や姿の様子

さて、私は、あさましいことだけれど、仏像を見ているような顔をして、時々チラチラと女の方へ眼をやらないではいられなかった。それ程その女は私の心を惹いたのだ。彼女は、青白い顔をしていたが、あんなに好ましい青白さを私は嘗て見たことがなかった。それは、この世に若し人魚というものがあるならば、きっとあの女のような優艶な肌を持っているに相違ない。どちらかと言えば、昔風の瓜実顔で、眉も鼻も口も首筋も、悉くの線が優に弱々しく、なよなよとしていて、よく昔の小説家が形容したような、触れば消えて行くかと思われる風情であった。私は今でも、あの時の彼女のまつげの長い、夢見るようなまなざしを忘れることは出来ない。

どちらが初め口を切ったのか、私は今妙に思い出せぬけれど、恐らくは私が何かのきっかけを作ったのであろう。彼女と私とはそこに並んでいた陳列品について二言三言口を利き合ったのが縁となつて、それから博物館を一巡して、そこを出て上野の山内を山下へ通り抜けるまでの長い間、道づれとなつてポツツリポツツリと、色々の事を話し合ったのである。——そうして話をして見ると、彼女の美しさは一段と風情を増して来るのであった。中でも彼女が笑う時の、恥らい勝ちな、弱々しい美しさには、私は何か古めかしい油絵の聖女の像でも見ているような、またはあのモナリザの不思議な微笑を思い起こすような、一種異様な感じに打たれないではいられなかった。彼女の糸切歯は真白で大きくて、笑う時には、唇の端がその糸切歯にかかつて、謎のような曲線を作るのだが、右の頬の蒼白い皮膚の上の大きな黒子が、その曲線に照応して、何とも言えぬ優しく懐しい表情になるのだった。

だが、若し私が彼女の項にあの妙なものを発見しなかったならば、彼女はただ上品で優しく弱々しい、触れば消えてしまふような美しい人という以上に、あんなにも強く私の心を惹かなかつたであろう。彼女は巧みに衣紋をつくらつて、少しも態とらしくなく、そ

れを隠していたけれど、上野の山内を歩いている間に、私はチラと見てしまった。彼女の項には、恐らく、背中の方まで深く、赤痣のような太い蚯蚓腫れが出来ていたのだ。それは生れつきの疵のようにも見えたし、また、そうではなくて、近頃出来た傷痕のようにも思われた。蒼白い滑らかな皮膚の上に、格好のいいなよとした項の上に、赤黒い毛糸を這わせたように見えるその蚯蚓腫れが、その残酷味が、不思議にもエロティックな感じを与えた。それを見ると、今迄夢のように思われた彼女の美しさが、俄かに生々しい現実味を伴って、私に迫って来るのであった。

*

*

さて、この場面は、彼女の「容姿・容貌」の特徴などを事細かに描いているが、しかし、大事なことは、見た目は、いかにも上品で優しく弱々しい、触れば消えてしまいそうな美しい人という印象を与えているが、しかし、その実は、彼女の「項から背中の奥へと赤痣の様なものを持つ女性」として、決して「ふつう一般の女性とは少し違う」という印象を与えているのである。——そして、彼女は、合資会社碌々商会の出資社員の一人である実業家小山田六郎氏の夫人、静子であること、また、彼女は、探偵小説の読者であって、殊に私の作品は好きで愛読しているということ、（それを聞いた時私はゾクゾクする程嬉しかったことを忘れないが）、作者と愛読者との関係から、二人は、自然と親しくなり、その美しい人と、それから度々手紙のやり取りをする程の間柄となるのである。

私は、若い女の癖に人氣のない博物館などへ来ていた静子の上品な趣味も好ましかったし、探偵小説の中でも最も理智的だと言われている私の作品を愛読している彼女の好みも懐しく、私は全く彼女に溺れ切ってしまった形で、誠に屢々彼女に意味もない手紙を送ったものであるが、それに対して、彼女は一々鄭重な、女らしい返事をくれた。独身で寂しがり屋の私は、この様なゆかしい女友達を得たことを、どんなに喜んだことであろう。もちろん、そのような関係になる事こそ、静子の、まさに「狙い」そのものである。

三、静子の生い立ち

さて、静子と主人公との手紙の上での交際は、そうして数ヶ月の間続いた。文通を重ねて行くうちに、私は非常にびくびくしながらも、私の手紙に、それとなく、ある意味を含ませていたこともいなめないのだが、気のせいかな、静子の手紙にも、通り一遍の交際以上に、誠につつましやかではあったが、何かしら暖い心持がこめられて来る様になった。打開けて言うと、恥かしいことだけれど、私は、静子の夫の小山田六郎氏が、年も静子よりは余程とつていた上に、その年よりも老けて見える方で、頭などもすっかりはげ上がっている様な人だという事を、苦心をして探り出していた。が、今年の二月頃になって、静子の手紙に妙な所が見え始め、彼女は何かしら非常に怖がっている様に感じられた。

すると間もなく、静子から、「……一度御相談したいことがあるから、御伺いしても差支ないですか」という端書が来た。私はその「御相談」の内容をおぼろげには感じていたけれど、まさかあんな恐ろしい事柄だとは想像もしなかったので、愚かにも浮き浮きと嬉しがって、彼女との二度目の対面の楽しさを、様々に妄想していた程であったが、「お持ちしています」という私の返事を受け取ると、直ぐその日のうちに私を訪ねて来た静子は、もう私が下宿の玄関へ出迎えた時に、私を失望させた程も、うちしおれていて、彼女の「相

談」というのが又、私の先の妄想などはどこかへ行ってしまった程、異常な事柄だったのである。「……私本当に思いあまつて伺ったのでございます。先生なれば、聞いていただける様な気がしたものですから。でも、まだ昨今の先生にこんな打割った御相談をしましては失礼ではございませんかしら」と言うのであった。

彼女の思い込んだ様子を見ると、私もつい真剣になって、「……私に出来ることなら」と答えると、彼女は、「……本当に気味の悪いことでございますの」と前置きしてから、その「いきさつ」を彼女の幼年時代からの身の上話なども交えながら、次のような異様な事実を私に語るのであった。

*

*

まず、彼女の郷里は静岡であり、そこで彼女は女学校を卒業する間際まで、至極幸福に育つたとある。たった一つの不幸と言えるのは、彼女が女学校の四年生の時、平田一郎という青年の巧みな誘惑に陥つて、ほんの少しの間彼と恋仲になったことであつた。なぜそれが不幸かという点、彼女は十八の娘のちよつとした出来心から恋の真似事をして見ただけで、決して真から相手の平田青年を好いていなかったからだ。そして、彼女の方では本当の恋でなかったのに、相手は真剣であつたからである。彼女はうるさくつき纏う平田一郎を避けよう避けようとする、そうされればされる程、青年の執着は深くなる。はては、深夜黒い人影が彼女の家の塀外をさまよつたり、郵便受けに気味の悪い脅迫状が舞い込んだりし始めた。十八の娘は彼女の出来心の恐ろしい報いに震え上がってしまったが、両親もただならぬ娘に心附いて、胸を痛めるのであった。

丁度その時、静子にとっては、寧ろそれが幸いであつたとも言えるのだが、彼女の一家に大きな不幸が訪れ、それは、当時経済界の大変動から、彼女の父は、弥縫出来ない（取り繕えない程の）多額の借財を残し、商売を畳んで、殆ど夜逃げ同然に、身を隠さねばならぬ羽目になったのである。この予期せぬ変化のために、静子は今少しという所で女学校を中途退学になったが、一方では、突然の転宅によって、気味の悪い平田一郎の執念からは逃れることが出来たので、彼女はホッと胸なでおろす気持だったのである。

ただ、彼女の父親はそれが元で、病の床につき、間もなく死んで行つたが、それから、たつた二人になった母親と静子の上に、暫くの間みじめな生活が続いたが、その不幸は大して長くはなかつた。やがて、彼女等が世を忍んでいた同じ村の出身者である実業家の小山田氏が彼女等の前に現われた。それが救いの手であつた。小山田氏はある垣間見（ちらつと見）に静子を深く恋して、伝手を求めて結婚を申し込んだ。静子も小山田氏が嫌いではなかつた。年こそ十歳以上も違つていたけれど、小山田氏のスマートな紳士振りに、あるあこがれを感じていた。縁談はスラスラと運んで行つたのである。

そして、小山田氏は母親とともに、花嫁の静子を伴つて東京の邸に帰つた。それから七年の歳月が流れた。彼等が結婚してから三年目かに、静子の母親が病死したこと、それから暫くして、小山田氏が会社の要務を帯びて、二年ばかり海外に旅をしたこと（帰京したのはつい一昨年の暮れであつたが、その二年の間、静子は毎日、茶、いけ花、音楽等の師匠に通つて、独居の淋しさを慰めていたという事）などを除いては、彼等の一家にはこれという出来事もなく、夫婦仲も至極円満であり、幸せな月日が続いてきたが、ただ、結婚する時、静子は、小山田に嘘をついて、平田一郎のことをつい隠してしまい、あくまで小山田の他には男は知らないと言ひ張つていたのである。

* * *

さて、ここまでの内容は、静子の「生い立ち」と家族との関係や小山田氏との出逢いから今日までの経過などが、実に事細かによく説明されていて、現在までの状況がはっきりと分かるとともに、夫の小山田氏は大の奮闘家で、その七年間にメキメキと財をふやし、今では同業者の間に押しも押されぬ地盤を築いていたのである。その実業家小山田氏の夫人として、静子は、毎日、幸せな生活を送っていたが、突然、かつての恋人であった平田一郎から脅迫を受けるようになるのである。しかも、そのかつての恋人平田一郎という人は、今やなんと有名な探偵小説家の「大江春泥」となっていたのである。

四、脅迫の手紙

さて、静子は、「……本当にお恥かしいことですが、わたくし、結婚の時、小山田に嘘を附いてしまったのでございます。その平田一郎のことを、つい隠してしまったのです。（中略）、そして、その嘘を今でも続けているのでございます。小山田が疑えば疑うだけ、私は余計に隠さなければならなかったのです。人の不幸って、どんな所に隠れているものか、本当に恐ろしいと思いますわ。七年前の嘘が、それも決して悪意でついた嘘ではありませんでしたのに、こんなにも恐ろしい姿で、今わたくしを苦しめる種になりましようとは」と、そう言つて、その平田から来たという数通の手紙を見せた。私はその後それらの手紙の保管を頼まれて、今でもここに持っているが、そのうち最初に来たものは、話の筋を運んで行くのに都合がよいので、それをここに貼り付けておきたいと思う。

* * *

静子さん、私はとうとう君を見つけた。君の方では気づかなんだけれど、私は君に出逢った場所から君を尾行して、君の邸を知ることが出来た。小山田という今の君の姓も分かった。君はまさか平田一郎を忘れはしないだろう。どんなに虫の好かぬ奴だったかを覚えていてるだろう。私は君に捨てられてどれ程悶えたか、薄情な君には分かるまい。悶えて悶えて、深夜君の邸の周りをさまよった事幾度であつたらう。だが、君は、私の情熱が燃え立てば燃え立つ程、益々冷かになつて行つた。私を避け、私を恐れ、遂には私を憎んだ。君は恋人から憎まれた男の気持を察することが出来るか。私の悶えが嘆きとなり、嘆きが恨みとなり、恨みが凝つて、復讐の念と変わつて行つたのが無理であろうか。君が家庭の事情を幸いに、一言の挨拶もなく、逃げるように私の前から消去した時、私は数日、飯も食わないで書齋に座り通していた。そして、私は復讐を誓つたのだ。私は若かつたので、君の行衛を探す術を知らなんだ。多くの債権者を持つ君の父親は、何人にもその行先を知らせないで、姿をくらましてしまった。私はいつ君に逢えるか分からなんだ。だが、私は長い一生を考えた。一生の間君に逢わないで済もうとはどうしても考えられなかつた。

私は貧乏だつた。食う為に働かねばならぬ身の上だつた、一つはそれが、あくまで君の行衛を尋ね廻ることを妨げたのだ。一年、二年、月日は矢のように過ぎ去つて行つたが、私はいつまでも貧困と闘わなければならなかつた。そして、その疲労が、忘れるともなく君への恨みを忘れさせた。私は食うことで夢中だつたのだ。だが、三年ばかり前、私に予期せぬ幸運が巡つて来た。私はあらゆる職業に失敗して、失望のどん底にある時、うさはらしに一遍の小説を書いた。それが機縁となつて、私は小説で飯の食える身分となつたの

だ。君は今でも小説を読んでるのだから、多分大江春泥という探偵小説家を知っているだろう。彼はもう一年ばかり何も書かないけれど、世間の人は恐らく彼の名前を忘れてはいない。その大江春泥こそかく言う私なのだ。君は、私が小説家としての虚名に夢中になって、君に対する恨みを忘れてしまったとも思うのか。否、否、私のあの血みどろな小説は、私の心に深き恨みを蔵していたからこそ書けたとも言えるのだ。あの猜疑心、あの執念、あの残虐、それらが悉く私の執拗なる復讐心から生まれたものだ」と知ったならば、私の読者達は、恐らく、そこに籠れる妖気に身震いを禁じ得なかつたであろう。

静子さん。生活の安定を得た私は、金と時間の許す限り、君を探し出す為に努力した。勿論君の愛を取戻そうなどと不可能な望みを抱いた訳ではない。私には已に妻がある。生活の不便を除く為に娶った形ばかりの妻がある。だが、私にとって、恋人と妻とは全然別個のものだ。つまり、妻を娶ったからと言って、恋人への恨みを忘れる私ではないのだ。

静子さん、今こそ私は君を見つけ出した。私は喜びに震えている。私の多年の願いを果たす時が来たのだ。私は長い間、小説の筋を組み立てる時と同じ喜びを以て、君への復讐手段を組み立てて来た。——君が最も苦しみ、また、君が最も怖がる方法を熟慮して来た。いよいよそれを実行する時が来たのだ。私の歓喜を察してくれ給え。

君は警察その他の保護を仰ぎ私の計画を妨げることは出来ない。私の方にはあらゆる用意が出来ているのだ。ここ一年ばかりというもの、新聞記者、雑誌記者の間に私の行衛不明が伝えられている。これは何も君への復讐の為にしたことではなく、私の厭人癖と秘密好みから出た韜晦なのだが、それが計らずも役に立った。私は一層の綿密さを以て世間から私の姿をくramsすであろう。そして、着々君への復讐計画を進めて行くであろう。

君は私の計画を知りたがっているに相違ない。だが、私は今その全体を洩らすことは出来ぬ。恐怖は徐々に迫って行く程効果があるからだ。しかし、君がたつて聞きたいと言うならば、私は私の復讐事業の一端を洩らすことを惜しむものではない。例えば、私は今から三日以前、即ち、一月三十一日の夜、君の家の中で君の身边に起こったあらゆる些事を、寸分の間違いもなく、君に告げることが出来る。

それは、午後七時より七時半まで、君は君たちの寝室にあてられている部屋の小机に凭れて小説を読んだ。小説は広津柳浪の短編集「変目伝」であった。七時半から七時四十分まで、女中に茶菓を命じ、風月の最中を二個、お茶を三碗喫した。七時四十分から上廁（便所）約五分にして、部屋へと戻る。それから九時十分頃まで、編物をしながら物思いに耽った。九時十分主人帰宅で、九時二十分頃から十時少し過ぎまで主人の晩酌の相手をして雑談した。その時君は主人に勧められて、グラスに半分ばかり葡萄酒を喫した。晩酌が終るとすぐ女中に命じて二つの床のべさせ、兩人上廁（便所）の後就寝する。それから十一時まで兩人とも眠らず、君が再び君の寢床に横たわった時君の家のおくれたポンポン時計が十一時を報じた。——君は、この汽車の時間表のように忠実な記録を読んで、恐怖を感じないでいられるだろうか。

二月三日深夜

我が生涯より恋を奪いし女へ

復讐者より

例えば、本文のその中に、「……私は君に捨てられて、どれ程悶え苦しんだか、薄情な君には分かるまい。悶えに悶えて、深夜君の邸の周りをさまよった事幾度であったろう。だが、君は、私の情熱が燃え立てば燃え立つ程、益々冷かになつて行つた。私を避け、

私を恐れ、遂には私を憎んだ。——君は恋人から憎まれた男の気持を察しることが出来るか。私の悶え（苦しみ）が嘆きとなり、その嘆きが恨みとなり、その恨みが凝つて、復讐の念と変わって行つたのが無理であろうか？」とある。これは、まさに「ストーカー心理」そのものである。——つまり、「……自分は、なぜ、そこまで嫌われ、また、なぜ、そこまで憎まなければならないのか！」と。私は、それがどうしても「許せない」という心理である。その結果、——君が最も苦しみ、また、君が最も怖がる方法で、愈々、その「復讐」を実行する時が来たということである。……これは、何度も繰り返すようであるが、これは、まさに「ストーカーの犯罪心理」そのものである。

また、有名な探偵作家「大江春泥」という人は、三年前に、突然、文壇に登場して来て、人気を博し、二年間、文筆活動をしたあと、彼はもう一年ばかり何も書いていないとある。これは、例えば、四年前、「……小山田氏が会社の要務を帯びて、二年ばかり海外に旅をし、帰国したのは一昨年暮れであり、その二年の間（夫の留守の間）、静子は、毎日、茶、いけ花、音楽などの師匠に通つて、独居の淋しさを慰めていたという」時期と、ぴったりと符合するのである。——つまり、静子は、夫が二年間海外に旅に出ている間、毎日、茶、いけ花、音楽等の稽古に通つて、独居の淋しさを慰めていたという名目で、実は、いわゆる「大江春泥」という作家名で、探偵小説などを書いていたのである。そして、一年前、夫が帰国したので、その時から文筆活動はやめているのである。つまり、恋人「平田一郎」も探偵作家「大江春泥」というのも、恐らく静子の「一人芝居」に過ぎないのであり、それゆえ、この「脅迫状」も、静子自身が書いたものであり、だからこそ、「……今から二日前、即ち、一月三十一日の夜、君の家の身辺に起つたあらゆる些事を、十分の間違ひもなく、君に告げることが出来る。（中略）、君は、この汽車の時間表の様に忠実な記録を読んで、恐怖を感じないでいられるだろうか」とあるが、それは、まさに「静子自身」が脅迫状を書いているからこそ、そういうことができ得るのである。

つまり、かつての恋人「平田一郎」という存在は、ほんとうに実在していて、しかも、実際に静子と「恋愛関係」があつたのかどうかは（最後まで）厳密にはよく分からないのであるが、しかし、少なくとも探偵作家「大江春泥」とその「妻」という存在は、静子が「勝手にでつち上げた架空の人物たち」であるとともに、それは、まさに「静子自身」が実際に自ら演じていたものになるのである。

*

*

ところで、平田の「脅しの手紙」は、その他に三通ばかりあつたが、いずれ大同小異で、（消印はどれも違つた局からであつたが）、復讐の呪詛の言葉のあとに、静子のある夜の行為が、細大漏らさず、正確な時間を附加えて記入してあることに変わりはなかつた。殊に、彼女の寝室での秘密は、どの様な淫靡な点までも、はれがましくもまざまざと描き出されていた。顔の赤らむ様なある仕草や、ある言葉さえもが冷静に描写してあつたのである。

静子は、その様な手紙を他人に見せることは、どれ程恥ずかしく苦痛であつたか、察するに余りあつたが、それを忍んでまで、彼女が私を相談相手に選んだのは、よくよくのことと言わねばならぬ。それは一方では、彼女が過去の秘密を、つまり、彼女が結婚以前既に処女でなかつたという事実を、夫の六郎氏に知られることを、どれ程恐れていたかというを示すものであり、同時にまた、一方では、彼女の私に対する信頼がどんなに厚いかを示すものでもあつたのである。

また、静子は、「……わたくし、主人側の親類の他には、身内と言つては一人もございませんし、お友達にこんなことを相談するような親身の方はありませんので、本当に不躓だとは思いましたけれど、わたくし、先生におすがりすれば、私がどうすればよいか、お教え下さるでしようと思いましたが、彼女にそんな風と言われると、この美しい女がこんなにも私を頼っているかと思うと、私は胸がワクワクするほど嬉しかった。私がおおえしゆんでい、探偵作家であったこと、少なくとも小説の上では、私が仲々巧みな推理家であったことなどが、彼女が私を相談相手に選んだ幾分の理由を為していたに相違ないが、それにしても、彼女が私に対して余程の信頼と好意を以ていないでは、こんな相談がかけられるものではないのだ。

言うまでもなく、私は静子の申出を容れて、出来るだけの助力をすることを承諾した。大江春泥が静子の行動を、これ程巨細に知る為には、小山田氏の召使を買収するか、彼自身が邸内に忍び込んで、静子の身近く身をひそめているか、またはそれに近い悪巧みが行なわれていたと考える他はなかった。彼の作風から推察しても、春泥はそんな変てこな真似をし兼ねない男なのだから。私はそれについて、静子に心当りを尋ねて見たが、不思議なことには、その様な形跡は少しもないということであった。召使達は気心の分かった長年住込みのものばかりだし、彼の邸の門や塀などは主人が人一倍神経質の方で、かなり嚴重に出来ているし、それに仮に邸内に忍び込めたところで、召使達の目にふれないで、奥まった部屋にいる静子の身辺に近づくことは、殆ど不可能ということであった。

つまり、「……大江春泥が静子の行動を、これ程巨細に知る為には……」、一つは、小山田氏の「召使」などを買収して、その静子の色々な「秘密の情報」などを得るという方法があるが、それは全面的に否定されている。そして、もう一方の、「……彼の邸の門や塀などは主人が人一倍神経質の方で、かなり嚴重に出来ているし、それに仮に邸内に忍び込めたところで、召使達の目にふれないで、奥まった部屋にいる静子の身辺に近づくことは、殆ど不可能ということであった」が、しかし、たった「一つ」だけその「方法」があったという展開になるのである。

五、大江春泥の作風と生活

そこで、探偵作家（寒川）は、先ず、大江春泥の所在をつきとめようとする。というのも、私は以前から私と正反対の傾向の春泥を、ひどく虫が好かなんだ。女の腐った様な猜疑に満ちた繰言で変態読者をやんやと言わせて得意がっている彼が無性に癩に触っていた。だから、あわよくば、彼のこの陰險な不正行為をあばいて、吠面をかかせてやりたいものだとさえ思っていた。ところが、彼の行衛（行動）を探ることが、あんなにも難しからうとは、まるで予想していなかった。

大江春泥は彼の手紙にもある通り今から四年ばかり前、商売違いの畑から突如として現われた探偵小説家であった。彼が処女作を発表すると、当時日本人の書いた探偵小説というものが殆どなかった読書界は、物珍らしさに非常な喝采を送った、大げさに言えば、彼は一躍にして読書界の寵児になってしまったのだ。彼は非常に寡作ではあったが、それでも色々な新聞雑誌に次々と新しい小説を発表して行った。それは一つ一つ、血みどろで、陰險で、邪悪で、一読肌に粟を生じる体の、不気味ないまわしいものばかりであったが、

それが却って読者を惹きつける魅力となり、彼の人気は仲々衰えなかった。

私も殆ど彼と同時ぐらいに、従来の少年少女から探偵小説の方へ鞍替えしたのであるが、そして人の少ない探偵小説界では、相当名前を知られるようになったのであるが、大江春泥と私とは、作風が正反対と言ってもいい程違っていた。彼の作風が暗く、病的で、ネチネチしていたに反して、私のは明るく、常識的であった。当然の勢いとして、私たちは妙に制作を競い合うような形になっていた。そして、お互いに作品をけなし合ひさえた。と言つても癢に触れることには、多くは私の方で、春泥は時たま私の議論を反駁して来ることもあつたが、大抵は超然として沈黙を守っていた。そして、次々と恐ろしい作品を発表して行つた。私はけなしながらも、彼の作に籠る一種の妖氣にうたれないではいらなかつた。彼は何かしら燃え立たぬ陰火のような情熱を持っていた。(それが彼の手紙にある様に静子への執念深い怨恨からであつたとすれば、やや肯くことが出来るのだが)、得体の知れぬ魅力が読者を捉えた。実を言うと、私は、彼の作品が喝采される毎に、言ひ様の無い嫉妬を感じずにはいられなかつた。私は子供らしい敵意をさえ抱いた。どうかして彼奴に打ち勝つてやりたいという願ひが、絶えず私の心の隅に蟠っていた。だが、彼は一年ばかり前から、ばつたりと小説を書かなくなり所在をさえくらましてしまつた。人氣が衰えたわけではなく、雑誌記者などは散々彼の行衛を探し廻つた程であつたが、どうしたわけか、彼はまるで行衛不明であつた。私は虫の好かぬ彼ではあつたが、さていなくなつて見れば、一寸寂しくもあつた。子供らしい言ひ方をすれば、好敵手を失つたという物足りなさが残つた。そういう大江春泥の最近の消息が、しかも極めて変てこな消息が、小山田静子によって齎されたのだ。私は恥ずかしいことだけれど、かくも奇妙な事情の下に、昔の競争相手と再会したことを、心密かに喜ばないではいられなかつた。

*

*

だが、大江春泥が探偵物語の組立てに注いだ空想を、一転して実行まで押し進めて行つたことは、考えて見れば、或いは当然の成行きであつたかも知れない。このことは世間でも大方は知っている筈だが、ある人が言つたように、彼は一個の「空想的犯罪生活者」であつた。彼は、丁度殺人鬼が人を殺すのと、同じ興味を以て、同じ感激を以て、原稿紙の上に彼の血みどろの犯罪生活を営んでいたのだ。彼の読者は、彼の小説につき纏つていゝ一種異様の鬼氣を記憶するであろう。彼の作物が常に、並々ならぬ猜疑心、秘密癖、残酷性を以て、満たされていくことを記憶するであろう。彼はある小説の中で、次のような不気味な言葉さえ洩らしていた。

「……遂に彼は單なる小説では満足できない時が来るのではあるまいか。彼はこの世の味気なさ、平凡さにあきあきして、彼の異常な空想を、せめては紙の上に書き現わすことを楽しんでいたのである。それが彼が小説を書き初めた動機だったのである。でも、彼は今、その小説にさえあきあきしてしまつたのです。この上は、彼は一体どこに刺激を求めたらよいのでしょうか。犯罪、アア、犯罪だけが残されてきました。あらゆることをし尽くした彼の前には、世にも甘美なる戦慄だけが残されてきました。……」

彼は又、作家としての日常生活に於ても、甚だしく風変わりであつた。彼の厭人病と秘密病は、作家仲間や雑誌記者の間に知れ渡つていた。訪問者が彼の書齋に通されることは極めて稀であつた。彼はどんな先輩にも平気で玄閑払いを喰わせた。それに、彼はよく転居したし、殆ど年中病氣と称して、作家の会合などにも顔を出したことがなかつたのであ

る。噂によると、彼は昼も夜も万年床の中に寝そべって、食事にしろ執筆にしろ、すべて寝ながらやっているということであった。そして、昼間も雨戸をしめ切って、熊と五燭の電燈をつけて、薄暗い部屋の中で、彼一流の不気味な妄想を描きながら、蠢いているのだということであった。

私は彼が小説を書かなくなつて、行衛不明を伝えられた時、ひよつとしたら、彼はよく小説の中で言っていたように、浅草あたりのゴミゴミした裏町に巢喰つて、彼の妄想を實行し始めたのではあるまいかと、ひそかに想像をめぐらしていたのだが、果たせるかな、それから半年もたたぬ内に、彼はまさしく一個の「妄想実行家」（小説の中の殺人ではなく、いまや現実の中での殺人を實行しよう）として、私の前に現われたのであった。

私は春泥の行衛を探すのには、新聞社の文芸部か雑誌社の外交記者に聞き合せるのが最も早道であると考えた。それにしても、春泥の日常が甚だしく風変わりで、滅多に訪問客にも会わなかつたというほどだし、雑誌社などでも、一応は彼の行衛を探したあとなのだから、よほど彼と昵懇であつた記者を捉えなければならぬのだが、幸いにも丁度おあつらえ向きの人物が、私の心易い雑誌記者の中にあつた。それはその道では敏腕の聞こえ高い博文館の本田という外交記者で、彼は殆ど春泥係りの様にして、春泥に原稿を書かせる仕事をやっていた時代があつたし、彼はその上、外交記者（事件を追つて社外で取材活動をする記者）だけあつて、探偵的な手腕も仲々あなどり難いものがあるのだ。

そして、本田の言う所によると、春泥は小説を書き始めた頃は郊外の池袋の小さな借家に住んでいたが、それから文名が上り、収入が増すに従つて、少しずつ手広な家へ（と言つても大抵は長屋だつたが）転々として移り歩いた。牛込の喜久井町、根岸、谷中初音町、日暮里、金杉等々、本田はそうして春泥の約二年間に転居した場所を七つほど列挙した。根岸へ移り住んだ頃から、春泥は漸く流行っ子となり、雑誌記者などが随分おしかけたものであるが、彼の人間嫌いはその当時から、いつも表戸をしめて、奥さんなどは裏口から出入りしていると言つた風であつた。折角尋ねても逢つてはくれず、居留守を使つておいて、あとから手紙で、「……私は人嫌いだから、要件は手紙で申送つてくれ」という詫状が来たりするので、大抵の記者はへこたれてしまい、春泥にあつて話をしたものは、ほんの数える程しかなかつた。小説家の奇癖には慣れっこになっている雑誌記者も、春泥の人嫌いを持余していた。

しかし、よくしたもので、春泥の細君というのが、仲々の賢婦人で、本田は原稿の交渉や催促なども、この細君を通じてやるが多かつた。でも、その細君に逢うのも仲々面倒で、表戸が締まっている上に、時には「病中面会謝絶」とか、「旅行中」とか、「雑誌記者諸君。原稿の依頼はすべて手紙で願います。面会はお断りです」などという手厳しい掛け札さえぶら下がっているのだから、さすがの本田も辟易して、空しく帰る場合も一度ならずあつた。そんな風だから、転居をしても通知を出すではなく、すべて記者の方で郵便物などを元にして探し出さなければならぬのであつた。

*

*

さて、探偵作家（寒川）は、先ず、大江春泥の所在をつきとめようとする。というのも、私は以前から私と正反対の傾向の春泥を、ひどく虫が好かなんだ。女の腐った様な猜疑に満ちた繰言で変態読者をやんやと言わせて得意がっている彼が無性に癩に触つて、だから、彼のこの陰險な不正行為をあばいてやりたいと思つたからであるが、彼の行衛（行

動)を探ることが、あんなにも難しかろうとは、まるで予想していなかったとある。

それは、彼は極度の人嫌いであり、世間に顔出しをせぬ男であったからである。つまり、彼の厭人病と秘密病は、作家仲間や雑誌記者の間に知れ渡っていた。また、彼はよく転居したり、殆ど年中病氣と称して、作家の会合などにも顔を出したことがなかったのである。それは、一体、なぜなのか？ それは、言うまでもなく、探偵作家「大江春泥」とは、すなわち、「静子自身」であったからである。そして、そのことを世間や夫に知られることを何よりも恐れていたとともに、もう一つは、静子自身にはもつと恐ろしい「密かな計画」があり、それを遂行するためにはどうしても必要不可欠な道具立てでもあったのである。また、「……春泥の細君というのが、なかなかの賢婦人で、本田は原稿の交渉や催促なども、その細君を通じてやるが多かった」とあるが、その「細君」も、当然のことながら、「静子自身」が変装して対応していたのである。一方、その「本田」という人物であるが、彼は、外交記者(事件を追って社外で取材活動をする記者)であり、また、彼は殆ど春泥係りの様にして、春泥に原稿を書かせる仕事をやっていた時代もあったので、その「本田」という人にも、いわゆる「春泥捜し」を手伝ってもらうことになるが、例えば、大江春泥は、時々変装なんかして浅草辺りをぶらつくという噂を聞いて、その浅草辺りを探り廻るようなこともするのであった。

六、新たな脅迫状

さて、問題の「春泥捜し」は、少しも進展しない状況のまま、やがて、静子から主人公(寒川)へ一本の電話がかかって来る。その「内容」は、次のようなものである。つまり、「……ある日小山田静子から私の宿へ電話がかかって、大変心配な事が出来たから、一度来て欲しい。主人は留守だし、召使達も、気の置けるような者は、遠方に使いに出し、待っているから」というのであった。彼女は自宅の電話を使わず、熊々自動電話からかけたらしく、彼女がこれだけのことを言うのに、非常にためらい勝ちであったものだから、途中で三分の時間が来て、一度電話が切れた程であった。

主人の留守を幸い、召使は使いに出して、ソツと私を呼び寄せるといふ、このなまめかしい形式が、一寸私を妙な気持にした。勿論それだからというのではないが、私はすぐさま承諾して、浅草山の宿にある彼女の家を訪ねた。小山田家は商家と商家の間を奥深く入った所にある。一寸昔の寮といった感じの古めかしい建物であった。正面から見たのでは分からぬけれど、多分裏を大川が流れているのではないかと思われた。——この「家の裏は大川」ということが、やがて起こる事件と深く関わって来るのである。

ところで、寮の見立てにふさわしくないのは、新しく建増したと見える、邸を取り囲んだ甚だしく野暮なコンクリート塀と(その塀の上部には盗賊除けのガラスの破片さえ植えてつけてあったが)母屋の裏の方にそびえている二階建ての西洋館であった。その二つのものが、如何にも昔風の日本建てと不調和で、黄金万能の泥臭い感じを与えていた。(この「二階建て」と「塀の上部に盗賊除けのガラスの破片が植えてつけてある」というのも、実は事件と「深い関係」を持って来るのである。)

さて、刺を通ずる(名刺を出して面会を求めると、田舎者らしい小女の取次で、二階建ての「西洋館」の方の「応接間」へと案内されたが、そこには静子が、ただならぬ様子

で待ち構えていた。彼女は幾度も幾度も、私を呼びつけた無駱を詫びたあとで、何故か小聲になって、「……先ずこれを見てくださいまし」と言つて、一通の封筒を差し出した。そして、何を恐れるのか、うしろを見る様にして、私の方へ寄つて来るのだった。それはやつぱり「大江春泥」からの手紙であつたが、内容がこれまでのものとは少々違つていたので、左にその全文を貼りつけて置くことにするとある。

*

*

静子、お前の苦しんでいる様子が目に見えるようだ。お前が主人には秘密で、私の行衛をつきとめようと苦心していることも、ちゃんと私は分かっている。だが、無駄だから止すがいい。たとえお前に私の脅迫を主人に打聞ける勇気があり、その結果警察の手を煩わしたところで、私の所在は分かりつこないのだ。私がどんなに用意周到な男であるかは、私の過去の作品を見ても分かるはずではないか。

さて、私の小手調べも、この辺で打ち切り時だろう。私の復讐事業は第二段に移る時期に達したようだ。それについて私は少く予備知識を与えておかねばなるまい。私がどうしてあんなにも正確に、夜毎のお前の行為を知ることが出来たか。もうお前にも大方想像がついているだろう。つまり、私はお前を発見して以来、影のようにお前の身辺につきまといつているのだ。お前の方からはどうしても見ることは出来ないけれど、私の方からはお前が家にいる時も、外出した時も、寸時の絶え間もなくお前の姿を凝視しているのだ。私はお前の影になり切つてしまったのだ。現に今、お前がこの手紙を読んで震えている様子をも、お前の影である私は、どこかの隅から、目を細めてじつと眺めているかも知れないのだ。

お前も知っている通り、私は夜毎のお前の行為を眺めている内に、当然お前達の夫婦仲の睦じさを見せつけられた。私は無論烈しい嫉妬を感じないではいられなかった。これは最初復讐計画を立てた時、勘定に入れて置かなかつた事柄だったが、しかし、そんな事が毫も私の計画を妨げなかつたばかりか、却つて、この嫉妬は私の復讐心を燃え立たせる油となつた。そして、私は私の予定にいささかの変更を加える方が、一層私の目的に就て有効であることを悟つた。というの外でもない。最初の予定では、私はお前を窺いに窺め抜き、恐わがらせに恐わがらせ抜いた上で、徐ろにお前の命を奪おうと思つていたので、此間からお前達の夫婦仲を見せつけられるに及んで、お前を殺すに先だつて、お前の愛している夫の命を、お前の目の前で奪い、それから、その悲歎を充分味わせた上で、お前の番にした方が、仲々効果的ではないかと考える様になつた。そして、私はそれに極めたのだ。だが慌てることはない。私はいつも急がないのだ。第一、この手紙を読んだお前が、充分苦しみ抜かぬ内に、その次の手段を実行するというのは、余りに勿体ないことだからな。

三月十六日深夜

復讐鬼より

静子殿

*

*

さて、今回の新たな「脅迫状」は、最初の「静子へのひたすらの恨み」とは違つて、それは、「……夜毎のお前の行為を眺めている内に、お前達の夫婦仲の睦じさに烈しく嫉妬して、お前を殺す前に、お前の愛する夫の命を奪うことに極めた」というものである。これは、一体、何を意味するのだろうか？　つまり、今回は、なぜか「夫婦仲の睦じさ」

を殊更に強調している。それは、一体、なぜなのか？ それは、静子の「真の「目的」は、実は「夫殺し」にあるのである。それゆえ、「夫婦仲の睦じさ」を殊更に強調しておく必要性が、何が何でもあったということである。というのも、「……夫が殺されて、最初に疑われるのは、誰でもない、それは、妻だからである」。——つまり、警察に、夫との「夫婦仲」は、どうだったと疑われた時に、二人の「夫婦仲」は、誰もが嫉妬するほどの「睦じさ」であったと、主人公（寒川）に心の底からそう言わせるための、つまり、「生き証人」に仕立てるための、まさに巧妙な「仕掛け」でもあるのです。それは、最初から今度の「脅迫状」に至る迄、夜毎の「夫婦の行為」を微に入り細に入るまで事細かに描き出すことによって、「夫婦仲の睦じさ」を徹底して主人公（寒川）の「頭の中」（或いは「心の中」）に刷り込ませ、静子が「疑われた時」に、「……彼女（静子）には、夫を殺す理由（動機）など何もない」と、主人公（寒川）に証言してもらうための、まさに巧妙な「仕掛け」でもあるのである。つまり、静子は、探偵小説家の「寒川」を巧みに利用して、まさに「夫殺し」の「完全犯罪」を綿密に計画して、それを今、現に実行しようとしているのである。

七、屋根裏からの時計の音

さて、春泥のこの残忍酷薄を極めた文言を読むと、私は流石にゾツとしないではないが、私には強いて平気を装いながら、「……この脅迫状は小説家の妄想に過ぎないことを繰り返して説く外はなかった」のです。すると、「……どうか、先生、もっとお静かにおっしゃって下さいまし」と言いながら、時々じつと一つ所を見つめて、耳をすます様な仕草をするのであった。そして、「……先生、わたくし、頭がどうかしたのではないかと思いますわ。でも、あんなことが本当だったのでしょか」と言うので、主人公（寒川）は、「……何かあったのですか」と聞くと、「……この家の中に平田さんがいるのでございます」と言うので、「……どこにですか」と、私は彼女の意味が呑込めないで、ぼんやりとしていた。すると、静子は思いきったように立ち上がって、真っ青になって、私をさし招くのです。それを見ると、私も何かしらワクワクして彼女のあとに従った。彼女は途中で私の腕時計に気付くと、何故か私にそれはずさせ、テーブルの上へ置きに帰った。それから、私たちは足音をさええ忍ばせて短い廊下を通過して、日本建ての方の静子の居間だという部屋へ入って行ったが、その襖を開ける時、静子は、すぐその向こう側に曲者が隠れてでもいるような恐怖を示した。

すると、主人公（寒川）は、「……変ですね。昼日中、あの男が御宅へ忍び込んでいるなんて、何かの思い違いやありませんか」と、私がそんなことを言いかけると、彼女はハッとされたようにそれを手真似で制して、私の手を取って、部屋の一隅へ連れて行くと、目をその上の天井に向けて、「……黙って聞いてごらん下さい」というような合図をするのだった。そして、「……時計のコチコチという音が聞こえませんか？」と、静子は聞き取れぬ程の小声で私に尋ねた。「……いいえ、時計って、どこにあるんです」と聞くと、静子はまた黙って、暫く聞き耳を立てていたが、やっと安心したものか、「……もう聞こえませんか」と言って、また私を招いて洋館の元の部屋に戻ると、彼女は異常な息づかいで、次のような妙なことを話し始めたのです。それは、次のようなものである。

* * *

彼女は、その時、居間で一寸した編物をしていたが、そこへ女中が先に貼り付けた春泥の手紙を持って来た。もうこの頃では、上封を見ただけで一目でそれと分かるようになっていたので、彼女はそれを受け取ると何とも言えぬいやなあ心持になったが、でも、開けて見ないでは、一層不安なので、怖々封を切って読んで見た。そして、事が主人の上に乗で及んで来たのを知ると、もうじつとしてはいられなかった。彼女は何故ということもななく立ち上がって、部屋の隅へ歩いて行った。そして、丁度箆筒の前に立止った時、頭の上から、非常に微かな地虫の鳴き声でもあるような物音が聞こえて来るように感じた。

「……私、耳鳴りではないかと思っただけですけれど、じつと辛抱して聞いていますと、耳鳴りとは違った、金のふれ会うような、カチ、カチという音が、確かに聞こえてくるのでございます」とある。(それでは、なぜここに「時計」が出て来るのか？ それは、春泥の手紙には「……必ず詳細な時刻が記されている。それは、この汽車の時間表のように忠実な記録とある様に、そのためには、春泥は、常に「懐中時計」を身につけていなければならず、その「時計」の音が天井裏から聞こえて来るということである。)

それは、その天井板の上に人が潜んでいるのだ。その人の胸の懐中時計が秒を刻んでいるのだ。としか考えられなかった。偶然彼女の耳が天井に近くなったのと、部屋が非常に静かであった為に、神経が鋭くなっていった彼女には、天井裏の微かな微かな金属の囁きが聞こえたのである。若しや違った方向にある時計の音が、光線の反射みたいな理屈で、天井からのように聞こえたのではないかと、その辺を隈なく調べて見たけれど、近くに時計など置いてなかった。

彼女はふと「……現に今、お前がこの手紙を読んで震えている様子をも、お前の影である私は、どこかの隅から、目を細めてじつと眺めているかも知れないのだ」という手紙の文句を思い出した。すると、丁度その天井が少しそり返って、隙間が出来ているのが彼女の注意を惹いた。その隙間の奥の方の真暗な中で、春泥の目が細く光っているようにさえ思われて来た。「……そこにいらつしやるのは、平田さんではありませんか」、その時、静子は、ふと異様な興奮に襲われた。彼女は思いきって、敵の前に身を投げ出すような気持ちで、ハラハラと涙をこぼしながら、屋根裏の人物に話しかけたのであった。

「……私、どんなになっても構いません。あなたのお気の済むように、どんなことでも致します。たといあなたに殺されても、少しもお恨みには思いません。でも、主人だけは助けてください。私はあの人に嘘をついたのです。その上私のためにあの人々が死ぬようなことになつては、私、あんまり空恐ろしいのです。助けてください。助けてください」と、彼女は小さな声ではあったが、心をこめてかき口説いた。だが、上からは何の返事も無いのだ。彼女は一時の興奮からさめて、気拔けたように、長い間そこに立ちつくしていた。しかし、天井裏にはやっぱり幽かに時計の音がしているばかりで、外には少しの物音も聞こえては来ないのだ。陰獣は闇の中で、息を殺して、啞のように黙り返っているのだ。その異様な静けさに、彼女は突然非常な恐怖を覚えた。彼女は矢庭に居間を逃げ出して、家の中にも居たたまらなくて、何の気でもあったか、表へかけ出してしまったと言うのだ。そして、ふと私のことを思い出すと、矢も盾もたまず、そこにあった自動電話に入ったというのであった。「これは、なぜ自宅の電話からではなく、家の外の「自動電話」からだったのかという疑問に答えている形になるが、実はもっと深い意味があり、それは、二

人が頻繁に連絡し合い逢っているようなことが家の者たちの噂となり夫にも知られるようになったら、それこそ凡ての「計画」(夫殺し)がぶち壊しになり兼ねないのであり、それゆえ、「……ある日小山田静子から私の宿へ電話がかかって、大変心配な事が出来たから、一度来て欲しい。主人は留守だし、召使達も、気の置けるような者は、遠方に使いにだし、待っているから」という言葉のこれがまさに「真意」になるのである。」

私は静子の話を聞いている内に、大江春泥の不気味な小説『屋根裏の遊戯』を思い出さないではいられなかった。若し静子の聞いた時計の音が錯覚でなく、そこに春泥がひそんでいたとすれば、彼はあの小説の思いつきを、そのまま実行に移したものであり、誠に春泥らしいやり方と肯くことが出来た。私は『屋根裏の遊戯』を読んでいただけに、この静子の一見突飛な話を、一笑に付し去ることが出来なかったばかりでなく、私自身激しい恐怖を感じないではいられなかった。私は屋根裏の暗闇の中で、真赤なとんがり帽と、道化服をつけた太つちょうの大江春泥が、ニヤニヤと笑っている幻覚をさえ感じた。

八、屋根裏の遊戯の探索

私たちは色々相談をした末、結局私が「屋根裏の遊戯」の中の素人探偵のように、静子の居間の天井裏へ上がって、そこに人のいた形跡があるかどうか、若し居たとすれば、一体どこから出入したのであるかを、確かめて見ることになった。静子は、「そんな気味の悪いことを」と言っただけに止めたけれど、私はそれをふり切って、春泥の小説から教わった通り、押入れの天井板をはがして、電燈工夫のようにその穴の中へもぐって行った。丁度屋敷には、さつき取次に出た少女の外に誰もいなかったし、その少女も勝手元の方で働いている様子だったから、私は誰に見とがめられる心配もなかったのだ。

屋根裏なんて、決して春泥の小説のように美しいものではなかった。古い家ではあったが、暮の煤掃の折、灰汁洗屋を入れて、天井板をはずしてすっかり洗わせたとのことで、ひどく汚くはなかったけれど、それでも、三月の間にはほこりも積んでいるし、蜘蛛の巣もはついていた。第一真暗でどうすることも出来ないで、私は静子の家にあった手提電燈を借りて、苦心をして梁を伝いながら、問題の箇所へ近づいて行った。そこには、天井板に隙間が出来ていて、多分灰汁洗いをしたために、そんなに板がそり返ったのである。下から薄い光がさしていたので、それが目印になった。だが、私は半間も進まぬうちにドキンとするようなものを発見した。私はそうして屋根裏に上がりながらも、実はまさかまさかと思っていたのだが、静子の想像は決して間違っていないかったのだ。そこには梁の上にも、天井板の上にも、確かに最近人の通ったらしい跡が残っていた。私はゾーツと寒気を感じた。小説を知っているだけで、まだ逢ったことのない、毒蜘蛛のような、あの大江春泥が、私と同じ恰好で、その天井裏を這い廻っていたのかと思うと、私は一種名状しがたい戦慄に襲われた。私は堅くなって、梁のほこりの上に残った手だか足だかの跡を追って行った。時計の音のしたという場所は、なるほど、ほこりがひどく乱れて、そこに長い間人のいた形跡があった。

私はもう夢中になって、春泥と覚しき人物のあとをつけ始めた。彼は殆ど家中の天井裏を歩き廻ったらしく、どこまで行っても、梁の上のほこりの痕は尽きなんだ。そして、静子の居間と静子等の寝室の天井に、板のすいた所があつて、その箇所だけはほこりが余

計に乱れていた。

私は屋根裏の遊戯者を真似て、そこから下の部屋を覗いてみたが、春泥がそれに陶醉したのも決して無理ではなかった。天井板の隙間から見た「下界」の光景の不思議さは、誠に想像以上であった。殊にも、丁度私の目の下にうなだれていた静子の姿を眺めた時には、人間というものが、目の角度によっては、こうも異様に見えるものかと驚いた程であった。われわれはいつも横の方から見られつけているので、どんなに自分の姿を意識している人でも真上から見た恰好までは考えてはいない。そこには非常な隙がある筈だ。隙があるだけに少しも飾らぬ生地のままの人間が、やや不恰好に暴露されているのだ。静子の艶々した丸髻には、(真上から見た丸髻というものの形からして、すでに変であったが)前髪と髻との間の凹みに、薄くではあったが、ほこりが溜って、外の綺麗な部分とは比較にならない程汚れていたし、曲げに続く項の奥には、着物の襟と背中との作る谷底を真上から覗くので、背筋の凹みまで見えて、そして、そのねっとり蒼白い皮膚の上には例の毒々しい蚯蚓腫れが、ずつと奥の暗くなつて見えぬ所までも、いたいたしく続いているのだ。上から見た静子は、やや上品さを失つたようではあったが、その代わりに、彼女の持つ一種不可解なオブシニティ(卑猥さ)が一層濃く私に迫ってくるのを感じた。

それはともかく、私は何か大江春泥を証拠立てるようなものが残されていないかと、手提電燈の光を近づけて、梁や天井の上を調べ廻ったが、手型も足跡も、皆曖昧で、無論指紋などは識別されなかった。春泥は定めし『屋根裏の遊戯』をそのままに、足袋や手袋の用意を忘れなかったのである。ただ一つ、丁度静子の居間の上の、梁から天井をつるした支え木の根元の、一寸目につかぬ場所に、小さな鼠色の丸いものが落ちていた。艶消の金属で、うつろな碗の形をしたボタンみたいなもので、表面にR・K・BROS・CO・という文字が浮彫りになっていた。それを拾った時私は直ぐさま『屋根裏の遊戯』に出て来るシャツのボタンを思い出したが、しかし、その品はボタンにしては少し変だった。帽子の飾りか何かではないかとも思っただけれど、確かなことは分からぬ。あとで静子に見せても、彼女も首をかしげるばかりであった。

*

*

無論私は、春泥がどこから天井裏に忍び込んだかという点をも綿密に調べて見た。ほこりの乱れた跡をしたって行くと、それは玄関横の物置きの上で止まっていた。物置きの粗末な天井板は、持上げて見ると難なくとれた。私はそこに投込んである椅子のこわれを足場にして、下におり、内部から物置きの戸を開けて見ると、その戸には錠前がなくて、訳もなく開いた。そのすぐ外には、人の背よりは少し高いコンクリートの塀があった。恐らく大江春泥は、人通りのなくなつた頃を見はからつて、この塀をのり越え、(塀の上には前にも言ったようにガラスの破片が植えてあつたけれど、計画的な侵入者にはそんなものは問題ではないのだ)今の錠前のない物置から屋根裏へ忍び込んだものである。

そうしてすっかり種が分かつてしまうと、私は聊かあつけない気がした。不良少年でもやりそうな、子供らしい悪戯じゃないかと、相手を軽蔑してやりたい気持ちだった。妙な得体の知れぬ恐怖がなくなつて、その代りに現実的な不快ばかりが残った。(だが、そんな風に相手を軽蔑してしまつたのは、飛んでもない間違いであつたことが、後になつて分かつた)静子は無性に恐がつて、主人の身には換えられぬから、彼女の秘密を犠牲にしても、警察の手を煩わす方がよくはないかと言ひ出したが、私は相手を軽蔑し始めてい

たものだから、彼女を制して、まさか『屋根裏の遊戯』にある天井から毒薬をたらすような、馬鹿馬鹿しい真似が出来るはずはないし、天井裏へ忍び込んだからと言って、人が殺せるものではない。こんな怖がらせは、如何にも大江春泥らしい稚氣で、こうしてさも何か犯罪を企んでいるように見せかけるのが、彼の手ではないか。高が小説家の彼に、それ以上の実行力があるとは思われぬ。という風に彼女を慰めたのであった。そして、余り静子が恐がるものだから、気休めに、そんなことを好きな私の友達を頼んで、毎夜物置きあたりの辺の掘外を見張らせることを約束した。静子は丁度西洋館の二階に客用の寢室があるのを幸い、何か口実を設けて、自分彼女達夫婦の寢間をそこへ移すことにすると言っていた。西洋館なれば、天井の隙見など出来ないのだから。

そして、この二つの防御方法は、その翌日から実行されたのであったが、だが、陰獣大江春泥の恐るべき魔の手は、そのような姑息手段を無視して、それから二日後の三月十九日深夜、彼は予告を厳守して、遂に第一の犠牲者を屠ったのである。小山田六郎氏の息の音を絶ったのであった。

九、屋根裏の遊戯 其のまとめ

さて、静子は、居間で縫物ぬいものをしていた時、女中が「春泥の手紙」を持って来たので、怖々封を切つて読んでみると、前述のような内容であり、もうじつとしておられず、何とはなく部屋の隅へと歩いて行くと、頭の上から、「……金のふれ合う様な、カチ、カチつていう音が、非常に幽かであるが、確かに聞こえて来た」と言うのであった。そこで、主人公（寒川）は、「……結局、私が『屋根裏の遊戯』の中の素人探偵の様に、手提電燈を持ち、静子の居間の天井裏へ上つて、そこに人のいた形跡があるかどうか、若し居たとすれば、一体どこから出入したのかなどを、確かめて見る事になった」とある。そして、そこには梁の上にも、天井板の上にも、確かに最近人の通つたらしい跡が残っていた。私はもう夢中になって、そのあとをつけ始めた。彼は殆ど家中の天井裏を歩き廻つたらしく、どこまで行つても、梁の上のほこりの痕は尽きない。そして、静子の居間と静子等の寢室の天井に、板のすいたところがあり、その箇所だけほこりが余計に乱れていた。

むろん、それは、静子自身、事前に天井裏を歩いて、手足の痕を付けておいたものであるが、それは、なぜかと言え、それは、言うまでもなく、大江春泥は、天井裏から「夫婦の行為」を覗いていたからこそ、脅迫状にあるような「事細かな描写」も可能だったとするためである。——そして、主人公（寒川）は、下の部屋を覗いてみたが、天井板の隙間から見た「下界」の光景の不思議さは、誠に想像以上であった。人間というものが、目の角度によつては、こうも異様に見えるものかと驚いた程であった。そこには少しも飾らぬ生地きじのままの人間が、そのまま暴露されているのだ。上から見た静子は、やや上品さを失つた様ではあったが、その代わりに、彼女の持つ一種不可思議なオブリニティ（卑猥さ）が一層色濃く私に迫つて来るのを感じた。そして、丁度静子の居間の上のところ、小さな鼠色の丸い釦が一つ落ちていた。そして、ほこりの乱れた痕を辿つて行くと、それは玄関横の物置きの上で止まっていて、物置きの粗末な天井板は、持ち上げると難なくとれた。恐らく、大江春泥は、人通りのなくなった頃を見はからい、人の背よりは少し高いコンクリートの塀を乗り越えて、錠前のない物置きから、屋根裏に忍び込んでいたので

ある。そこで、(怖がる) 静子は、(もちろん、夫には平田や春泥のことなど何も言わないで)、何か他の口実をつけて、西洋館の二階に「客間の寝室」があるので、夫婦の「寝室」をそちらへと移したのである。西洋館ならば、天井からの隙見も出来ないからである。

しかし、この表面的には「何気ない変化」(つまり洋館の「二階に寝室」を移すということ)こそは、静子が密かに計画していた、その夫殺しの「完全犯罪」を完成させるためには、何が何でも必要不可欠の、まさに「必須の条件」だったのである。

そして、脅迫から二日後の三月十九日深夜、彼の予告の通り、第一の犠牲者として、小
山田六郎氏の息の根を絶つたのである

十、六郎氏変死事件

さて、主人公(寒川)は、春泥の手紙には六郎氏殺害の予告に附加えて、「……だが慌てることはない。わたしはいつも急がないのだ」という文句があった。それにも拘らず、彼はどうしてあんなに慌てて、たった二日しか間を置かないで、強行を演じることになったのだろうか。それは或は、わざと手紙では油断をさせて置いて、意表に出るといふ、一種の策略であつたかも知れないのだが、私はふともっと別の理由があつたのではないかと疑つた。静子が時計の音を聞いて、屋根裏に春泥が潜んでいると信じ、涙を流して六郎氏の「命乞い」をしたということを聞いた時、已に私はそれを虞れたのだが、春泥はこの静子の純情を知るに及んで、一層激しい嫉妬を感じ、同時に身の危険をも悟つたに相違ない。そして、「……よし、それ程お前の愛している亭主なら、長く待たさないうで、早速やつつけて上げることにしよう」という気持ちにもなつたのだろうかと推察する。(勿論、そうではなく、寒川に屋根裏を探らせて、実際に屋根裏に春泥の痕跡があつたと信じ込ませ、そこに鉤を一つ落としておく。また、夫婦の「寝間」を洋館の二階の寝室へと移すことにより、完全犯罪への凡ての要件が出揃つたので犯行を遂行したのである)。それは兎も角、小山田六郎氏の変死事件は、極めて異様な状態に於て発見されたのである。

*

*

では、その変死事件の「経緯」であるが、それは、次のようなものである。「……私は静子からの知らせで、その日の夕刻小山田家に駆けつけ、初めて凡ての事情を聞き知つたのであるが、六郎氏は、その前日、別段変わった様子もなく、いつもより少し早めに会社から帰宅して、晩酌を済ませると、川向うの小梅の友人の所へ、暮を囲みに行くのだと言つて、暖い晩だったので大島の裕に鹽瀬の羽織だけで、外套も着ず、ブラリと出掛けた。それが午後七時頃のことであり、遠い所でもないのに、彼はいつもの様に、散歩旁々、吾妻橋を迂回して、向島の土手を歩いて行つた。そして、小梅の友人の家に十二時頃までいて、やはり徒歩でそこを出たという所まではハッキリ分かっているが、それから先が一切不明なのである。——一晩待ち明かしても、帰りがないので、しかもそれが丁度大江春泥から恐ろしい予告を受けていた際なので、静子は非常に心をいため、朝になるのを待ち兼ねて、知っている限り、心当りの所へ電話や使いで聞き合わせたが、どこにも立ち寄つた形跡がない。彼女は無論私の所へも電話をかけたのだけれど、丁度その前夜から私は宿を留守にしている、やっと夕方頃帰つたので、この騒動は少しも知らなかつたのである。やがて、いつもの出勤時刻が来ても、六郎氏は会社へも顔を出さない。会社の方でも色々手

を尽くして探してみたが、どうしても行衛が分らぬ。そんなことをしている内に、もうお昼近くになってしまったが、丁度そこへ『象潟警察』から電話があつて、六郎氏の変死を知らせて来たのであつた。……

それは、三月二十日の朝八時頃、浅草仲店の商家の若いお神さんが、千住へ用達しに行く為、吾妻橋の汽船発着所へ来て、船を待合せる間に、女の便所（下は川水）に入つたが、入つたと思うと、キヤツと悲鳴を上げて飛び出して来た。切符売りのお爺さんが聞いて見ると、便所の長方形の穴の真下に、青い水の中から、一人の男の顔が彼女の方を見上げていたと言ふのだ。切符売りのお爺さんは、最初は、船頭か何かの悪戯だと思つたが、（そういう水の中の出歯亀事件は、時たま無いでもなかったもので）、とにかく便所へ入つて調べて見ると、やつぱり穴の下一尺ばかりの所に、ポツカリと人の顔が浮いていて、水の動揺につれて、顔が半分隠れるかと思うと、またヌツと人の顔が現われる。まるでゼンマイ仕掛けの玩具のようで、凄じつたらなかつたと、あとになつて爺さんが話した。

それが人の死骸だと分かると、爺さんは俄かに慌て出して、大声で発着所にいた若い者を呼んだ。船を待合せていた客の中にも、いなせな肴屋さんなどがいて、若い者と共力して死体引上げにかかったが、便所の中からは逆も上げられないので、外側から竿で死骸を広い水の上までつき出した所が、妙なことには、死骸は猿股一つ切りで、丸裸体なのだ。四十前後の立派な人品だし、まさかこの陽気に隅田川で泳いでいたとも受取れぬので、変だと思つて尚よく見ると、どうやら背中に刃物の突傷があるらしく、水死人にしても水も含んでいない様な鹽梅なのだ。ただの水死人ではなくて殺人事件だと分かると、騒ぎは一層大きくなつたが、さて、水から引上げる段になつて、又一つ奇妙なことが発見された。それは、知らせによつて駆けつけた花川戸交番の巡査の指図で、発着所の若い者が、もじやもじやした死骸の頭の毛を掴んで引上げようとすると、その頭髮が頭の地肌から、ズルズルとはがれて来たのだ。若い者は、余りに気味悪さに、ワツと言つて手を離してしまつたが、入水してからそんなに時間が経っている様でもないもので、髪の毛がズルズルむけて来るのは変だと思つて、よく調べて見ると、何のことだ、髪の毛だと思つたのは、鬘で、本人の頭はテカテカに禿げ上がつていたのであつた。

これが静子の夫であり、碌々商会の重役である小山田六郎氏の、悲惨な亡骸であつたのだ。つまり、六郎氏の死体は、裸体にされた上、禿頭にふさふさとした鬘まで冠せて、吾妻橋下に投込まれていたのであつた。しかも、死体が水中で発見されたにも拘らず、水を呑んだ形跡はなく、致命傷は背中の中の左肺部に受けた、鋭い刃物の突傷であり、致命傷の外に数ヶ所浅い突傷があり、犯人は幾度も突きそこなつたものに相違なかつた。警察医の検診によると、その致命傷を受けた時間は、前夜の深夜一時頃らしいということであつたが、何分死体には着物も持物もないので、何所の誰とも分からず、警察でも途方に暮れていた所へ、幸いにも昼頃になつて、小山田氏を見知るものが現われたので、早速、小山田邸と碌々商会へと、電話をかけたということであつた。

十一、寒川の最初の推理

夕刻、私が小山田家を訪ねた時には、六郎氏側の親戚の人達や、碌々商会の社員、故人の友人などがつめかけていて、家の中は非常に混雑していた。丁度今し方警察から帰つた

所だと言つて、静子はそれらの見舞客にとり囲まれて、ぼんやりとしていた。六郎氏の死体は、都合によつては解剖に附せなければならぬと言うので、まだ警察から下渡されず、仏壇の前に白布で覆われた台には急拵えの位牌ばかりが置かれ、それに物々しく香華がたむけてあつた。

私はそこで、静子や会社の人から、右に述べた死体発見の顛末を聞かされたのであるが、私は春泥を軽蔑し、二三日前静子が警察に届けようと言つたのを止めたばかりに、この様な不祥事を惹起したかと思うと、恥と後悔とで、座にもいたたまれぬ思いがした。私は下手人は大江春泥の他にはないと思つた。春泥はきつと、六郎氏が小梅の碁友達の家を辞して、帰途、吾妻橋を通りかかった折、彼を汽船発着所の暗がりへ連れ込み、そこで凶行を演じ、死体を河中へ投棄したものに相違ない。時間の点から言つても、春泥が浅草辺りにうろろろしていたという本田の言葉から察しても、いや現に彼は六郎氏の殺害を予告さえしていたのだから、下手人が春泥であることに、疑を挟む余地はないのだ。だが、それにしても、六郎氏は何故真裸体になつていたのか、また変な鬘などを冠つていたのか、若しそれも春泥の仕業であつたとすれば、彼は何故そのような途方もない真似をしなければならなかつたのか、洵に不思議という他はなかつた。

*

*

さて、主人公（寒川）の「最初の推理」は、帰途、吾妻橋を通りかかった時に、彼を汽船発着所の暗がりへ連れ込み、そこで凶行に及び、その死体を河中へ投棄したとともに、下手人は、春泥であることに、疑を挟む余地はないと考えるのであつた。そして、今度は、静子の番に違いないと考えると、静子と主人公（寒川）は、二人して春泥に脅迫されていたことを警察に届け出て、保護を求めることになるのである。

十二、洋館の硝子窓に人の影

さて、私は折を見て、静子と私だけが知っている秘密について相談する為に、「ちよつと」と言つて、彼女に別室へ来てもらつた。静子はそれを待つていたように、一座の人に会釈すると、急いで私のあとに従つて来たが、人目がなくなると、「先生」と小声で叫んで、いきなり私にすがりつき、じつと私の胸の辺を見つめていたかと思うと、長いまつげが、ギラギラと光つて、まぶたの間がふくれ上がったと見るまに、それがやがて大きな水の玉になつて、蒼白い頬の上を、ツルツ、ツルツと流れるのだ。涙はあとからあとからと、ふくれ上がつて来ては、止めどもなく流れるのだ。

「……僕はあなたに、何と言つてお詫びをしていいか分からない。全く僕の油断からです。あいつにこんな実行力があるうとは、本当に思いがけなかつた。僕が悪いのです。僕が悪いのです……」と、私もつい感傷的になつて、泣き沈む静子の手をとると、力づけるように、それを握りしめながら、繰り返し繰り返し詫言をした。（私が静子の肉体にふれたのは、あの時が初めてだった。そんな際ではあつたけれど、私はあの青白く弱々しい癖に、芯の方で火でも燃えているのではないかと思われる、熱っぽく弾力のある彼女の手先の、不思議な感触をはつきりと意識し、いつまでもそれを覚えていた）とある。

そして、「……それで、あなたはあの脅迫状のことを、警察でおっしゃいましたか」と、私は静子の泣き止むのを待つて聞いた。「……いいえ、私どうしていいか分からなかつた

ものですから」と答えると、「……まだ言わなかったのですね」、「……ええ、先生に御相談しようと思つて」と、あとから考えると変だけれど、私はその時もまだ静子の手を握つていた。静子もそれを握られたまま、私にすがる様にして立っていた。「……あなたも無論、あの男の仕業だと思つているのでしよう」、「……ええ、それに、昨夜妙なことがありましたの」、「……妙なことつて」、「先生のご注意で、寢室を洋館の二階に移しましたでしょう。これで、もう覗かれる心配はないと安心していたのですけれど、やっぱりあの、覗いていた様ですの」と言うので、「……どこからです」と聞くと、「……ガラス窓の外から」と。そして、静子はその時の怖かったことを思い出したように、目を大きく見開いて、ポツリポツリと話すのであった。「……昨夜は十二時頃、ベットに入ったのは入ったのですけれど、主人が帰らないものですから、心配で心配で、それに天井の高い洋室にたった一人でやすんでいますので、怖くなつて来て、妙に部屋の隅々が眺められるのです。窓のブラインドが、一つだけおり切つていないで、一尺ばかり下があいているので、そこから真暗な外の見えているのが、もう怖くつて、怖いと思えば、余計その方へ眼が行つて、しまいには、そのガラスの向うに、ぼんやり人の顔が見えて来るじゃありませんか」、「……幻影じゃなかったのですか」と聞くと、「……少しの間で、直ぐ消えてしまいましたけれど、今でも私、見違いやなんかではなかったと思つていますわ。もじやもじやした髪の毛をガラスにピツタリくつつけて、うつむき気味になつて、上目使いにじつと私の方を睨んでいたのが、まだ見える様ですわ」と言う。「……平田でしたか」と聞くと、「……ええ、外にそんな真似をする人なんて、ある筈がないのですもの」と言う。

私達は、その時、こんな風の会話を取交したあとで、六郎氏の殺人犯人が大江春泥の平田一郎に相違ないこと、彼がこの次には静子をも殺害しようと企んでいることを、静子と私とが同道で警察に申出て、保護を願うことに話を極めた。——この事件の係りの検事は、糸崎という法学士で、幸いにも私たち探偵作家や医学者や法律家などで作つている猟奇会の会員だったので、私が静子と一緒に、所謂捜査本部である象潟警察へ出頭すると、検事と被害者の家族というような、しかつめらしい関係ではなく、友達のつき合いで、親切に私達の話聞き取つてくれた。彼もこの異様な事件には余程驚いた様子で、また深い興味をも感じたらしかったが、ともかく全力を尽して大江春泥の行衛を探させること、小山田家には特に刑事を張り込ませ、巡査の巡回の回数を増して、充分静子を保護するという約束してくれた。大江春泥の人相については、世に流布している写真は余り似ていないという私の注意から、博文館の本田を呼んで、詳しく彼の知っている容貌を聞き取つたのであった。

*

*

さて、この「場面」で最も大事なところは、静子の、「……やっぱりあの、覗いていた様ですの、(洋館二階の)ガラス窓の外から」という言葉であり、それは、「……昨夜は十二時頃、ベットに入ったのは入ったのですけれど、主人が帰らないものですから、心配で心配で、それに天井の高い洋室にたった一人でやすんでいますので、怖くなつて来て、妙に部屋の隅々が眺められるのです。窓のブラインドが、一つだけおり切つていないで、一尺(約三十センチ)ばかり下があいているので、そこから真暗な外の見えているのが、もう怖くつて、怖いと思えば、余計その方へ眼が行つて、しまいには、そのガラスの向うに、ぼんやり人の顔が見えて来るじゃありませんか」、「……少しの間で、直ぐ消えてしま

ましたけれど、今でも私、見違いやなんかではなかったと思っていますわ。もじやもじやした髪の毛をガラスにピツタリくつつけて、うつむき気味になって、上目使いにじつと私の方を睨んでいたのが、まだ見える様ですわ」、「……平田でしたか」と聞かれて、「……ええ、外にそんな真似をする人なんて、ある筈がないのですもの」と言うのであった。

さて、静子のこのような「昨夜の出来事」というのは、もちろん、実際にはなかった「大うそ」ではあるが、それでは、何のためにこのような「大うそ」を言ったのか？ それは、次のようなことである。——つまり、静子は、密かに夫殺しの「完全犯罪」を綿密に計画していたのである。そして、その「静子」という女性は、探偵小説家「寒川」の書く小説の愛読者でもあり、それゆえ、探偵小説家「寒川」の「推理の仕方」(その「特徴や傾向」)などは、よく熟知していたのである。そこで、探偵作家「大江春泥」でもある「静子」は、探偵小説家「寒川」であれば、こういう様々な「材料」を与えれば、必ず、こういうふう「推理」するだろうという、そういう「筋立て」を考えに考え抜いて、まさに夫殺しの「完全犯罪」を密かに狙っていたのである。

そして、主人公(寒川)の最初の本格的な「推理」では、まさに静子の「思惑」(計画)通りに、「……(洋館二階の)ガラス窓の外から、もじやもじやした髪の毛をガラスにピツタリくつつけて覗いていた」のは、実は「平田一郎」(大江春泥)などではなく、むしろ「小山田六郎氏」であり、その時、誤って足を踏み外し、下の大川へと落ちて、その死体が吾妻橋の汽船発着所へと流れ着いたという「推理」へと誘い込むのである。

十三、事件から約一ヶ月間

さて、約一ヶ月間、警察は全力を上げて大江春泥を搜索していたし、私も本田に頼んだり、其外の新聞記者や雑誌記者など、逢う人毎に、春泥の行動について、何か手掛かりになるような事実を聞き出そうと骨折っていたにも拘らず、春泥は如何なる魔法を心得ていたのであるか、杳としてその行動が分からないのであった。彼一人なれば兎も角、足手纏いの細君と二人連れで、彼はどこにどうして隠れていたのであるか。彼は果して、糸崎検事が想像したように密航を企てて、遠く海外に逃げ去ってしまったのだろうか。

それにしても、不思議なのは、六郎氏変死以来例の脅迫状がばったり来なくなってしまうことであつた。春泥は、警察の探索が怖くなつて、当の目的であつた静子の被害を思い止まり、ただ身を隠すことに汲々としていたのであるうか。いや、いや、彼のような男に、その位のことを予め分らなかつた筈はない。とすると、彼は今もなお東京のどこかに潜伏していて、じつと静子殺害の機会を窺っているのではなからうか。(もちろん、これらの疑問《絡繰り》は、やがて解明《解かれて行く》ことになるが、ただ、真の目的は、「静子殺し」にあるのではなく、むしろ「夫殺し」にあつたということである。)

*

*

さて、象潟警察長は、部下の刑事に命じて、嘗て私がした様に、春泥の最後の住居であつた上野桜木町三十二番地付近を調べさせたが、流石に専門家である、その刑事は苦心の末春泥の引越し荷物を運搬した運送店を発見して(それは同じ上野でもずっと隔つた黒門町辺の小さな運送店であつたが)それからそれへと彼の引越し先を追つて行つた。その結果分かつた所によると、春泥は桜木町を引払つてから、本所区柳島町、向島須崎

町と、段々品の悪い所へ移って行って最後の須崎町などはバラック同然の、工場と工場にはさまれた汚らしい一軒建ちの借家であったが、彼はそこに数ヶ月の前家賃で借り受け、刑事が行った時にも、家主の方へはまだ彼が住まっていることになっていたが、家の中を調べて見ると、道具も何もなく、はこりだらけで、いつから空家になっていたか分からぬほど、荒れ果てていて、春泥の行方は一向要領を得なかったのである。

一方、博文館の本田は本田で、彼は段々様子が分かって来ると、根がこうしたことの好きな男だものだから、非常に乗気になってしまつて、浅草公園で一度春泥に合つたのを元にして、原稿取りの仕事の暇々には、熱心に探偵の真似事を始めた。彼は先ず、嘗て春泥が広告ビラを配っていたことから、浅草付近の広告屋を、二、三軒歩き廻つて、春泥らしい男を傭つた店はないかと調べて見たが、困つたことには、それらの広告屋では忙しい時には、浅草公園あたりの浮浪人を、臨時に傭つて、衣装を着せて一日だけ使うような事もあるので、人相を聞いても思い出せぬところを見ると、あなたの探していらつしやるのも、きつとその浮浪人の一人だったのでしよう。ということであつた。

そこで、本田は今度は、深夜の浅草公園をさまよつて、暗い木陰のベンチなどを一つ一つ覗き廻つて見たり、浮浪人が泊まりそうな本所あたりの木賃宿へ、わざわざ泊まり込んで、その宿泊人達と懇意を結んで、若しも春泥らしい男を見かけなかつたかと尋ね廻つて見たり、それはそれは苦勞をしたのであるが、いつまでたつても、少しの手掛かりさえ掴むことは出来なかつた。

本田は、一週間に一度ぐらひは私の宿に立ち寄つて、彼の苦心談を話して行くのであつたが、ある時、彼は大黒様のような顔をニヤニヤさせて、こんな話をしたのである。「……寒川さん、僕の間ふつと、近頃蜘蛛女だとか首ばかりで胴のない女だという見世物が、方々ではやっているのを知つていよう。あれと類似のものでね。首ではなくて、反対に胴ばかりの人間つていう見世物があるんですよ。横に長い箱があつて、それが三つに仕切つてあつて、二つの区切りの中に、大抵は女なんです。胴と足とが寝ているのです。そして、胴の上に当る一つの区切りはガランドウで、そこに首から上（顔の部分）が見えていなければならぬのに、それがまるつきりないのです。

つまり、女の首なし死体が長い箱の中に横たわつていて、しかも、そいつが生きている証拠には、時々手足を動かすのです。とても不気味で、かつまたエロテイクな品物ですよ。種は例の鏡を斜めに置いて、そのうしろをガランドウの様に見せかける、幼稚なものだけれど、ところが、僕はいつか牛込の江戸川橋ね。あの橋を護国寺の方へ渡つた角の所の空き地で、その首なしの見世物を見たんですが、そのの胴ばかりの人間は、ほかの見世物のような女ではなくて、垢で黒光りに光つた道化服を着たよく太つた男だったので」

「……分かるでしょう、僕の考えが。僕はこう思つたのです。一人の男が、万人に身体を晒しながら、しかも完全に行衛をくramsす一つの方法として、この見世物の首から上を隠して一日寝ていればいいのです。これは如何にも大江春泥の考えつきさうなお化けじみた韜晦法（姿を隠す方法）じゃないでしょうか。事に、春泥はよく見世物の小説を書いたし、この類のことは大好きなんですかね」とあるが、これは、まさに「江戸川乱歩自身が大好き」ということになるのだから。

そこで、僕は早速江戸川橋の所へ行って見たんですが、仕合せとその見世物はまだありません。僕は木戸（銭）を払つて中へ入り、例の太つた首無し男の前に立つて、どうすれ

ばこの男の顔を見ることが出来るかと、色々考えて見たんです。で、気づいたのは、この男だつて一日に幾度かは便所へ立たなければならぬだろうということでした。僕は、その一つの便所へ行くのを、気長く待ち構えていたんです。暫くすると多くもない見物が皆出て行つてしまつて、僕一人になった。それでも辛抱して立っていますとね。首なし男が、ポンポンと拍手を打つたのです。妙だなと思つてみると、説明をする男が、僕の所へやつて来て、一寸休憩をするから外へ出てくれと頼むのです。そこで、僕はこれだなと感づいて、外へ出てから、ソツとテント張りのうしろへ廻つて、布の破れ目から中を覗いてみると、首なし男は、説明者に手伝つてもらつて箱から外へ出ると、無論首はあつたのですが、見物席の土間の隅の所へ走つて行つて、シヤアシヤアと始めたんです。さっきの拍手は、笑わせるじゃありませんか、小僧の合図だったのですよ。ハハハ……」と言ひ、「……いや、そいつは全く人違いで、失敗だつたけれど、……苦心談ですよ。僕が春泥探しでどんなに苦心しているかという、一例をお話したんですよ」と弁解する。

これは余談だけれど、われわれの春泥搜索は、まあそんな風で、いつまで経つても一向曙光（夜明けの太陽の光）は認められなかつたのである。

だが、たつた一つだけ、これが事件解決の鍵ではないかと思われる、不思議な事実が分かつたことを、ここに書き添えて置かねばなるまい。というのは、私は六郎氏の死体の冠つていた、例の鬘に着目して、その出所がどうやら浅草付近らしく思われたので、その辺の鬘師を探し廻つた結果、千束町の松居という鬘屋で、とうとうそれらしいのを捜し当てたのだが、ところがこの主人の言う所によると、鬘そのものは、死体の冠つていたのとすつかり当てはまるのだけれど、それを注文した人物は、私の予期に反して、いや私の非常な驚きにまで、大江春泥ではなくて、小山田六郎氏その人であつたのだ。人相もよく合つていた上に、その人は注文する時、小山田という名前をあらかじめ告げて、出来上ると（それは昨年の暮も押し詰まつた時分であつたが）彼自身足を運んで受取りに来たということであつた。その時、六郎氏は禿頭を隠すのだと言つていた由であるが、それにしては、誰も、彼の妻であつた静子さえも、六郎氏が生前鬘を冠つていたのを見なかつたのは、一体どうしたわけであろう。私はいくら考えても、この不可思議な謎を解くことが出来なかつた。（この「鬘の問題」は、やがて説明されるので、此所では敢えて伏します」が、そのヒントとしては、例えば、「……《洋館二階の》ガラス窓の外から、もじやもじやした《髪の毛》をガラスにピツタリくつつけて覗いていた」のは、一体、誰だつたかという様なこととも深く関わつて来る問題なのである。）

十四、二人の關係の急接近

さて、静子（今は未亡人）と主人公（寒川）との間柄は、いわゆる「六郎氏変死事件」を境にして、俄かに親密の度を加えて行つた。行掛り上私は静子の相談相手であり、保護者の立場にあつた。六郎氏側の親戚の人達は、私の屋根裏調査以来の心尽しを知ると、無下に私を排斥することは出来なかつたし、糸崎検事などは、そういうことになれば丁度幸いだから、ちよいちよい小山田家を見舞つて、未亡人の身辺に気をつけて上げてくださいと、口添えをした程であり、私は公然と彼女の家に出入りすることが出来たのである。

静子は初対面の時から、私の小説の愛読者として、私に少なからぬ好意を持っていたこ

とは、先に記した通りであるが、その上に二人の間に、こういう複雑な関係が生じて来たのだから、彼女が私を二なきものに頼つて来たのは、誠に当然のことであつた。そうして、しよっちゅう逢つていると、殊に未亡人という境遇になつて見ると、今迄は何かしら遠い所にあるものの様に思われていた彼女のあの青白い情熱や、なよなよと消えてしまひそうな、それでいて不思議な弾力を持つ肉体の魅力が、俄かに現実的な色彩を帯びて、私に迫つて来るのであつた。殊に、偶然彼女の寢室から、外国製らしい小型の鞭を見つけて出してからというもの、私の悩ましい欲望は、油を注がれたように恐ろしい勢いで燃え上がったのである。

私は心なくも、その鞭を指さして、「……ご主人は乗馬をなすつたのですか」と尋ねたのだが、それを見ると、彼女はハツとした様に、一瞬間真青になつたかと思うと、見る見る火の様に顔を赤らめたのであつた。そして、いとも幽かに「いいえ」と答えたのである。私は迂闊にも、その時になつて初めて、彼女の項の蚯蚓腫れの、あの不思議な謎を解くことが出来た。思い出して見ると、彼女のあの傷痕は、見る度毎に少しずつ位置と形状が変わつていた様である。当時変だとは思つたけれど、まさか彼女のあの温厚らしい禿頭の夫が、世にもいまわしい残酷色情者であつたとは氣附かなかつた。いやそればかりではない。六郎氏の死後一ヶ月の今日では、いくら探しても、彼女の項には、あの醜い蚯蚓腫れが見えぬではないか。それこそ思い合わせば、たとえ彼女の明らさまな告白を聞かずとも、私の想像の間違ひではないことは分かり切つてゐるのだ。だが、それにしても、この事実を知つてからの、私の心の耐え難き悩ましさは、どうしたことであつたか。若しや私も、非常に恥かしいことだけれど、故六郎氏と同じ変質者の一人ではなかつたのであるうか。

*

*

まず、静子（今は未亡人）と主人公（寒川）との間柄は、いわゆる「六郎氏変死事件」を境にして、俄かに親密の度を加えて行つたとある。それは、行掛り上、私は静子の相談相手であり、また、保護者の立場でもあつたからであり、しかも、静子は初対面の時から、私の小説の愛読者として、私に少なからぬ好意を持つていたことに加えて、さらに、二人の間には、こういう複雑な関係が生じて来たのだから、彼女が私を二なきものに頼つて来たのは、誠に当然のことであり、しかも、しよっちゅう逢つていると、殊に未亡人という境遇になつて見ると、今迄は何かしら遠い所にあるものの様に思われていた彼女のあの青白い情熱や、なよなよと消えてしまひそうな、それでいて不思議な弾力を持つ肉体の魅力が、俄かに現実的な色彩を帯びて、私に迫つて来るようになり、殊に、偶然彼女の寢室から、外国製らしい小型の鞭を見つけて出してからというもの、私の悩ましい欲望は、油を注がれた様に、恐ろしい勢いで燃え上がったとある。

さて、この場面で最も大事なところは、実は次の箇所（文章）であり、それは、主人公（寒川）は、「……偶然彼女の寢室から、外国製らしい小型の鞭を見つけた」というところであり、それでは、「……なぜ、静子は、小型の鞭を敢えて隠そうとしなかつたのだらうか？ 隠そうと思えば、幾らでも容易に出来たはずであり、それを敢えて主人公（寒川）に見せたのは、一体、なぜなのか？」という問題である。——これは、静子の夫「小山田六郎氏」という人は、二年の外国生活を経て、帰国後、実は本格的な「惨虐色情者」（サディスト）になつてゐた。つまり、小山田六郎氏は、実は本格的な「惨虐色情者」（サディスト）になつてゐた。

情者」(サディスト)であることと、その為に、静子夫人の身体には生傷が絶えないようになったこと、この「二つ」をはっきりと知らしめるための仕掛けなのである。そして、それがまさに次のような「文章」へと連なっていくのである。……

つまり、私は心なくも、その鞭を指さして、「……ご主人は乗馬をなすつたのですか」と尋ねたのだが、それを見ると、彼女はハツとした様に、一瞬間真青になったかと思うと、見る見る火の様に顔を赤らめたのであった。そして、いとも幽かに「いいえ」と答えたのである。私は迂闊にも、その時になって初めて、彼女の項の蚯蚓腫れの、あの不思議な謎を解くことが出来た。(今まではそうではないかと推測していた状態から、はっきりと事実として確認が出来たのである)。思い出して見ると、彼女のあの傷痕は、見る度毎に少しずつ位置と形状が変わっていた様である。当時変だとは思ったけれど、まさか彼女のあの濃厚らしい禿頭の夫が、世にもいまわしい残酷色情者であったとは気附かなかった。いやそればかりではない。六郎氏の死後一ヶ月の今日では、いくら探しても、彼女の項には、あの醜い蚯蚓腫れが見えぬではないか。それこそ思い合わせば、たとえ彼女の明らかな告白を聞かずとも、私の想像の間違ひではないことは分かり切っているのだ。だが、それにしても、この事実を知ってからの、私の心の耐え難き悩ましきは、どうしたことであつたか。若しや私も、非常に恥かしいことだけれど、故六郎氏と同じ変質者の一人ではなかつたのであろうか、とあるが、小山田六郎氏という人は、実は本格的な「残酷色情者」(サディスト)(つまりは変質者)であつたという事実を踏まえて、主人公(寒川)の最初の、「本格的な推理」が展開されることになるのである。

十五、事件解明切掛けの「二つの思いつき」

さて、四月二十日は、故人の命日に当るので、静子は仏参をしたのち、夕刻から親戚や故人と親しかった人々を招いて、仏の供養を営んだ。私もその席に連つたのであるが、その晩、湧き起つた二つの「新しい事実」は、恐らく、一生涯忘れることの出来ない、大きな感動を私に与えたのである。

その時、私は静子と並んで、薄暗い廊下を歩いていた。客が皆帰つてしまつてからも、私は暫く静子と私だけの話題(春泥搜索のこと)について話合つた後、十一時頃であつたか、余り長居をしては、召使の手前もあるので、別れを告げて、静子が御出入の帳場から呼んでくれた自動車にのつて帰宅したのであるが、その時、静子は私を玄関まで見送る為に、私と肩を並べて廊下を歩いていたのだ。廊下には庭に面して、幾つかのガラス窓が開いていたが、私達がその一つの前を通りかかつた時、静子は突然恐ろしい叫び声を立てて私にしがみついて来たのである。(もちろん、それは、静子の仕掛けでもあるが……)。

主人公(寒川)は、「……どうしました。何を見たんです」と、私が驚いて尋ねると、静子は片手には、まだしっかりと私に抱きつきながら、一方の手でガラス窓の外を指さすのだ。私も一時は春泥のことを思い出して、ハツとしたが、だがそれは何でもなかつたことが、間もなく分かつた。見ると窓の外の庭の樹立の間を、一匹の白犬が、木の葉をカサカサ言わせながら、暗闇の中へ消えて行った。「……犬ですよ、犬ですよ、怖がることはありませんよ」と、私は、何の気であつたか、静子の肩を叩きながら、いたわる様にしたものだが、そうして何でもなかつたことが分かつてしまつても、静子の片手が私の背

中を抱いていて、生暖かい感触が、私の身内まで伝わっているのを感じると、アア、私はとうとう、矢庭に彼女を抱き寄せ、八重歯のふくれ上った、あのモナ・リザの唇を盗んでしまったのである。そして、それは私にとつて幸福であったか不幸であったか、彼女の方でも、決して私をしりぞけなかったばかりか、私を抱いた彼女の手先に、私は遠慮勝ちな力さえ覚えたのであった。しかも、それが亡き人の命日であっただけに、私達は罪を感じる事が一入深かった。二人はそれから私が自動車に乗ってしまうまで、一言と口を利かず、目さえそらす様にしていたのを覚えている。

そして、まず一つの思いつきは、その「車の中」で起こるのである。主人公（寒川）は、車の中でも静子のことばかり考えていて、「……熱くなった唇には、まだ彼女の唇が感じられ、鼓動する胸には、まだ彼女の体温が残っていて、飛び立つばかりの嬉しさと、一方、深い自責の念とが複雑に錯綜していた」が、前の運転手のハンドルを握る手袋のホックの飾釦を見ているうちに、主人公（寒川）は、やがて、小山田家の天井裏で拾ったあの「金属の丸いもの」とは、実は手袋の「飾釦」だったのかとふと思うのであった。そこで、運転手に「手袋」のことをいろいろ聞いてみると、「……寒い時分に、亡くなった小山田の旦那から（釦がとれて使えなくなったので、まだ新しかったけれども）もらったものであり、飾釦は、最初から右手にはとれてなかった」と言うのであった。それを聞いて、主人公（寒川）は、もし小山田家の天井裏で拾ったあの「金属の丸いもの」が、もし「小山田六郎氏」の手袋のものだとすれば、天井裏を散歩していた人物とは、実は「小山田六郎氏」ということにならないかと思うのであった。そこで、主人公（寒川）は、その「手袋」を相当の代価で譲り受けたのであったが、（自分の）部屋に入って、例の天井裏で拾った「金物」を出して、比べて見ると、やっぱり寸分違わなかったし、その「金物」は、手袋のホックの座金にもピッタリとはまったのである。

そして、もう一つ変なことに気づいた。それは、頭の中に、「……大きなUの字が現われた。Uの字の左端上部には山の宿がある。一方、右端の上部には小梅町（六郎氏の碁友達の家の所在地）がある。そして、Uの字の底に当る所は丁度吾妻橋に該当するのだ。あの晩、六郎氏は、Uの右端上部を出て、Uの字の下部の吾妻橋までやって来て、そこで春泥の為に殺害されたとはかり考えていたが、しかし、大川は、Uの上部から下部に向かって流れているのだ。若しも死体が流れて来たはずれば、それは、一体、どこから流れて来たのか。つまり、凶行は、一体、どこで演じられたのか？」と、私は、深く深く「妄想の泥沼」へと沈み込んで行くのであった。……

十六、本格的な推理一（その全容）

私は、幾晩も幾晩もそのことばかり考え続けた。静子の魅力もこの奇怪なる疑いには及ばなかったのか、私は不思議にも静子のことを忘れてしまったかの如く、ひたすら奇妙な妄想の深味へ陥って行った。私はその間にも、あることを確かめる為に二度ばかり静子を訪ねは訪ねただけれど、用事をすませると、至極あっさり別れをつけて、大急ぎで帰ってしまうので、彼女はきつと妙に思っていたに相違ない。私を玄関に見送る彼女の顔が、寂しく悲しげにさえ見えた程だ。（静子を忘れる程妄想に独り耽入ったという事である。）

そして、五日ばかりの間に、私は実に途方もない妄想を組立ててしまったのである。私

はそれをここに叙述する煩い（わづら）を避けて、その時糸崎検事に送る為に書いた私の意見書が残っているから、それにいくらか書入れをして、左に写して置くことにするが、この推理は、私達探偵小説家の空想力を以てでなければ、恐らく組立て得ない体のものであったとある。これは、一体、どのようなことを意味するのかと敢えて問えば、それは、次のようなことである。——つまり、静子は、密かに夫殺しの「完全犯罪」を綿密に計画していたのである。そして、その「静子」という女性は、探偵小説家「寒川」の書く小説の愛読者でもあり、それゆえ、探偵小説家「寒川」の「推理の仕方」（その「特徴や傾向」）などは、よく熟知していたのである。そこで、探偵作家「大江春泥」でもある「静子」は、探偵小説家「寒川」であれば、こういう様々な「材料」を与えれば、必ず、こういうふうな「推理」するだろうという、そういう「筋立て」を考えに考え抜いて、まさに夫殺しの「完全犯罪」を密かに狙っていたのである。

それは、最初の「出逢い」から始まり、親しくなったところで、今度は、昔の恋人「平田一郎」からの「脅迫状」、しかも、その昔の恋人「平田一郎」は、何と探偵作家「大江春泥」になっていた。そして、夜毎の「夫婦の睦じさ」に烈しく嫉妬して、静子より先に「愛する夫殺し」を予告して、実際に「殺害」してしまふ。むろん、探偵小説家「寒川」であれば、昔の恋人「平田一郎」や探偵作家「大江春泥」などの「からくり」は、やがては「見抜く」に違いない。そこで、今度は、探偵作家「大江春泥」の作品『屋根裏の遊戯』に似せた「からくり」を創り出す。それは、先ず、天井裏に「手袋の飾釦」を一つ落としておく。それから、六郎氏が変死した深夜一小时前、（洋館二階の）ガラス窓に人影を見たと話す。また、寒川に「屋根裏を探らせ、一つの釦を拾わせる」、それは、実は小山田氏の手袋の飾釦であり、それを小山田氏からもらって運転手が持っていた」という展開にし、さらに、寝室の鞭、鍵のかかった本棚、その他、つまり、すべては、静子のまさに「仕掛け」であり、その「仕掛け」に添うように、探偵小説家「寒川」は、次のように「推理」するのである。その「本文」は、実に長いが、敢えて「全文」を記してみたい。

* (前略) そういう訳で、私は、小山田邸の静子の居間の天井裏で拾った金具が、小山田六郎氏の手袋のホックから脱落したものと考える外はないことを知りますと、今まで私の心の隅の隅（わたがま）りとなっていた色々の事実が、この私の発見を裏書きでもするように、続々思いついて来るのであります。六郎氏の死体が鬘（かづら）を冠（かぶ）っていたこと、その鬘は六郎氏自身が註文して拵（こしら）えさせたものであったこと。（死体がはだかであったことは、後に述べるような理由で、私にはさして問題ではありませんでした）六郎氏の変死と同時に、まるで申合せたように、平田の脅迫状がバツタリ来なくなつたこと、六郎氏が見かけによらぬ（こうしたことは多くの場合見かけによらぬものです）恐ろしい惨虐（さだめ）色情者（サディスト）であったこと等、これらの事実は、偶然様々の異常が集合したかに見えますけれども、よくよく考えますと、悉くある一つの事柄を指示していることが分かります。私はそこへ気がつきますと、私の推理を一層確実にする為、出来るだけの材料を集めることに着手しました。私は先ず小山田家を訪ね、夫人の許しを得て、故六郎氏の書齋を調べさせて貰いました。書齋程、その主人公の性格なり秘密なりを如実に語ってくれるものはないのですから。私は夫人が怪しまれるのも構わず、殆ど半日ばかりで、書棚（しよたな）という書棚、抽斗（ひきだし）という抽斗を調べ廻つたことですが、間もなく私は、数ある本棚の中に、たった一つ

だけ、さも嚴重に鍵のかかっている箇所のあるのを発見しました。鍵を尋ねますと、それは六郎氏が生前時計の鎖につけて、終始持ち歩いていたこと、変死の日にも兵児帯に巻き付けて家を出たままだということが分かりました。仕方がないので、私は夫人を説いて、やつとその本棚の戸を破壊する許しを得ました。

さて、本棚を開けて見ますと、その中には、六郎氏の数年間の日記帳、幾つかの袋に入った書類、手紙の束、書籍などが一杯入っていましたが、私はそれを一々丹念に調べた結果、この事件に関係ある「三冊の書冊」を発見したのであります。

第一は、六郎氏と静子夫人との結婚の年の日記帳で、婚礼の三日前の日記の欄外に、赤インクで、次のような注意すべき文句が記入してあったのです。「……（前略）余は平田一郎なる青年と静子との関係を知れり。されど、静子は中途その青年を嫌い始め、彼が如何なる手段を講ずるもその意に应ぜず、遂には、父の破産を好機として彼の前より姿を隠せる由なり。それにてよし。余は既往の詮議立てはせぬ積りなり云々」、つまり、六郎氏は結婚の当初から、何らかの事情により、夫人の秘密を知悉（知り尽く）していたのであるが、それを夫人には「一言」も言わなかったのです。

第二は、大江春泥短編集『屋根裏の遊戯』であります。かかる書物が、実業家小山村六郎氏の書齋に発見するとは、何という驚きでありましょう。静子夫人から、六郎氏が生前仲々の小説好きであったということを知り、私は私の目を疑ったほどでした。さて、この短編集の巻頭にはコロタイプ版の春泥の肖像が掲げられ、奥付には著者「平田一郎」と彼の本名が印刷されてあったことは、注意すべきであります。

第三は、博文館発行の雑誌「新青年」第六卷第十二号です。これには春泥の作品は掲載されていませんでしたけれど、その代り、口絵に彼の原稿の写真版が原寸のまま原稿紙半枚分程、大きく出ている、余白に「大江春泥氏の筆蹟」と説明がついていました。妙なことは、その写真版を光線に当ててよく見ますと、厚いアートペーパーの上に、縦横に爪の跡のようなものが付いているのです。これは誰かが写真の上に「薄い紙」を当てて、鉛筆で春泥の「筆蹟」を幾度もなすったものとしたか考えられません。私の想像が次々と適中して行くのが怖いようでした。

その同じ日、私は夫人に頼んで、六郎氏が外国から持ち帰った手袋を探してもらいました。それは探すのにかなり手間取ったのですけれど、遂に私が運転手から買い取ったものと、寸分違わぬ品が一揃だけ出て来ました。夫人はそれを私に渡した時、確かに同じ手袋がもう一揃あった筈なのに、不審顔でした。これらの証拠品、日記帳、短編集、雑誌、手袋、天井裏で拾った金具類は、御指図によって、いつでも提出することが出来ます。

さて、私の調べ上げた事実は、その外にも数々あるのですが、それらを説明する前に、仮りに上述の諸点だけによって考えましても、小山村六郎氏が世にも不気味な性格の所有者であり、温厚篤実なる仮面の下に、甚だ妖怪じみた陰謀をたくましくしていたことは明らかであります。

我々は、大江春泥という名前に執着し過ぎてはいはしなかつたでしょうか。彼の血みどろな作品、彼の異常な日常生活の知識などが、我々をして、この様な犯罪は春泥でなくては出来るものでないと、てんから独りぎめに極めさせてしまったのではありますまいか。彼はどうしてかくも完全に姿をくらましてしまうことが出来たのでしょうか。彼が犯人であったとしては、少し妙ではありませんか。彼が無実であればこそ、単に彼の持前の厭人

癖から（彼が有名になればなるほど、その名に對しても、この種の厭人病は極度に昂進するものであります）世間から韜晦（姿を隠）したのであればこそ、この様に探しにくいのではないでしょう。彼は嘗てあなたがおっしゃった様に、海外に逃出してしまつたのかも知れません。そして、例えば、上海の志那人町の片隅に、志那人になりすまして水煙草でも吸っているのかも知れません。そうでなくて、若し春泥が犯人であつたとすれば、あの様にも綿密に、執拗に、長年月を費して企まれた復讐計画が、彼にしては道草の様なものであつた六郎氏殺害のみを以て、肝腎の目的を忘れたように、バツタリと中断されたことを、何と説明したらいいのでしょうか。彼の小説を読み、彼の日常を知っているものには、これは余りに不自然な、ありそうもないことに思われるのです。

いやそれよりも、もっと明白な事実があります。彼はどうして小山田六郎氏所有の手袋の釦を、あの天井へ落して来るのが出来たのでしょうか。手袋が内地では手に入らぬ外国製のものであること、六郎氏が運転手に与えた手袋の飾釦がとれてしたことなど思い合わせれば、かの屋根裏に潜んでいた者は、当の小山田六郎氏ではなく、大江春泥であつたと、そんな不合理な事が考えられるでしょうか。（ではそれが六郎氏であつたとしても、彼はなぜその大切な証拠品を、迂闊にも運転手などに与えたかとの御反問があるかも知れません。しかし、それは後に述べますように、彼は別段法律上の罪悪を犯してなどいなかつたからです。変態好みの一種の遊戯をやつていたに過ぎなかつたからです。ですから、手袋の釦がとれたところで、たとえそれが天井に残されていたところで、彼にとつては何でもなかつたのです。犯罪者のように、この釦の取れたのは、若しや天井裏を歩いていた時ではなかつたかしら。証拠になりはしないかしら。などと心配する必要は少しもなかつたのです。）

春泥の犯罪を否定すべき材料は、まだそればかりではありません。右に述べた日記帳、春泥の短編集、新青年等の証拠品が、六郎氏の書齋の錠前つき本棚にあつたこと、その錠前の鍵は一つしかなく、六郎氏が行住坐臥所持していたことは、それらの品が六郎氏の陰險な悪戯を証拠立てているというばかりではなく、一步譲つて、春泥が六郎氏に疑いをかける為に、その品々を偽造し六郎氏の本棚へ入れて置いたと考えることさえ、全然不可能なのです。第一日記の偽造など出来るものではありませんし、その本棚は六郎氏でなければ開けることも閉めることも出来なかつたではありませんか。

かく検して来ますと、我々が今まで犯人と信じ切つていた大江春泥こと平田一郎は、意外にも、最初からこの事件に存在しなかつたと考えの外はありません。我々をして左様に信じさせたものは、小山田六郎氏の驚嘆すべき欺瞞であつたとしか考えられないのであります。金満紳士小山田氏が、かくの如き綿密陰險なる稚氣の所有者であつたことは、彼が表に温厚篤実を装いながら、その寢室においては、世にも恐るべき悪魔と形相を變じ、可憐なる静子夫人を外国製乗馬鞭を以て、打擲し続けていたことと共に、我々の誠に意外とする所でありませうけれど、温厚なる君子と、陰險なる悪魔とが、一人物の心中に同居したためしは、世にその例が乏しくないのであります。人は、彼が温厚でありお人好しであればある程、却つて悪魔の弟子入りし易いとも言えるのではありますまいか。

*

*

さて、私は斯様に考えるのであります。小山田六郎氏は今より約四年以前、社用を帯びて欧州に旅行をし、ロンドンを主として、その他に二、三の都市に二年間滞在していたの

ですが、彼の悪癖は、恐らくそれらの都市の何れかに於いて芽生え、発育したものでありましよう。(私は碌々商会の社員から、彼のロンドンでの情事の噂を洩れ聞いて居ります。)そして、一昨年九月、帰朝と共に、彼の治し難い悪癖は彼の溺愛する静子夫人を対象として、猛威をたくましくし始めたものでありましよう。私は昨年十月、静子夫人と初対面の折、すでに彼女の項にかの無気味な傷痕を認めたほどですから。

この種の悪癖は、例えば、かのモルヒネ中毒のように、一度染んだなら一生涯止められないばかりでなく、日と共に月と共に恐ろしい勢いでその病勢が昂進して行くものであります。より強烈なより新しい刺激をと、追いつめるものであります。今日は昨日のやり方では満足出来ず、明日は又今日の仕草では物足りなく思われて来るのです。小山田氏も同様に、静子夫人を打擲するばかりでは満足が出来なくなつて来たことは、容易に想像出来るではありませんか。そこで、彼は物狂わしい新しい刺激を探し求めなければならなかつたであります。

丁度その時、彼は何かのきつかけで、大江春泥作『屋根裏の遊戯』という小説のあることを知り、その奇怪なる内容を聞いて、一読して見る気になつたのかも知れません。ともかく、彼はそこに不思議な知己(友)を発見したのです。異様な同病者を見つけ出したのです。彼が如何に春泥の短編集を愛読したか、その本の手擦れのあとでも想像することが出来るではありませんか。春泥はあの短編集の中で、たった一人でいる人を(殊に女を)少しも気づかれぬ様に隙見することの、世にも不思議な楽しさを、繰返し説いていますが、六郎氏がこの彼にとつては恐らく新発見であつた所の、新しい趣味に共鳴したことは想像に難くありません。彼は遂に春泥の小説の主人公を真似て、自から屋根裏の遊戯者となり、自宅の天井裏に忍んで静子夫人の独居を隙見しようと企てたのであります。小山田家は門から玄関まで、相当の距離がありますので、外出から帰つた折など、召使達に知れぬよう、玄関脇の物置に忍び込み、そこから天井伝いに静子の居間の上に達するのは、誠に雑作もないことです。私は、六郎氏が夕刻から、よく小梅の友達達の所へ碁を囲みに出かけたのは、この屋根裏の遊戯の時間をごまかす手段ではなかつたか、とさえ邪推するのであります。

*

*

さて、その様に『屋根裏の遊戯』を愛読していた六郎氏が、その奥付の作者の本名を発見し、それが嘗て静子にそむかれた彼女の恋人であり、彼女に深い恨みを抱いているに相違ない平田一郎と同一人物ではないかと疑い始めたのは、さも有りそうな事ではありませんか。そこで、彼は大江春泥に関する、あらゆる記事、ゴシップを漁り、遂に春泥が嘗ての静子の恋人と同一人物であつたこと、また、彼の日常生活が甚だしく厭人的であり、当時、すでに筆を絶つて行方さえくらましていたことを、知悉(細かい点まで知り尽く)ことに至つたのでしよう。つまり、六郎氏は、一冊の『屋根裏の遊戯』によつて、一方では彼の病癖のこよなき知己を、一方では彼にとつては憎むべき昔の恋敵を、同時に発見をして、その知識に基づいて、実に驚くべき悪戯を思いついたのであります。

静子の独居の隙見はなるほど甚だ彼の好奇心をそつたには相違ないのですが、惨虐色情者の彼が、それだけで、そんな生ぬるい興味だけで満足しよう筈はありません。鞭の打擲に変わるべき、もつと新しい、もつと残酷な何かの方法がないものかと、彼は病人の異常に鋭い空想力を働かせたものでしよう。そして、結局平田一郎の脅迫状という誠に

前例のないお芝居を思いつくに至ったのであります。それには、彼はすでに「新青年」第六卷十二号巻頭の写真版の御手本を手に入れて居りました。お芝居をいやが上にも奥深く、誠にやかにする為に、彼は、その写真版によって丹念にも春泥の筆蹟の手習いを始めました。あの写真版の鉛筆の跡がそれを物語って居ります。

六郎氏は、平田一郎の脅迫状を作製すると、適当な日数を置いて、一度毎に違った郵便局からその封筒を送りました。商用で車を走らせている途中、もよりのポストへそれを投げ込ませるのは訳のないことでした。脅迫状の内容については、彼は新聞雑誌の記事によって春泥の経歴の大体に通じていましたし、静子の細かい動作も、天井からの隙見と、それで足らぬ所は、彼自身静子の夫であったのですから、あの位のことは訳もなく書けたのです。つまり彼は、静子と枕を並べて、寝物語をしながら、その時の静子の言葉や仕草を記憶して置いて、それをさも春泥が隙見したかの如く書き記した訳なのです。何という悪魔でありましょう。かくして彼は、人の名を騙って脅迫状を認め、それを自分の妻に送るといふ犯罪めいた興味と、妻がそれを読んで震え戦く様を天井裏から胸を轟かせながら隙見するといふ悪魔の喜びとを、合せ得ることが出来たのです。しかも、彼はその間々には、やはりかの鞭の打擲を続けていたと信ずべき理由があります。何故と言つて、静子の項の傷は、六郎氏の死後になつて、やつとその痕が見えなくなつたのですから。言うまでもなく、彼はこの様に妻の静子を責めさいなんではいましてけれど、それは決して彼女を憎むが故ではなく、寧ろ静子を溺愛すればこそ、この惨虐を行なつたのであり、この種の変態性慾者の心理は無論あなたも充分承知のこととは思ひますけれど。

さて、かの脅迫状の作製者が小山田六郎氏であつたという、私の推理は以上で尽きましたが、では、単に変態性慾者の「悪戯」に過ぎなかつたものが、どうしてあの様な殺人事件となつて現われたか。しかも殺されたものは当の六郎氏であつたばかりでなく、彼は何故にあの奇妙な鬘を冠り、真裸体になつて、吾妻橋下に漂つていたのであるか。彼の背中の突傷は何者の仕業であつたのか。大江春泥がこの事件に存在しなかつたとすれば、では外に別の犯罪者があつたのであるか。等々の疑問が続出して来るのであります。それについて、私はさらに私の観察と推理とを申し述べねばなりません。

簡単に言えば、小山田六郎氏は、彼の余りにも悪魔的な所業が、神の怒りに触れたのでありましょうか、天罰を被つたのであります。そこには何等の犯罪も下手人もなくて、ただ六郎氏の過失死があつたばかりであります。では、背中の致命傷はとの御尋ねがありましょう。けれど、その説明はあとに廻して、先ず順序を追つて、私がそのような考えを抱くに至つた筋路からお話しなければなりません。

*

*

私の推理の出発点は、他ならぬ彼の鬘でありました。あなたは多分、三月十七日私が天井裏の探険をした翌日から、静子は隙見をされぬよう、洋館の二階へ寢室を移したことを御記憶でありましょう。それには静子がどれ程巧みに夫を説いたか、六郎氏がどうしてその意見に従う気になつたかは明瞭でありませんけれど、とにかく、その日から六郎氏は天井の隙見が出来なくなつてしまつたのです。しかし、想像をたくましくするならば、六郎氏はその頃は、もう天井の隙見にもやや飽きが来ていたのかも知れません。そして、寢室が洋館に代つたのを幸いに、また別の悪戯を考案しなかつたとは言えません。何故と言つて、ここに鬘があります。彼自身注文した所のふさふさとした鬘があります。彼がそ

の鬘かづらを注文したのは昨年末ですから、無論最初からそのつもりではなく、別に用途があったのでしようが、それが今、図らずも間に合ったのです。

彼は、『屋根裏の遊戯』の口絵で、春泥しゅんでいの写真を居ります。その写真は春泥しゅんでいの若い時分のものだと言われている程ほどですから、無論六郎氏のように禿頭ではなく、ふさふさとした黒髪があります。ですから、若し六郎氏が手紙や屋根裏の陰に隠れて静子を怖がらせることから、一步を進み、彼自身大江春泥しゅんでいに化け、静子がそこにいるのを見すまして、洋館の窓の外からチラリと顔を見せて、ある不思議な快感を味あじわおうと企らんだならば、彼は何よりも先ず、彼の第一の目印である禿頭を隠す必要に迫られたに相違ありませんが、丁度それには持って来いの鬘かづらがあったのです。鬘かづらさえ冠かぶれば、顔などは、暗いガラスの外ではあり、チラッと見せるだけでよいのですから、（そして、その方が一層効果的なのです）恐怖に戦っている静子に見破られる心配はありません。

あの夜（三月十九日）、六郎氏は小梅こうめの碁友達の所から帰り、まだ門が開いていたので、召使達たちに知れぬ様、ソツと庭を廻って洋館の階下の書斎に入り（これは静子から聞いたのですが、彼はその鍵を例の本棚の鍵と一緒に鎖に下げていたのです）その時はもう階上の寝室に入っていた静子に悟られぬ様、闇の中で例の鬘かづらを冠かぶり、外に出て、立木を伝って、洋館の軒蛇腹のきじやばらに上り、寝室の窓の外へ廻って行って、そのブラインドの隙間から、ソツと中を覗いたのであります。のちに静子が窓の外に人の顔が見えたと私に語ったのは、この時のことであつたのです。

さて、それでは、六郎氏はどうして死ぬ様なことになつたか、それを語る前に、私は一応、私が六郎氏を疑い出してから二度目の小山田氏を訪ね、洋館の問題の窓から、外を覗いて見た時の観察を申述べねばなりません。これはあなた自身行って御覧なされれば分かることですから、くだくだしい描写は省はぶくことに致しますが、その窓は隅田川に面して、外は殆ど軒下程の空地もなく、すぐ例の表側と同じコンクリート塀へいに囲まれ、塀へいは直ちに余程高い石崖いしがけに続いています。地面を儉約する為に、塀へいは石崖いしがけのはずれに立ててあるのです。水面から塀へいの上部までは約二間（約三・六尺）、塀へいの上部から二階の窓までは一間（約一・八尺）程あります。そこで、六郎氏が軒蛇腹のきじやばら（それは中が非常に細いのです）から足を踏み外はずして転落したとしますと、余程運がよくて、塀へいの内側へ（そこは一人一人やと通れる位の細い空地です）落ちることも不可能ではありませんが、そうでなければ、一度塀へいの上部にぶつつかって、そのまま外の大川へ墜落する外はないのです。そして、六郎氏の場合は無論後者ごしやうであつたのであります。

私は最初、隅田川の流れというものに思い当つた時から、死体が投げ込まれた現場じしやまに止つていたと考えるよりは、上流から漂つて来たと解釈する方が、より自然だとは気づいていました。そして、小山田家の洋館の外はすぐ隅田川であり、そこは吾妻橋よりも上流に当ることも知っていました。それ故、若しかしたら、六郎氏がその窓から落ちたのではないかと、考えたことは考えたのですが、彼の死因が水死ではなくて、背中うしろの突傷つまさずだつたものですから、私は長い間迷わなければなりませんでした。

*

*

では、六郎氏の背中うしろの肺部に達する程もひどい突傷つまさずは何によつて生じたか、あんなにも刃物と似た傷をつけ得るものは一体何であつたか。それは外でもない、小山田家のコンクリート塀べいの上部うへに植うえつけてあつた、ビール壘びんの破片なのです。それは表門の方も同様に

植えつけてありますから、あなたも多分御覧なすったことがあります。あの盗賊よけのガラス片は所々に飛んでもない大きな奴がありますから、場合に依つては、充分肺部に達する程の突傷を拵えることが出来ます。六郎氏は軒蛇腹から転落した勢いで、それにぶつかったのです。ひどい傷を受けたのも無理はありません。なおこの解釈によれば、あの致命傷の周囲の沢山の浅い突傷の説明もつく訳であります。

かようにして、六郎氏は自業自得、彼のあくどい病癖の為に、軒蛇腹から足を踏みはずし、堀にぶつかって致命傷を受け、その上隅田川に墜落し、流れと共に吾妻橋汽船発着所の便所の下へ漂いつき、とんだ死に恥をさらした訳であります。以上で本件に関する私の新解釈は大体陳述しました。一二申し残した事を付け加えますと、六郎氏の死体がどうして裸体にされていたかという疑問については、吾妻橋界限は浮浪者、乞食、前科者の巢窟であつて、溺死体が高価な衣類を着用していたなら（六郎氏はあの夜大島の袷に鹽瀬の羽織を重ね、白金の懐中時計を所持して居りました）深夜人なきを見て、それをはぎ取る位の無謀者は、ごろごろしていると申せば充分であります。（註、この私の想像は、後に事実となつて現れ、一人の浮浪人があげられたのだ）それから、静子が寢室にいて、何故六郎氏の墜落した物音を気づかなかつたという点は、その時彼女が極度の恐怖に、気も顛動していたこと、コンクリート作りの洋館のガラス窓が密閉されていたこと、窓から水面までの距離が非常に遠いこと、また、かりに水音が聞こえたとしても、隅田川は時々徹夜の泥舟などが通るので、その水竿の音と混同されたかも知れないこと、などを御一考願いたいと存じます。なお注意すべきは、この事件が毫も犯罪的の意味を含まず、不幸変死事件を誘発したとは言え、全く悪戯の範囲を出でなかつたという点であります。若しそうでなかつたならば、六郎氏が証拠品の手袋を運転手に与えたり、本名を告げて鬘を註文したり、錠前つきとは申せ自宅の本棚に大切な証拠物を入れて置いたりした、馬鹿馬鹿しい不注意を何とも説明のしようがないからであります。（後記）

以上、私は余りに長々と私の意見書を写し取つたが、これをここに挿入したのは、あらかじめ右の私の推理を明らかにして置かないと、これから後の私の記事が、甚だ難解なものになるからである。私はこの意見書で、大江春泥は最初から存在しなかつたと言つた。だが、事実は果してそうであつたかどうか。若しそうだとすれば私がこの記録の前段に於いて、あんなにも詳しく彼の人となりを説明したことが、全く無意味になってしまうのだが。

十七、本格的な「推理一」の検証

私は、あの天井裏で拾つた金属が、小山田氏の手袋のホックから脱落したものだとは知ると、私の心の隅に蟠りとなつていた色々の事実が、この私の発見を裏書きでもする様に、続々思い出されて来たのである。六郎氏の死体が鬘を冠つていたこと。その鬘は六郎氏自身注文して拵えたものであること、六郎氏の変死と同時に、まるで申し合せた様に、平田の脅迫状がバツタリ来なくなつたこと、六郎氏が見かけによらぬ、恐ろしい「惨虐色情者」（サディスト）であつたこと等、これらの事実は、よくよく考えると、悉くある一つの事柄を示唆していることが分かる。私の推理を一層確実にする為、出来るだけの

材料を集めることに着手した。そこで、故六郎氏の書齋を調べてみると、鍵のかかった本棚が見つかるが、その鍵はなく、許可を得て壊して開けてみると、その中には、六郎氏の数年の日記帳、幾つかの袋に入った書類、手紙の束、書籍などが一杯入っていたが、それを丹念に調べた結果、この事件に関係ある「三冊の書冊」を発見したのである。

まず、その一つは、六郎氏と静子夫人との結婚の年の日記帳で、婚礼の三日前の日記の欄外に、赤インクで、「……余は平田一郎なる青年と静子との関係を知れり。されど、静子は中途その青年を嫌い始め、彼が如何なる手段を講ずるもその意に応ぜず、遂には、父の破産を好機として彼の前より姿を隠せる由なり。それにてよし。余は既往の詮議立てはせぬ積りなり云々」。つまり、六郎氏は、結婚の当初から、夫人の秘密は知っていたが、それを夫人には「一言」も言わなかったとある。しかし、なぜ、「赤インク」なのか？

これは恐らく、静子書き加えたものであり、平田一郎も彼との「恋愛関係」も、実際はどうであったかはよく分からないのであるが、しかし、もし「平田一郎」という人物が実在人物だとすれば、いつひよっこりとその「姿」を現わし、何を語るかも分からない。そんな危険を敢えて冒すだろうか？——それゆえ、平田一郎も彼との「恋愛関係」も、どこまで本当のことなのか厳密にはよく分からないままなのである。

第二は、大江春泥短編集『屋根裏の遊戯』である。かかる書物を、実業家小山田六郎氏の書齋で見るとは、何という驚きかとあるが、これも、静子が入れて置いたものであり、それは、この本を真似て、小山田六郎氏は、天井裏を散歩するようになる。その時に、指紋消しとして手袋を使用したのが、その手袋の「飾釦」をうっかり落としてしまったという、そういう展開（つまり推理）を、主人公（寒川）にさせるためのものである。

第三は、博文館発行の雑誌「新青年」第六卷第十二号である。これには春泥の作品は掲載されていないが、その代り、口絵に彼の原稿の写真版が原寸のまま原稿紙半枚分程、大きく出ている。余白に「大江春泥の筆蹟」と説明がついていた。妙なことは、その写真版を光線に当ててよく見ると、厚いアートペーパーの上に、縦横に爪の痕のようなものがついている。これは誰かが写真の上に薄い紙を当てて、鉛筆で春泥の筆蹟を、幾度もなすつたものとしか考えられない。これも、「大江春泥の筆蹟」を真似て、小山田六郎氏が、まさに「脅迫状」を書いたと、主人公（寒川）に「推理」させるためのものである。

また、同じ日、夫人に頼んで、六郎氏が外国から持ち帰った手袋を探してもらおうと、その結果、私が運転手から買取ったものと、寸分違わぬ品が一揃だけ出て来る。夫人は、それを私に渡した時、確かに同じ手袋がもう一揃あるはずなのに、不審顔であった。（この部分は、手袋が六郎氏のものに間違い、ことをより強調している）。——かくして、我々が今まで犯人と信じ切っていた大江春泥こと平田一郎は、意外にも、最初からこの事件に存在しなかったと考える外はありませんとなり、結局、小山田六郎氏自身が、実は犯人であったという寒川の最初の「本格的な推理」になるのである。

*

*

さて、小山田六郎氏は、今より約四年前、社用を帯びて欧州に旅行をし、ロンドンを主として、その他、二、三の都市に二年間滞在していたが、彼の悪癖は、恐らく、それらの都市の何れかにおいて芽生え、発育したものでしょう。もし、そうだとすれば、静子と結婚したのは、七年前であるから、その頃はまだそれほど異常ではなかったが、去年の九月の帰国後、六郎氏は、本格的な「惨虐色情者」（サディスト）となり、静子夫人の身体

には生傷が絶えないようになってしまふ。それは、ここ半年ぐらいのことになるのだらう。つまり、昨年の九月、帰国（事件は三月）とともに、彼の治し難い悪癖は、彼の溺愛する静子夫人を対象として、猛威をたくましくし始めたものでしよう。私は昨年十月（博物館での出逢い）、静子夫人と初対面の折、已に彼女の項にかの不気味な傷痕を認めた程である。——この種の悪癖は、例えば、かのモルヒネ中毒の様に、一度染んだなら一生涯止められないばかりでなく、日と共に月と共に恐ろしい勢いでその病勢が昂進して行くものであり、より強烈なより新しい刺戟をと、追い求めるものである。今日は昨日のやり方は満足出来ず、明日は又今日の仕草では物足りなく思われて来る。小山田氏も同様に、静子夫人を打擲するばかりでは満足が出来なくなつて来たことは、容易に想像出来ます。そこで、彼は物狂おしい新しい刺戟を探し求めなければならなかつたのである。

丁度、その時、何かのきっかけで、大江春泥作の『屋根裏の遊戯』という小説を知り、それを読んでみると、異様な同病者を見つけ出し、遂には自ら自宅の天井裏に忍び込んで、静子夫人の独居を隙見しようとしてたのである。むろん、それだけでは飽き足らず、『屋根裏の遊戯』を愛読していた六郎氏は、その奥付の作者の本名を発見し、それが嘗つて静子にそむかれた彼女の恋人であり、彼女に深い恨みを抱いているに相違ない平田一郎と同一人物だと知ると、今度は、平田一郎の名を騙つて「脅迫状」を作成して、それを自分の妻に送るといふ犯罪めいた趣味と、妻がそれを読んで震え戦く様を天井裏から胸を轟かせながら隙見するという悪魔の喜び、むろん、その間々には、かの「鞭の打擲」も相変わらず続けていたのである。これらの理由により、かの「脅迫状」の制作者は、実は「小山田六郎氏」であつたという、主人公（寒川）の本格的な「推理」になるのである。むろん、これは、明らかに間違つた「推理」であるが、しかし、そのような間違つた「推理」へと仕向けたのは、誰でもない、それは、まさに「静子」その人なのである。

つまり、鍵のかかつた本棚の中から出て来た「三冊の書冊」を根拠にして、組み立てた「推理」であり、一つは、結婚の年の日記帳に、赤インクで、「……余は平田一郎なる青年と静子との關係を知れり。されど、静子は中途その青年を嫌い始め、彼が如何なる手段を講ずるも其意に應ぜず、遂には、父の破産を好機として彼の前より姿を隠せる由なり。それにてよし。余は既往の詮議立てはせぬ積りなり云々」とあるが、その「内容」は、つまり、「……自分は、青年平田と静子との關係を知つたが、静子は中途からその青年を嫌い始め、彼がどのような手段を講じてもそれに應ぜず、しかも、父の破産を好機として彼の前からその姿を完全に隠したのであり、それゆえ、自分はその過去を敢えて詮議（取り調べて問い直すようなことをする）つもりはないのだ」となり、これは、静子が書き加えたものに過ぎず、もともと平田一郎との「恋愛關係」も、また、「平田」という存在そのもの自体、実際のところ、どこまで本当のことなのかはよく分からないのである。つまり、静子が勝手に「でっち上げた存在」なのかも知れないのである。

次は、大江春泥短編集『屋根裏の遊戯』が、その書齋の本棚にあつたというのも、もちろん、静子が入れて置いたものであり、それゆえ、実際の実業家小山田六郎氏という人は、大江春泥短編集『屋根裏の遊戯』など読んだこともなければ、ましてや「屋根裏の散歩」などしたこともないのである。そして、もう一つは、雑誌「新青年」に載つた「口絵」に大江春泥の原稿の写真版が原寸のまま大きく出ている、余白に「大江春泥の筆蹟」とあるが、妙なことには、誰かが写真の上に薄い紙を当てて、鉛筆で春泥の筆

蹟を、幾度もなすったような痕跡があるというのも、そのようなものを静子が自ら作り出して、それを入れて置いたのであり、それは、「大江春泥の筆蹟」を真似て、小山田六郎氏が、まさに「脅迫状」を書いたと、主人公（寒川）にそう「推理」させるためのものであり、すべては、静子の「仕掛け」であり、すべては、静子の「思い通り」（つまり「思う壺」）になったということである。

*

*

さて、元々は、単に「変態性慾者」の「趣味行為」に過ぎなかったものが、どうしてあの様な「殺人事件」となって現われたのか。しかも殺されたのは当の六郎氏であったばかりでなく、彼はなぜにあの奇妙な「鬘」を冠り、真裸になって、吾妻橋下に漂っていたのか。また、彼の背中への突傷は何者の仕業であったのか。大江春泥がこの事件に関与しなかったとすれば、外に別の犯罪者があったのであるか、等々の疑問が次々と生じて来るかと思うが、それについては、私の「観察と推理」とを申し述べねばならないとある。

そこで、まず、彼の「鬘」の問題から考えてみたいと思うが、それは、小山田六郎氏自らが注文したものであり、その本来の「目的」は、元々、いわば「変態遊戯」を行なう時に、禿げ頭では様にならないと考え、それを隠す変装用のものであったが、一方、主人公（寒川）の「推理」では、洋館へと移ってからは、天井裏の遊戯ができず、そこで今度は、彼自身大江春泥に化けて、静子がそこにいるのを見すまして、洋館の窓の外からチラリと顔を見せて、ある不思議な快感を味わおうと企んだのだと考える。また、その「猿股一つ」に関しても、それは、まさに「変態遊戯」を行なっていた「最中の姿」であったが、主人公（寒川）の「推理」では、吾妻橋下に「屍体」で漂っている時に、周辺に住む浮浪者か乞食などに「着物や高級時計」などは剥ぎ取られたのだろうと考えるのであった。

それでは、いよいよ「主人公」（寒川）の、その最初の「本格的な推理」の「結論」（クライマックス）であるが、それは、次のようなものである。

つまり、「……あの夜（三月十九日）、六郎氏は小梅の葎友達の所から帰り、まだ門が開いていたので、召使達に知られぬ様、ソツと庭を廻って洋館の階下の書齋に入り、闇の中で例の鬘を冠り、外に出て、立木を伝って洋館の軒蛇腹に上り、寢室の窓の外へ廻って行って、そのブラインドの隙間から、ソツと中を覗いていたのである。しかも、その洋館の窓は、隅田川に面して、外は殆ど軒下程の空地もなく、コンクリート塀で囲まれているが、そのコンクリート塀の上部には（盗賊除けの）ビール瓶の破片が植え付けられていて、六郎氏は、軒蛇腹から転落した勢いで、その（盗賊除けの）ビール瓶の破片にぶつかって、背中の肺部に達する程のひどい突傷を負ったというのである。

つまり、「……かようにして、六郎氏は自業自得、彼のあくどい病癖の為に、軒蛇腹から足を踏み外し、塀の上部（ビール瓶の破片）にぶつかって、致命傷を受け、その上、隅田川に墜落し、流れと共に吾妻橋汽船発着所の便所の下へ漂いつき、とんだ死に恥をさらした訳である」と考える。（つまり「事故死」と見ているのである）。これが、主人公（寒川）の、最初の「本格的な推理」の（二番目の推理）であるが、しかし、これは、まさに静子の「仕掛け」通りの、また、静子の「思い通り」の（つまり「思う壺」の）「推理」になっているのである。

さて、糸崎検事に提出する為に、右の意見書を書き上げたのは、それにある日、付け、よると四月二十八日であったが、私はまずこの意見書を静子に見せて、もはや大江春泥の幻影におびえる必要のないことを知らせ、安心させてやろうと、書き上げた翌日小山田家を訪ねたのである。私は六郎氏を疑ってからも二度も静子を訪ねて、家宅搜索みたいなことをやっていながら、実はまだ彼女には何も知らせてはなかったのだ。

当時、静子の身辺では、六郎氏の遺産処分につき、毎日のように親族の者が寄り集まって、色々面倒な問題が起こっていたらしかつたが、殆ど孤立無援状態の静子は、余計私を頼りにしていて、私が訪問をすれば、大騒ぎをして歓迎してくれるのであった。私は例に依って、静子の居間に通されると、甚だ唐突に、「……静子さん、もう心配はなくなりましたよ。大江春泥なんて、初めからいかなかったのです」と言い出して、静子を驚かせた。無論彼女には何のことだか意味が分からぬのだ。そこで、私は、私が探偵小説を書き上げた時いつもそれを友達に読みかせるのと同じ心持で、持参した意見書の草稿を、静子のために朗読したのである。というのは、一つには静子に事の仔細を知らせて安心させるため、また、一つにはこれに対する彼女の意見も聞き、私自身でも原稿の不備な点を見つけ、充分訂正を施したいからであった。

六郎氏の惨虐色情を説明した箇所は、甚だ残酷であった。静子は顔赤らめて、消えも入りたい風情を見せた。手袋を説明した箇所では、彼女は、「……私も、確かにもう一揃あったのに、変だ変だと思っていました」と口を入れた。六郎氏の過失死の所では、彼女は非常に驚いて、真っ青になり、口も利けない様子であった。だが、すっかり読んでしまうと、彼女は暫くは「マア」と言ったときり、ぼんやりしていたが、やがて、その顔にほのかな安堵の色が浮かんで来た。彼女は大江春泥の脅迫状が偽物であって、もはや彼女の身に危険がなくなつたと知って、ほっと安心したものに相違ない。私の手前勝手な邪推を許すならば、彼女はまた、六郎氏の醜悪な自業自得を聞いて、私との不義の情交について抱いていた自責の念を、いくらか軽くすることが出来たに相違ない。「……あの人がそんなひどいことをして私を苦しめていたのだから、私だって……」という弁解の道がついたことを、彼女は喜んでに相違ない。

丁度、夕食時だったので、気のせいかわ彼女はいそいそとして、洋酒などを出して、私をもてなしてくれた。私は私で、意見書を彼女が認めてくれたのが嬉しく、勧められるままに、思わず酒を過ぎた。酒に弱い私は、じき真赤になって、すると私はいつも却って憂鬱になってしまふのだが、余り口も利かず、静子の顔ばかり眺めていた。静子はかなり面やつれをしていたけれど、その青白さは彼女の生地であつたし、身体全体にしなした弾力があつて、芯に陰火の燃えている様な、あの不思議な魅力は、少しも失せていなかったばかりか、その頃はもう毛織物の時候で、古風なフランネルを着ていた彼女の身体の線が、今まになくなまめかしくさえ見えたのである。私は、その毛織物をふるわせてくねくねと蠢く、彼女の四肢の曲線を眺めながら、まだ知らぬ着物に包まれた部分の彼女の肉体を、悩ましくも心の内に描いて見るのだった。

そうして暫く話している内に、酒の酔いが私にすばらしい計画を思いつかせた。それは、どこか人目につかぬ場所に、家を一軒借りて、そこを静子と私との媾曳の場所と定め、誰にも知られぬ様に、二人だけの「秘密の逢瀬」を楽しもうということであった。その時私

は、女中が立ち去ったのを見届けて、浅ましいことを白状しなければならぬが、いきなり静子を引き寄せ、彼女と第二の接吻を交わしながら、そして私の両手は彼女の背中の中のフランネルの毛触りを楽しみながら、私はその思いつきを彼女の耳に囁いたのだ。すると彼女は私のこの不躰な仕草を拒まなかったばかりでなく、微かに首をうなずかせて、私の申し出をも受け入れてくれたのである。

それから二十日余りの、彼女と私との、あの屢々の構曳を、ただれ切った、悪夢の様なその日その日を、何と書き記せばよいのだろう。私は根岸御行の松のほとりに、一軒の古めかしい土蔵つきの家を借り受け、留守は近所の駄菓子屋のお婆さんに頼んで置いて、静子としめし合わせては、多くは昼日中、そこへ落合ったのである。私は恐らく初めて、女というものの情熱の烈しさを、すさまじさを、しみじみと味わった。ある時は、静子と私とは、幼い子供に返って、古ぼけた化物体敷の様に広い家の中を、獵犬の様に舌を出して、ハッハッと肩で息をしながら、もつれ合って駈け廻った。私が掴もうとすると、彼女はいるかみたいに身をくねらせて、巧みに私の手をすり抜けては走った。グツタリと死んだ様に折重なつて倒れてしまうまで、私達は息を限りに走り廻った。ある時は、薄暗い土蔵の中に閉じ籠って一時間も二時間も静まり返っていた。若し人あって、その土蔵の入口に耳をすましていたならば、中からさも悲しげな女のすすり泣きに混じって、二重奏の様に太い男の手離しの泣き声が、長い間続いているのを聞いたであろう。

だが、ある日、静子が芍薬の大きな花束の中に隠して、例の六郎氏常用の外国製乗馬鞭を持つて来た時には、私は何だか怖くさえた。彼女はそれを私の手に握らせて、六郎氏の様に彼女のはだかの肉体を、打擲せよと迫るのだった。恐らくは、長い間の六助氏の残虐が、とうとう彼女にその病癖をうつし、彼女は被虐色情者の、耐え難い欲望にさいなまれる身となり果てていたのである。そして、私も亦、若し彼女との「逢瀬」がこのまま半年も続いたなら、きつと六郎氏と同じ病に取り憑かれてしまったに相違ない。なぜと言つて、彼女の願いを斥けかねて、私とその鞭を彼女のなやかな肉体に加えた時、その蒼白い皮膚の表面に、俄かに脹れ上つて来る、毒々しい蚯蚓腫れを見た時、ゾツとしたことには、私はある不可思議な愉悦（心から喜び楽しむ）さえ覚えたからである。

しかし、私はこの様な男女の情事を描写する為に、この記録を書き始めたものではなかった。それらは、他日私がこの事件を小説に仕組む折、もつと詳しく書き記すこととして、ここには、その情事生活の間に、私が静子から聞き得た、一つの事実を書き添えて置くに止めよう。それは例の六郎氏の鬘のことであったが、あれは正しく六郎氏がわざわざ注文して拵えさせたもので、そうしたことには極端に神経質であった彼は、静子との寢室の遊戯の際、絵にならぬ彼の禿頭を隠す為、静子が笑って止めたにも拘らず、子供の様に真剣になつて、それを注文しに行ったとのことであった。「……なぜ今まで隠していたの」と私が尋ねると、静子は、「……だつて、そんなこと恥ずかしくつて、言えませんでしたわ」と答えたのである。（これは、まさに「隠し球」であり、ここで初めて登場する事実であり、この事実が最初から分かっていたら、寒川の「春泥に化ける為」に鬘を冠つたというような推理も、少しは違ったものになつたかも知れない。）

さて、糸崎検事に提出する為の、右の「意見書」を書き上げたのは、四月の二十八日であつたが、主人公（寒川）は、翌日、早速、静子を安心させようと、小山田家を訪ねるのであつた。当時、静子の身辺では、六郎氏の遺産処分をめぐる、毎日のように親族たちが寄り集まつては、色々面倒な問題が起つていたらしかつたが、殆ど孤立無援状態の静子は、余計に私を頼りにして、私の訪問を大騒ぎをして歓迎してくれたとある。そして、主人公（寒川）は、「……静子さん、もう心配はなくなりましたよ。大江春泥なんて、初めからいなかつたのです」と言い出し、静子を驚かせ、持参した意見書の草稿を、静子のために朗読したのである。——もちろん、静子の「心の中」では飛び上がらんほど嬉しかつたに違いないが、そういう表情を少しも見せるともなく、ただ、「マア」と言つたきり、ぼんやりしていたが、やがて、その顔にはほのかな安堵の色が浮かんで来たとある。

そして、丁度、夕食時だったので、気のせいかわ女はいそいそとして、洋酒などを出して、私をもてなしてくれた。私は私で、意見書を彼女が認めてくれたのが嬉しく、勧められるままに、思はず酒を過したとある。——これはもちろん、男でも女でも相手に酒をたらふく飲ませては、相手を何とかしようという常套手段の一つに過ぎないのである。

そうして暫く話している間に、酒の酔いが私にすばらしい計画を思いつかせた。それは、どこか人目につかぬ場所に、家を一軒借りて、そこを静子と私との構曳の場所と定め、誰にも知られぬ様に、二人だけの秘密の「逢瀬」を楽しもうということであつた。その時、私は、女中が立ち去つたのを見届けてから、いきなり静子を引き寄せ、彼女と第二の接吻を交しながら、私はその思いつきを彼女の耳に囁いたのである。すると彼女は、それを拒まなかつたばかりか、僅かに首をうなずかせて、私の申し出を受け入れてくれたのである。

それから二十日余りの、彼女と私との、あの屢々の構曳を、ただれ切つた、悪夢の様なその日その日を、何と書き記せばよいのだろう。私は根岸御行の松のほとりに、一軒の古めかしい土蔵つきの家を借り受け、留守は近所の駄菓子屋のお婆さんに頼んで置いて、静子としめし合せては、多くは昼日中、そこへ落合つたのである。私は恐らく初めて、女というものの情熱の烈しさを、すさまじさを、しみじみと味わつた。ある時は、静子と私とは、幼い子供に返つて、古ぼけた化木屋敷の様に広い家の中を、猟犬の様に舌を出して、ハツハツと肩で息をしながら、もつれ合つて駆け廻つた。私が掴もうとすると、彼女はいるかみたいに身をくねらせて、巧みに私の手をすり抜けては走つた。グツタリと死んだ様に折重なつて倒れてしまふまで、私達は息を限りに走り廻つた。（これは恐らく、二人とも全裸で動き廻つたのだろう）。ある時は、薄暗い土蔵の中に閉じ籠つて一時間も二時間も静まり返つていた。若し人あつて、その土蔵の入口に耳をすましていたならば、中からさも悲しげな女のすすり泣きに混じつて、二重奏の様に太い男の手離しの泣き声が、長い間続いているのを聞いたであらう。……

だが、ある日、静子が芍薬の大きな花束の中に隠して、例の六郎氏常用の外国製乗馬鞭を持つて来た時には、私は何だか怖くさへなつた。彼女はそれを私の手に握らせて、六郎氏のように彼女のはだかの肉体を、打擲せよと迫るのであつた。恐らくは、長い間の六郎氏の残虐が、とうとう彼女にその病癖をうつし、彼女は被虐色情者の、耐え難い欲望にさいなまれる身となり果てていたのである。そして、私も亦、若し彼女との「逢瀬」がこのまま半年も続いたなら、きつと六郎氏と同じ病に取り憑かれてしまつたに相違ない。なぜと言つて、彼女の願いを斥けかねて、私がその鞭を彼女のなやかな肉体に加えた時、

その蒼白い皮膚の表面に、俄かに脹れ上って来る、毒々しい蚯蚓腫れを見た時、ゾツとしたことには、私はある不可思議な愉悅（心から喜び楽しむ）さえ覚えたからである。

さて、それが他人にどれほど異常と見えようとも、静子にしてみれば、女学校以来の「夢」が、まさに「現実のものとなった」のである。それゆえ、静子の「頭の中」（或いは「心の中」）では、この上もない「無上の喜びに満たされていた」に違いない。それをもっと言えば、静子のその全「人生」の中で、いちばん「幸せな時期」でもあったのである。

つまり、静子という女性は、恐らく、女学校時代から、探偵小説家「寒川」の作品を熱心に愛読していただけではなく、その「寒川」という探偵小説家を、一人の男性としても、彼に強く心惹かれていて、いわば「恋愛感情」のようなものを持っていた、まさに「心の恋人」でもあったのである。それを、もっと具体的に敢えて言えば、静子という女性は、その探偵小説家「寒川」という男性に、いつか「抱かれることをずっと夢見てきた」ということでもある。その「夢が叶う」（つまり「現実のものにする」）ための、まさに「夫殺し計画」でもあるのである。それゆえ、相談相手は、何が何でも、探偵小説家「寒川」でなければならぬし、また、それは、「夫」がことさら憎くて殺したのでもなく、また、「財産」がことさら欲しくて殺したのでもないのである。そうではなくて、彼女が「心の底」から欲したものは、一つは、夫の「束縛」からの解放であり、そして、もう一つは、「心の恋人」でもあった「寒川」を本当の「恋人」にすることだったのである。そのためには、夫の存在、その夫からの「解放」、それがどうしても必要不可欠だったのである。——ここに、初めて「夫殺し」という「考え方」が、はっきりと芽生えて来るのである。

それでは、もう一度、再確認しておきたいと思うが、静子は、女学校を卒業する間際まで、至極幸福に育ったとある。その後の、平田一郎という青年との恋愛は、うそとも本当とも判別し難いが、少なくとも平田一郎、即、春泥ではなく、春泥は、静子であり、丁度、その時、彼女の一家に大きな不幸が訪れ、彼女の父は、多額の借財を残して、殆ど夜逃げ同然に、身を隠さねばならなくなったのである。——その結果、彼女は、女学校を中途退学となり、父親は、それが元でやがて病気で亡くなり、母親との貧しい二人暮らしが始まるのである。そのような時に、やがて実業家小山田六郎氏が彼女を見染め、結婚を申し込む。静子も小山田氏が嫌いではなかった。年こそ十歳以上も違っていたが、小山田氏のスマートな紳士振りに、あるあこがれを感じていたのである。そして、母親と共に、東京の邸に住むようになる。それから七年の歳月が流れ、彼女の母親は、三年後に病気で亡くなることになるが、ここまでは、静子は、恐らく、幸せだったに違いない。

やがて、小山田氏は会社の要務を帯びて、二年ばかり海外に旅行することになるが、その二年の間に、小山田六郎氏は、何時しか本格的な「惨虐色情者」（サディスト）となつて帰って来るのである。一方、静子は、毎日、茶、いけ花、音楽などの師匠に通つて、独居の淋しさを慰めていたという。むろん、そのようなことを実際にどの程度行なっていたのか、また、いわゆる「大江春泥」という作家名で、探偵小説などをもつぱら書いていたのかは、なかなか判別しがたいが、それは、どちらでも大きな問題ではなく、それよりも遙かに大事なことは、この二年間、静子は、夫から完全に解放されて、まさに「自由を満喫」していたのである。——ところが、夫の帰国後、そのような「自由」は完全に奪われ

てしまったとともに、夫の小山田六郎氏は、やがて本格的な「惨虐色情者」(サディスト)となつて、静子夫人の身体には生傷が絶えないような状態になつてしまふのである。

むろん、もし静子という女性が、ひたすら「性的快感」だけを追い求める女性であつたならば、或いは、それは、それで幸せであつたかも知れない。しかし、静子は、理智と文才とに恵まれた女性であり、このままでは、夫・小山田六郎氏の「性奴隸」として縛られ続け、自分のやりたいことも何も出来ずに一生を終えてしまふ。それには、やはり抵抗があつたのである。できるならば、その夫の「束縛」から解放されて、もつと「自由」になりたいという、そういう想いが生じて来ても、何も不思議なことではない。つまり、誰かに「救い」を求めるような「心的状態」になつたということである。そのような時に、女学校時代から愛読していた探偵小説家「寒川」のことをふと思い出しては、その探偵小説家「寒川」に救いを求めるような形で、彼に近づき、そして、相談を持ちかけるようになったのである。……

十九、本格的な推理二(きつかけ)

さて、そんな日が二十日ばかりも続いた頃、あまり顔を見せないのも変だというので、私は口を拭つて小山田家を訪ね、静子に逢つて一時間ばかり、しかつめらしく談話を交したのち、例の御出入の自動車に送られて、帰宅したのであつたが、その自動車の運転手が、偶然にも嘗てわたしが手袋を買取つた、青木民蔵であつたことが、またしても私があの奇怪な白昼夢へと引き込まれて行くきつかけとなつたのである。

手袋は違つていたが、ハンドルにかかつた手の形も、古めかしい紺の春外套も、(彼はワイシャツの上ですぐそれを着ていた)その張り切つた肩の恰好も、前の風よけガラスも、その上の小さな鏡も、すべて約一ヶ月以前の様子と少しも違わなかつた。それが私を変な心持ちにして行つた。私はあの時、この運転手に向かつて、「大江春泥」と呼びかけて見たことを思い出した。すると、私は妙なことに、大江春泥の写真の顔や、彼の作品の変てこな筋や、彼の不思議な生活の記憶で、頭の中が一杯になつてしまつた。しまいには、クツションの私のすぐ隣に春泥が腰かけているのではないかと思う程、彼を身近に感じ出した。そして、一瞬間、ぼんやりしてしまつて、私は変なことを口走つた。

「……君、君、青木君、この間の手袋ね、あれは一体いつ頃小山田さんに貰つたのだい」と聞くと、「へエ？」と運転手は、一ヶ月前の通りに顔をふり向けて、あつけにとられた様な表情をしたが、「……そうですね。あれは、無論去年でしたが、十一月の……たしか帳場から月給を貰つた日で、よく貰いものをする日だと思つたことを覚えてますから、十一月の二十八日でしたよ。間違いありませんよ」と。「……へエ、十一月のねえ、二十八日なんだね」と、私はまだぼんやりしたまま、譚言のように相手の返事を繰り返した。「……だが、旦那、なぜそう手袋のことばかり気になさるんですか。何かあの手袋に曰くでもあつたのですか」と、運転手はニヤニヤ笑つてそんなことを言っていたが、私はそれに返事もしないで、じつと風よけガラスについた、小さなほこりを見つめていた。車が四、五丁走る間、そうしていた。だが、突然、私は車の中で立上がつて、いきなり運転手の肩を掴んで、怒鳴つた。……君、それは本当だね、十一月二十八日ということは。君は裁判官の前でもそれが断言出来るかね」と聞くと、車がフラフラとよろめいたので、運転手はハ

ンドルを調節しながら、「……裁判官の前ですって、冗談じゃありませんよ。だが、十一月二十八日に間違いはありません。証人だつてありますよ。私の助手もそれを見ていたんですから」と、青木は、私が余り真剣なので、あつげにとられながらも、真面目に答えた。「……じゃ、君、もう一度引返すんだ。小山田さんへ引返すんだ」と言うのであった。

運転手は益々面喰らつて、やや怖れをなした様子だったが、それでも私の言うがままに、車を帰して、小山田家の門前についた。私は車を飛び出すと、玄関へかけつけ、そこにいた女中を捕えて、いきなりこんなことを聞き訊すのであった。それは、「……去年の暮れの煤掃きの折、この家では、日本間の方の天井板をすつかりはがして、灰汁洗いをした相だね。それは本当だろうね」と。それは先にも述べた通り、私はいつか天井裏へ上つた時、静子にそれを聞いて知っていたのだ。女中は私が気でも違つたと思つたかも知れない。暫く私の顔をまじまじと見ていたが、「……エエ、本当でございませう。灰汁洗いはなく、ただ水で洗われたのですけれどね、灰汁洗い屋が来たことは来たのです。あれは暮れの二十五日でございませう」と答える。「……どの部屋の天井も？」と聞くと、「……エエ、どの部屋の天井も」と言うのであった。

それを聞きつけたのか、奥から静子も出て来たが、彼女は心配そうに私の顔を眺めて、「……どうなすつたのです」と尋ねるのであった。私はもう一度さっきの質問を繰り返して、静子からも女中と同じ返事を聞くと、挨拶もそこそこに、また、自動車に飛び込んで、私の宿へ行くように命じたまま、深々とクツションに凭れ込み、私の持前の泥のような妄想に陥つて行くのだった。

小山田家の日本間の天井板は昨年十二月二十五日、すつかり取りはずして水洗いをした。それでは、例の「飾 釘」が天井裏へ落ちたのは、その後でなければならぬ。然るに一方では、十一月二十八日に手袋が運転手に与えられている。天井裏に落ちていた「飾 釘」が、その手袋から脱落したものであることは、先に屢々述べた通り、疑うことの出来ない事実だ。すると、問題の手袋の釘は、落ちぬ先になつていたということになる。このアインシュタイン物理学の実例めいた不可思議な現象は、抑も何を語るものであるか、私はそのへ気がついたのであった。私は念の為にガレージに青木民蔵を訪ね、彼の助手の男にも会つて、聞き訊して見たけれど、十一月二十八日に間違いはなく、また、小山田家の天井洗いを引受けた請負人をも訪ねて見たが十二月二十五日に間違いはなかった。彼は、天井板をすつかりはずしたのだから、どんな小さな品物にしろ、そこに残っている筈はないと請け合つてくれた。

それでもやはり、あの 釘は六郎氏が落としたりと強弁する為には、こんな風にも考える外はなかった。即ち、手袋からとれた 釘が六郎氏のポケットに残っていた。六郎氏は、それを知らずに釘のない手袋は使用できぬので運転手に与えた。それから少なく見て一ヶ月後、多分は三ヶ月後に（脅迫状が来始めたのは二月頃からであった）同氏が天井裏へ上つた時、洵に偶然にも 釘がそのポケットから落ちたという、持つて廻つた順序なのだ。手袋の 釘が外套でなくて服のポケットに残っていたというのも変だし、（手袋は多く外套のポケットへしまうものだ。そして、六郎氏が天井裏へ外套を着て上つたとは考えられぬ。いや、洋服を着て上つたと考えることさえ、かなり不自然だ）それに六郎氏のような金満紳士が、暮れに着ていた服のまま春を越したとも思われぬではないか。

これがきっかけとなつて、私の心にはまたしても陰獣大江春泥の影がさして来た。六

郎氏が惨虐色情者であったという近代の探偵小説めいた材料が、私にとんでもない錯覚を起させたのではなかったか。(彼が外国製乗馬鞭で静子を打擲したことだけは、疑いもない事実だけれど)、そして、彼はやっぱり何者かの為に殺害されたのではあるまいか。大江春泥、アア、怪物大江春泥の俤が、しきりに私の心にねばりついて来るのだ。

一度そんな考えが芽生えようと、凡ての事柄が、不思議に疑わしくなってくる。一介の空想小説家に過ぎない私に、意見書に記したような推理があんなに易々と組立てられたという 것도、考えて見ればおかしいのだ。現に私はあの意見書のどこやらに、とんでもない錯覚が隠れているような気がしたものだから、一つは静子との情事に夢中だったせいもあるけれど、草稿のまま清書もしないで放つてある。事実私は何となく気が進まなんだ。そして、今ではそれが却つてよかつたと思うようにさえなつて来たのだ。

考えて見ると、この事件には証拠が揃い過ぎていた。私の行く先々に、待ち構えていたように、御あつらえ向きの証拠品がゴロゴロしていた。当の大江春泥も彼の作品で言っていた通り、探偵は、多過ぎる証拠に出会った時こそ、警戒しなければならぬのだ。第一あの真に迫つた脅迫状の筆蹟が、私の妄想した様に六郎氏の偽筆だったというのは、甚だ考え難いことではないか。嘗て本田も言ったことだが、たとえ春泥の文字は似せることが出来ても、あの特徴のある文章を、しかも方面違いの実業家であった六郎氏に、どうして真似ることが出来たのであろう。私はその時まで、すっかり忘れていたけれど、春泥作『一枚の切手』という小説には、ヒステリーの医学博士夫人が、夫を憎む余り、博士が彼女の筆蹟を手習して、贋の書置きを作つたような証拠を作り上げ、博士を殺人罪に陥れようと企らんだ話がある。ひよつとしたら、春泥はこの事件にも、その同じ手を用いて、六郎氏を陥れようと計つたのではないだろうか。

見方によっては、この事件はまるで大江春泥の傑作集の如きものであった。例えば、天井裏の隙見は、『屋根裏の遊戯』であり、証拠品の鉤も同じ小説の思いつきであるし、春泥の筆筆を手習したのは、『一枚の切手』だし、静子の項の生傷が残酷色情者を暗示したのは『B坂の殺人』の方法である。それから、ガラスの破片が突傷を拵えたことと言ひ、はだかの死体が便所の下に漂つていたことと言ひ、その他、事件全体が大江春泥の体臭に充ち満ちているのだ。これは偶然にしては余りに奇妙な符合ではなかったか。初めから終わりまで、事件の上に春泥の大きな影がかぶさつていたのではなかったか。私はまるで、大江春泥の指示に従つて、彼の思うがままの推理を組立てて来たような気がするのだ。春泥が私にのりうつたのではないかとさえ思われたのだ。

春泥はどこかにいる。そして、事件の底から蛇のような目を光らせていたに相違ない。私は理屈ではなく、そんな風を感じないではいられた。だが、彼はどこに居るのだ。私はそれを下宿の部屋で、蒲団の上に横になつて考えていたのだが、流石肺臓の強い私も、この果てしない妄想にはうんざりした。考えながら、私は疲れ果ててウトウトと睡つてしまった。そして、妙な夢を見てハッと目が醒めた時、ある不思議なことを思い浮かべたのだ。

一、大江春泥の細君の特徴

さて、夜が更けていたけれど、私は彼の下宿に電話をかけて、本田を呼び出してもらつ

た。そして、「……君、大江春泥の細君は丸顔だったと言ったねえ」と、私は本田が電話口に出ると、何の前置きもなく、こんなことを尋ねて、彼を驚かした。すると、「……エエ、そうでしたよ」と、本田は暫くして私だと分かったのか眠そうな声で答えた。そこで、「……いつも洋髪に結っていたのだね」と聞くと、「……エエ、そうでしたよ」と答えるので、「……近眼鏡をかけていたのだね」、「……エエ、そうですよ」、「……金歯を入れていたのだね」と聞くと、「……エエ、そうですよ」と答えるのであった。

そこで、「……歯が悪かったのだね。そして、よく頬に歯痛止めの貼り薬をしていたというじゃないか」、「……よく知ってますね、春泥の細君に逢ったのですか」、「……いや、桜木町の近所の人に聞いたのだよ。だが、君の逢った時も、やっぱり歯痛をやっていたのだね」、「……エエ、いつもですよ。よっぽど歯の性が悪いのでしょうか」、「……それは右の頬だったかね」、「……よく覚えてないけれど、右のようでしたかね」、「……しかし、洋髪の若い女が、古風な歯痛止めの貼り薬は少しおかしいね。今時そんなもの貼る人はないからね」、「……そうですね。だが、一体どうしたんです。例の事件、何か手掛りが見つかったのですか」、「……まあ、そうだね。詳しいことはそのうち話そうよ」と言ったわけで、私は前に聞いて知っていたことを、もう一度念のために本田にただして見たのであった。「さて、これも初めて出て来る「隠し玉」(新しい情報)であり、大江春泥の細君の特徴は、まず、髪型は、洋髪に結っており、顔は、丸顔で、歯には、金歯をはめ、眼には、近眼鏡をかけていて、右の頬には、歯痛止めの貼り薬を貼っていたという特徴であるが、これはもちろん、静子の特徴を隠す為の変装になるのである。」

それから、私は机の上の原稿紙に、まるで幾何の問題でも解くように、様々の形や文字や公式のようなものを、殆ど朝までも書いては消し書いては消ししていたのである。

二十、本格的な推理二(きっかけの解説)

さて、「物語」(ストーリー)は、いよいよ「佳境」(クライマックス)へと向かうわけであるが、その「きっかけ」は、やはり同じ「車の中」であり、それは、次のようなものである。つまり、「……さて、あまり顔を見せないのも変だということで、私は、小山田家を訪ねて、一時間ばかり談話をしたのち、例の御出入の自動車に送られて、帰宅をした」が、その自動車の運転手が偶然にも嘗て私が手袋を買取った、青木民蔵であったので、何気なく、「……君、この間の手袋ね、あれは一体いつ頃小山田さんに貰ったのだい」と聞くと、「そうですね、あれは、無論去年でしたが、十一月の……たしか帳場から月給を貰った日で、よく貰いものをする日だと思つたことを覚えてますから、十一月の二十八日でした。間違ありませんよ」と言うのであった。「……へエ、十一月のねえ、二十八日なんだね」と、ぼんやりと考えているうちに、主人公(寒川)は、何かにふと気づいたように、「……君、それは本当だね、十一月二十八日というのは、君は裁判官の前でもそれが断言出来るかね」と聞かれて、車は急に、フラフラよろめき出して、運転手はそれをハンドルで調節しながら、「……裁判官の前ですって、冗談じゃありませんよ。だが、十一月二十八日に間違いはありません。証人だってありますよ。私の助手もそれを見ていたんですから」と、私が余り真剣なので、あっけにとられながらも、真面目に答えた。「……じゃ、君、もう一度引返すんだ、小山田邸へ」と叫ぶと、運転手は益々面食らって、やや恐れを

なした様だったが、それでも私の言うがままに車を帰して、小山田家の門前にと着いた。私は車から飛び出すと、玄関へかけつけ、そこにいた女中を捕えて、「……去年の暮れの煤掃きの折、この家では、日本間の方の天井板をすっかりはがして、灰汁洗いをした相だね。それは本当だろうね」と聞いた。それは先にも述べた通り、私はいつか天井裏へ上った時、静子にそれを聞いて知っていたのだ。女中は私に私でも違ったと思つたかも知れない。暫く私の顔をまじまじと見ていたが、「……エエ、本当でございます。灰汁洗いではなく、ただ水で洗われたのですけれどね、灰汁洗い屋が来たことは来たのです。あれは暮れの二十五日でございました」と言うのであつた。小山田家の日本間の天井板は、昨年十二月二十五日、すっかり取り外して水洗いしたのである。それは、天井洗いを引受けた請負人をも訪ねてみたが、やはり、彼は、「……天井板をすっかり外したのだから、どんな小さな品物にしる、そこに残っている筈はない」と請け負ってくれたのである。

*

*

さて、これは、一体、何が問題になつていのかと言えば、それは、天井裏に落ちていた例の小山田氏の手袋の「飾釦」のことであるが、運転手は、「……それを十一月二十八日にもらつた」と言い、一方、女中は、「……天井板の掃除は、十二月二十五日でした」と言つてゐる。——まず、大事なことは、運転手が手袋をもらつた時には、右の手袋には、すでに「飾釦」は付いていなかった。だとすれば、小山田氏が天井裏に「飾釦」を落とすのは、運転手が手袋をもらつた十一月二十八日以前でなければならぬ。一方、天井板の掃除は、十二月二十五日に行ない、天井裏には何もない状態になつた。だとすれば、天井裏に落ちていた手袋の「飾釦」は、十二月二十五日以降でなければならぬ。これは、まったく一致しない。つまり、小山田氏が天井裏に「飾釦」を落とせるのは、運転手に手袋を与える十一月二十八日以前までであり、運転手に手袋を与えた十一月二十八日以降は、自分の手元はその手袋自体がないのだから、天井裏に落としようがないのである。だとすれば、小山田氏が天井裏に「飾釦」を落とすのではなく、ほかの誰かでないならばならない。それは、結局、静子が、十二月二十五日以降、天井裏に小山田氏の手袋の「飾釦」を意図的に落とすとしたということである。

そして、考えて見ると、この事件には証拠が揃ひ過ぎていた。私の行く先々に、待構えていた様に、御あつらえ向きの証拠品がゴロゴロしていた。探偵は、多過ぎる証拠に出会つた時こそ、警戒しなければならぬのだ。私はまるで、大江春泥の指示に従つて、彼の思うがままの推理を組み立てて来た様な気がする。——そう考えると、主人公（寒川）は、もう一度、一から、すべてを徹底的に考え直してみることにするのであつた。

二一、静子からの嬢叟の手紙

ところで、いつも私の方から出す嬢叟の打合せの手紙が、三日ばかり途切れたものだから、待ちきれなくなつたものか、静子から明日の午後三時頃、きつと例の隠れが来てくれる様にとの速達が来た。それには、「……私という女の、余りにもみだらな正体を知つて、あなたはもう私がいやになつたのではありませんか、私が怖くなつたのではありませんか」と怨じてあつた。私はこの手紙を受け取つても、妙に気が進まなかつた。彼女の顔を見るのがいやでしょうがなかつた。だが、それにも拘らず、私は彼女の指定してきた

時間に、御行の松の下の、あの化物屋敷へ出向いて行った。(本文)

* *
さて、これはどういう「心理」になるのか？ 一方では、気が進まない気持ちと、一方では、それにも拘らず、出向いて行く心理。主人公(寒川)は、一方では、誰が真犯人かの謎はすでに解いて知っているのであり、だからこそ、妙に気が進まないとともに、彼女の顔を見るのがいやでしようがないのである。若しも何も知らなかったならば、彼はもちろん、喜んでそこに出向いて行ったに違いない。また、一方では、いやでも出向いて行かなければならないのは、いわゆる「六郎氏変死事件」をこのまま放置は出来ず、それにまさに「決着」を付けなければならぬからであり、それはまた、愛する「静子」をどこまでも「問い詰め」(問い正す)作業にならざるを得ないのであり、そのような様々な「複雑な想い」が錯綜しているのである。

二二、静子の衣装と土蔵の中

さて、それはもう六月に入っていたが、梅雨の前のそこひの様に憂鬱な空が、押しつける様に頭の上に垂れ下がって、気違ひみたいにむしむしと暑い日だった。電車をおりて、三、四丁(一丁は約一〇九段)歩く間に、脇の下や背筋などが、ジメジメと汗ばんで、触つて見ると富士絹のワイシャツが、ネットリと湿っていた。

静子は、私より一足先に来て、涼しい土蔵の中のベットに腰かけて待っていた。土蔵の二階には絨毯を敷きつめ、ベットや長椅子を置き、幾つも大型の鏡を並べなどして、私達は遊戯の舞台を出来るだけ効果的に飾り立てたのだが、静子は私が止めるのも聞かず、絨毯にしる、ベットにしる、出来合ではあつたけれど、馬鹿馬鹿しく高価な品を、惜しげもなく買入れたのである。

静子は、派手な結城紬の一重物に、桐の落ち葉の刺繍を置いた黒縞子の帯をしめて、例によって艶々とした丸髷のつむりをふせ、ベットの純白のシーツの上に、フワリと腰をおろしていたが、洋風の調度と、江戸好みな彼女の姿とが、ましてその場所が薄暗い土蔵の二階なので、甚しく異様な対照を見せていた。私は、夫をなくしても変えようともしない、彼女の好きな丸髷(本来既婚女性の髪型)の匂やかに艶々しく輝いているのを見ると、直ぐ様、その髷がガックリとして、前髪がひしゃげた様に乱れて、ネットリしたおくれ毛が、首筋の辺にまきついていて、あのみだらがましき姿を目に浮かべないではいられなかった。彼女はその隠家から帰る時には、乱れた髪をときつけるのに、鏡の前で三十分も費すのが常であつたから。(本文)

* *
まず、季節は六月に入っていて、梅雨の前の憂鬱な空が、押しつける様に頭の上に垂れ下がって、気違ひみたいにむしむしと暑い日だったとある。また、電車をおりて、三、四丁(約三〇四〇段)歩く間に、脇の下や背筋などが、ジメジメと汗ばんで、触つて見ると富士絹のワイシャツが、ネットリと湿っていたほどであつたともある。それなのに、静子は、派手な結城紬の一重物に、桐の落ち葉の刺繍を置いた黒縞子の帯をしめて、例によって艶々とした丸髷の髪型という、いわば「盛装」でやって来ているのである。例えば、女性は、好きな「恋人」と逢う時には、必ず、今日はどのような「服装や髪型」にす

るかを考えるものであるが、それは、恋人に、「……いま一番綺麗な自分を見せたい」と思うからであり、それがまさに「静子の姿」なのである。また、静子の好きな丸髻は、事が進むに連れて、前髪はひしゃげた様に乱れて、ネットリしたおくれ毛が、首筋の辺りに巻き付いているような、あの淫らがましき姿となり、その乱れた髪をときつけるのに、鏡の前で三十分も費すのが常であったとなるのである。

また、二人の「構曳」場所の「土蔵」のその二階には、「……絨毯を敷きつめ、ベットや長椅子を置き、幾つも大型の鏡を並べなどして、私達は遊戯の舞台を出来るだけ効果的に飾り立てたのだが、静子は私が止めるのも聞かず、絨毯にしる、ベットにしる、出来合ではあったけれど、馬鹿馬鹿しく高価な品を、惜しげもなく買入れたのである」とある。それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、静子にとって、主人公（寒川）との「情事」は、極めて特別のものであり、それは、静子という女性は、女学校時代から、探偵小説家「寒川」の作品を熱心に愛読していただけではなく、その「寒川」という探偵小説家を、一人の男性としても、彼に強く心惹かれていて、いわば「恋愛感情」のようなものを持っていた、まさに「心の恋人」でもあったのである。それを、もっと具体的に言えば、静子という女性は、その探偵小説家「寒川」という男性に、いつか「抱かれることをずっと夢見てきた」のであり、その「夢が叶う」（つまり「現実のものにする」）ための、まさに「夫殺し計画」でもあったのである。つまり、「心の恋人」でもあった「寒川」を本当の「恋人」（やがては二人で暮らす）ためには、夫の存在、（夫がいては出来ない）、その夫からの「解放」、それがどうしても必要不可欠だったのである。そのためにこそ、静子は自分の人生のすべてを賭けてしまったのである。

二三、本格的な推理二（天井裏の鉦）

さて、静子は、「……この間、灰汁洗い屋のことを、態々聞きに戻っていらつしやたのは、どうしたんですの。あなたの慌て様たらなかつたのね。あたし、どういう訳だかと、考えて見たんですけど、分かりませんのよ」と、私が入って行くと、直ぐそんなことを聞いて来た。（それは何か感づかれたのではないかと心配になったからである）。そこで、「……分からない？ あなたには」と、私は洋服の上衣を脱ぎながら答えた。「……大変なことなんだよ。僕は大間違いをやっていたのさ。天井を洗ったのが十二月の末で、小山田さんの手袋の鉦のとれたのがそれより一月以上も前なんです。だって、あの運転手に手袋をやったのが十一月の二十八日だって言うから、鉦のとれたのはそれ以前に決まっているんだからね。順序がまるであべこべなんですよ」と言うと、「まあ」と静子は非常に驚いた様子であったが、まだはつきりとは事情がのみ込めぬらしく、「……でも、天井裏へ落ちたのは、鉦がとれたよりはあとなのでしょう」と聞くと、「……あととはあとだけれど、その間の時間が問題なんだよ。つまり、鉦は小山田さんが天井裏へ上がった時、その場でとれたんでなければ、変だからね。正確に言えば、成る程あとだけれど、とれると同時に天井裏へ落ちて、そのままそこに残されていたのだからね。それがとれてから、落ちるまでの間に一月以上もかかるなんて、物理学の法則では説明出来ないじゃないか」と言うのと、「そうね」と、彼女は少し青ざめて、まだ考え込んでいた。

例えば、「……とれた鉦が、小山田さんの服のポケットにでも入っていて、それが一月

のちに偶然天井へ落ちたとすれば、説明がつかぬことはないけれど、それにしても、小山田さんは去年の十一月に着ていた服で、春を越したのかい」と聞くと、「……いいえ、あの人おしやれさんだから、年末には、ずっと厚手の暖かい服に替えていましたわ」と言うのであった。「……それごらんさい。だから、変でしよう」と、「……じゃあ、やつぱり、平田が……」と、言いかけて、口をつぐんだ。「……そうだよ。この事件には、大江春泥の体臭が余り強過ぎるんだよ。で、僕はこの間の意見書をまるで訂正しなければならなくなった」と言うのであった。(この鉤の問題は、すでに解かれていますのであり、それを静子に説明している場面である。)(本文)

二四、本格的な推理二(寒川の三つの推理)

さて、私はそれから前章に記した通り、この事件が大江春泥の傑作集の如きものであること、証拠の揃い過ぎていたこと、偽筆が余りにも真に迫っていたことなどを、彼女の為に簡単に説明した。「……あなたは、よく知らないだろうが、春泥の生活というものが、実に変なんだ。彼奴は、なぜ訪問者に逢わなかったか、なぜあんなにも度々転居したり、旅行をしたり、病気になったりして、訪問者を避けようとしたか、おしまいには、向島須崎町の家を、無駄な費用をかけて、なぜ借りっぱなしにして置いたか、いくら人厭いの小説家にしろ、あんまり変じゃないか。人殺しでもやる準備行為でなかったとしたら、あんまり変じゃないか」と、私は静子の隣にベットに腰をおろして話していたのだが、彼女は、やつぱり春泥の仕業であったかと思うと、俄かに怖くなった様子で、ぴったりと私の方へ身体をすり寄せて、私の左の手首を、むず痒く握りしめるのであった。

「……考えてみると、私はまるで彼奴の傀儡にされた様なものだね。彼奴の予め拵えて置いた偽証を、そのまま、彼奴の推理をお手本にして、おさらいさせられたも同然なんだよ。アハハハ……」と、私は自ら嘲る様に笑った。「……あいつは恐ろしい奴ですよ。僕の物の考え方をちゃんと呑込んでいて、その通りに証拠を拵え上げたんだからね。普通の探偵やなんかでは駄目なんだ。僕の様な、推理好みの小説家でなくては、こんな廻りくどい突飛な想像が出来るものではないのだから。だが、若し犯人が春泥だとすると、色々無理が出来て来る。その無理が出来て来る所が、この事件の難解な所以で、春泥が底の知れない悪者だという訳だけだね。無理というのはね、煎じ詰めると、二つの事柄なんだが、一つは、例の脅迫状が小山田さんの死後バツタリ来なくなつたこと、もう一つは、日記帳だとか春泥の著書とか「新青年」なんかだが、どうして小山田さんの本棚に入っていたかということ。この二つだけは、春泥が犯人だとすると、どうも辻褄が合わなくなるんだよ。たとえ日記帳の例の欄外の文句は、小山田さんの筆癖を真似て書込めるにしたところで、また新青年の口絵の鉛筆のあとなんかも、偽証を揃える為にあいつが作って置いたとしたところが、どうにも無理なのは、小山田さんしか持つていない、あの本棚の鍵を、春泥がどうして手に入れたかということだよ。そして、あの書齋に忍び込めたかということだよ。私はこの三日の間、その点を頭の痛くなる程考え抜いたのだがね。その結果、どうやら、たった一つの解決法(それは「犯人を仮に静子と見る見方」)を見つけたように思うのだがとなるのである。(本文)

*

*

まず、探偵作家「大江春泥」というのは、極度の人嫌いであり、世間に顔出しをせぬ男であり、彼の厭人病と秘密病は、作家仲間や雑誌記者の間に知れ渡っていた。また、彼はよく転居したり、殆ど年中病氣と称して、作家の会合などにも顔を出したことがなかった。それは、一体、なぜなのか？ それは、言うまでもなく、探偵作家「大江春泥」とは、すなわち、「静子自身」であったからである。そして、そのことを世間や夫に知られることを何よりも恐れていたとともに、もう一つは、静子自身にはもつと恐ろしい「密かな計画」があり、それを遂行するためにはどうしても必要不可欠な道具立てでもあったのである。そして、いわゆる「六郎氏変死事件」についての、主人公（寒川）の「最初の推理」は、Uの右端の上部には小梅町（六郎氏の暮友達の家所在地）がある。そのUの右端上部を出て、Uの字の下部の吾妻橋までやって来た時、彼を汽船発着所の暗がりへ連れ込み、そこで凶行に及び、その死体を河中へ投棄したとともに、下手人は、春泥であることに、疑を挟む余地はないと考えるのであった。

ところが、ある時、御出入の運転手のハンドルを握る手袋のホックの飾釦を見ているうちに、主人公（寒川）は、やがて、小山田家の天井裏で拾ったあの「金属の丸いもの」とは、実は手袋の「飾釦」だったのかとふと思ひ、そこで、運転手に「手袋」のことを聞いてみると、「……寒い時分に、亡くなった小山田の旦那からもらったものであり、飾釦は、最初から右手にはなかった」と言うのであった。それを聞いて、主人公（寒川）は、もし小山田家の天井裏で拾ったあの「金属の丸いもの」が、もし「小山田六郎氏」の手袋のものだとすれば、天井裏を散歩していた人物とは、実は「小山田六郎氏」ということにならないかと思うのであった。また、六郎氏が見かけによらぬ、恐ろしい本格的な「惨虐色情者」（サディスト）であったことも知るのである。

それらに加えて、故六郎氏の書齋を調べてみると、鍵のかかった本棚が見つかるが、その鍵はなく、許可を得て壊して開けてみると、その中には、六郎氏の数年の日記帳、幾つかの袋に入った書類、手紙の束、書籍などが一杯入っていたが、それを丹念に調べた結果、この事件に関係ある「三冊の書冊」を発見するのであった。

まず、その一つは、六郎氏と静子夫人との結婚の年の日記帳で、赤インクで、「……余は平田一郎なる青年と静子との関係を知れり。……」と。つまり、六郎氏は、結婚の当初から、夫人の秘密は知っていたが、それを夫人には一言も言わなかったとある。しかし、なぜ、「赤インク」なのか？ これは恐らく、静子を書き加えたものになるのだろう。

第二は、大江春泥短編集『屋根裏の遊戯』である。かかる書物を、実業家小山田六郎氏の書齋で発見とは、何という驚きかとあるが、これも、静子が入れて置いたものであり、それは、この本を真似て、小山田六郎氏は、天井裏を散歩するようになる。その時に、指紋消しとして手袋を使用したか、その手袋の「飾釦」をうっかり落としてしまったという、そういう展開（つまり推理）を、主人公（寒川）にさせるためのものである。

第三は、博文館発行の雑誌「新青年」第六卷第十二号である。これには春泥の作品は掲載されていないが、その代り、口絵に彼の原稿の写真版が原寸のまま原稿紙半枚分程、大きく出ている。余白に「大江春泥の筆蹟」と説明がついていた。妙なことは、その写真版を光線に当ててよく見ると、厚いアートペーパーの上に、縦横に爪の痕のようなものがついている。これは誰かが写真の上に薄い紙を当てて、鉛筆で春泥の筆蹟を、幾度もなすったものとしか考えられない。これも、「大江春泥の筆蹟」を真似て、小山田六郎氏

が、まさに「脅迫状」を書いたと、主人公（寒川）に「推理」させるためのものである。かくして、我々が今迄犯人と信じ切っていた大江春泥こと平田一郎は、意外にも、最初からこの事件に存在しなかったと考える外はなく、結局、小山田六郎氏自身が、実は犯人（実行犯）であったという寒川の最初の「本格的な推理」になるのである。

それは、「……あの夜（三月十九日）、六郎氏は小梅の暮友達の所から帰り、まだ門が開いていたので、召使達に知られぬ様、ソツと庭を廻って洋館の階下の書齋に入り、闇の中で例の鬘を冠り、外に出て、立木を伝って洋館の軒蛇腹に上り、寝室の窓の外へ廻って行って、そのブラインドの隙間から、ソツと中を覗いていたのである。しかも、その洋館の窓は、隅田川に面して、外は殆ど軒下程の空地もなく、コンクリート塀で囲まれていたが、そのコンクリート塀の上部には（盗賊除けの）ビール瓶の破片が植え付けられていて、六郎氏は、軒蛇腹から転落した勢いで、その（盗賊除けの）ビール瓶の破片にぶつかって、背中の肺部に達する程のひどい突傷を負ったというのである。

つまり、「……かようにして、六郎氏は自業自得、彼のあくどい病癖の為に、軒蛇腹から足を踏み外し、塀の上部（ビール瓶の破片）にぶつかって、致命傷を受け、その上、隅田川に墜落し、流れと共に吾妻橋汽船発着所の便所の下へ漂いつき、とんだ死に恥をさらした訳である」と考える。（つまり「事故死」と見ているのである）。これが、主人公（寒川）の、最初の「本格的な推理」（二番目の推理）であるが、しかし、これは、まさに静子の「仕掛け」通りの、また、静子の「思い通り」の（つまり「思う壺」の）「推理」になっているのである。

*

*

さて、三番目の「推理」（その「きっかけ」は、やはり天井裏に落ちていた例の小山田氏の手袋の「飾釦」のことからであり、運転手は、「……それを十一月二十八日にもらった」と言い、一方、女中や業者は、「……天井板の掃除は、十二月二十五日であり、天井裏には何もない状態になった」と言っている。だとすれば、天井裏に落ちていた手袋の「飾釦」は、十二月二十五日以降でなければならぬし、一方、小山田氏が天井裏に「飾釦」を落とせるのは、運転手に手袋を与えた十一月二十八日以前でなければならぬ。これは、まったく一致しない。だとすれば、小山田氏が天井裏に「飾釦」を落としたのではなく、ほかの誰かであればならない。そこで、再び、大江春泥（平田一郎）の存在が浮び上って来るが、主人公（寒川）は、若し犯人が春泥だとすると、色々無理が出来る。それを煎じ詰めると、二つの事柄なんだが、一つは、例の脅迫状が小山田さんの死後バツタリ来なくなること、静子を殺すことこそが、第一の目的ではなかったのか。また、もう一つは、日記帳だとか春泥の著書とか「新青年」なんか、どうして小山田さんの本棚に入っていたかということである。この二つだけは、春泥が犯人だとすると、どうも辻褄が合わなくなるのである。たとえ日記帳の例の欄外の文句は、小山田さんの筆癖を真似て書き込めるにしたところで、また、新青年の口絵の鉛筆のあとなんか、偽証を揃える為にあいつが作って置いたとしたところが、どうにも無理なのは、小山田さんしか持つていない、あの本棚の鍵を、春泥がどうして手に入れたかということだよ。そして、あの書齋に忍び込めたかということだよ。（それが出来る人間は、いったい誰か？）私はこの三日の間、その点を頭の痛くなる程考え抜いたのだがね。その結果、どうやら、たった一つの解決法を見つけた様に思うのだけれど、と推理は展開するのである。

二五、本格的な推理二（二つの不思議な一致）

さて、「……僕はさつきも言った様に、この事件に春泥の作品の匂いが充ち満ちていることから、彼奴の小説をもっとよく研究して見たら、何か解決の鍵が掴めやしないかと思つて、あいつの著書を出して読んで見たんだよ。それにはね、あなたにはまだ言つてないけれど、博文館の本田という男の話によると、春泥はどんがり帽に道化服という変な姿で、浅草公園にうろついていたと言うんだ。しかも、それが広告屋で聞いて見ると、公園の浮浪人だったとしか考えられないんだ。春泥が浅草公園の浮浪人の中に混じつていたなんて、まるでスチブンスンの『ジキル博士とハイド』みたいじゃないか。僕はそこへ気づいて、春泥の著書の中から、似た様なのを探して見ると、あなたも知つて居るでしょう。あいつが行衛不明になるすぐ前に書いた『パノラマ国』という長編と、それよりは前の作の『一人二役』という短編と、二つもあるのです。それを読むと、あいつが『ジキル博士とハイド』式なやり方に、どんなに魅力を感じていたか、よく分かるのだ。つまり、一人でいながら、二人の人物に化けることにね」と言う。

すると、「……あたし怖いわ」と、静子はしつかり私の手を握りしめて言った。「……あなたの話し方、気味が悪いのね。もうよしましうよ。そんな話。こんな薄暗い蔵の中じやいやですわ。その話はあとにして、今日は遊びましうよ。あたし、あなたとこうしていれば、平田のことなんか、思い出しもしないのですもの」と言うのであった。

主人公（寒川）は、「……まあ御聞きなさい。あなたにとつては、命にかかわる事なんですよ。もし春泥がまだあなたをつけねらつて居るとしたら」と、私は恋の遊戯どころではなかつた。「……僕はまた、この事件の内から、ある不思議な一致を二つだけ発見した。学者臭い言い方をすれば、一つは空間的な一致で、一つは時間的な一致なだけけれど、ここに東京の地図がある」と、私はポケットから用意して来た簡単な東京地図を取り出して、指で差し示しながら、「……僕は大江春泥の転々として移り歩いた住所を、本田と象潟署の署長から聞いて覚えて居るが、それは、池袋、牛込喜久井町、根岸、田中初音町、日暮里金杉、神田末広町、上野桜木町、本所柳島町、向島須崎町と、大体こんな風だった。このうち池袋と、牛込喜久井町だけは大変離れて居るけれど、あとの七カ所は、こうして地図の上で見ると、東京の東北の隅の狭い地域に集まつて居る。これは春泥の大変な失策だったのですよ。池袋と牛込が離れて居るのは、春泥の文名が上つて、訪問記者などがおしかけ始めたのは、根岸時代からだという事実を考え合わせると、よくその意味が分かる。つまりあいつは喜久井町時代までは、凡て原稿の用紙を手紙だけで済ませていたのだからね。ところで、根岸以下の七カ所を、こうして線でつないで見ると、不規則な円周を描いて居ることが分かるが、その円の中心を求めたならば、そこにこの事件解決の鍵が隠れて居るのだよ。何故そうかということ、今説明するけれど」と言うのであった。

すると、その時、静子は何を思つたか、私の手を離して、いきなり両手を私の首にまきつけると、例のモナ・リザの唇から、白い八重歯を出して「怖い」と叫びながら、彼女の頬を私の頬に、彼女の唇を私の唇に、しつかりとくっつけてしまった。やや暫くそうしていたが、唇を離すと、今度は私の耳を人差し指で、巧みにくすぐりながら、そこへ口を近づけて、まるで子守歌の様な甘い調子で、ボソボソと囁くのだつた。

「……あたし、そんな怖い話で、大切な時間を消してしまうのが、悔しくてたまらないのですわ、あなた、あなた、私のこの火の様な唇が分かりませんの、この胸の鼓動が聞えませんの。さあ、あたしを抱いて。ね、あたしを抱いて」と言うのであった。

すると、主人公（寒川）は、「……もう少した。もう少したから辛抱して僕の考えを聞いて下さい。その上で、今日はあなたとよく相談しようと思つて来たのだから」と言い、私は構わず話し続けて行つた。「……それから時間的な一致というのはね。春泥の名前がバツタリ雑誌から見えなくなつたのは、私はよく覚えていますが、おととしの暮からなんだ。それとね、小山田さんが外国から帰国した時期と——あなたはそれをやつぱり、おととしの暮だつて言つたでしょう。この二つがどうして、こんなにもぴつたり一致しているのかしら。これが偶然だろうか。あなたはどう思う？」

私がそれを言い切らぬ内に、静子は、部屋の隅から例の外国製乗馬鞭を持って来て、無理に私の右手に握らせると、いきなり着物を脱いで、うつむきにベッドの上に倒れ、むき出しのなめらかな肩の下から、顔だけを私の方にむりむけて、「……それがどうしたの、そんなこと、そんなこと」と何か訳の分からぬことを、氣違ひみたくに口走つたが、「……サア、ぶつて！　ぶつて！」と叫びながら、上半身を波の様にうねらせるのであった」となるのである。（本文）

*

*

さて、主人公（寒川）は、まず、天井裏の「飾釘」の「疑問」から話を始めるが、それは、前述の通りであり、ここでは省略をして、次の「疑問」は、春泥の生活というものが、実に変で、なぜあんなにも度々転居したり、旅行をしたり、病氣になつたりして、訪問者を避けようとしたか、いくら人厭いの小説家にしろ、あんまり変じゃないかということと、春泥が「犯人」だとすると、なぜ脅迫状が小山田氏の死後バツタリ来なくなつたのか、「……静子を殺すことこそが、第一の目的ではなかつたのか？」と。また、日記帳や春泥の著作或いは「新青年」などが、どうして小山田氏の本棚に入つていたのか、小山田氏しか持つていないはずの、あの本棚の鍵を、春泥はどうやって手に入れたかという疑問である。（それは、静子を仮に犯人とすれば、すべて解ける問題なのである。）

だからこそ、静子は、「……あたし怖いわ。あなたの話し方、氣味が悪いのね。もうよみましょうよ。そんな話。その話はあとにして、今日は遊びましょうよ。あたし、あなたとこうしていれば、平田のことなんか、思い出しもしないのですもの」と言うのであった。

主人公（寒川）は、「……まあ御聞きなさい」と言い、「……僕は、この事件の内から、ある不思議な一致を二つだけ発見した」と言う。その一つは、いわゆる「空間的な一致」であり、それは、大江春泥が転々として移り歩いた住所を、こうして地図の上で見ると、二ヶ所を除く、あとの七ヶ所（それは「……春泥の文名が上つて、訪問記者などがおしかけ始めた以降」）は、不規則な円周を描いていることが分かる。その「円の中心」を求めれば、そこにこの「事件の鍵」が隠れているのだよ。と言うと、——静子は、いきなり両手を私の首にまきつけると、例のモナ・リザの唇から、「怖い」と叫びながら、彼女の頬を私の頬に、彼女の唇を私の唇に、しっかりとくっつけてしまった。そして、「……あなた、そんな怖い話で、大切な時間を消してしまうのが、悔しくてたまらないのですわ、あなた、あなた、私のこの火の様な唇が分かりませんの、この胸の鼓動が聞えませんの。さあ、あたしを抱いて。ね、あたしを抱いて」と必死に言うのであった。

一方、主人公（寒川）は、「……もう少しだ。もう少しだから辛抱して僕の考えを聞いて下さい。その上で、今日はあなたとよく相談しようと思つて来たのだから」と言つてゐる。この「言葉」（今日はあなたとよく相談しようと思つて来たのだから）は、極めて大事な言葉であり、というのも、この時の主人公（寒川）の「知性や理性」は、まだ「健全に機能していた」ということである。そして、もう一つは、いわゆる「時間的な一致」であり、それは、春泥の名前がバツタリ雑誌から見えなくなつた時期と、小山田氏が外国から帰国した時期とが、こんなにもびつたりと一致していることです。この二つがどうして、こんなにもびつたりと一致しているのか？ あなたはどう思うと聞くと、静子は、何を思つたか、部屋の隅から例の外国製乗馬鞭を持つて来て、無理に私の右手に握らせると、いきなり着物を脱いで、うつむきにベットのの上に倒れ、むき出しのなめらかな肩の下から、顔だけを私の方にむりむけて、「……それがどうしたの、そんなこと、そんなこと」と何か訳の分からぬことを口走り、「……サア、ぶつて！　ぶつて！」と叫びながら、上半身を波の様にうねらせるのであつた。（もちろん、これらは、話題を必死に逸らそうとしてゐるとともに、自分の方へと必死に関心を向けさせようとしてゐるのである。）

二六、本格的な推理二（最終的かつ決定的「推理」）

小さな蔵の窓から、鼠色の空が見えていた。電車の響きであろうか、遠くの方から雷鳴の様なものが、私自身の耳鳴りに混つて、オドロオドロと聞えて来た。それは丁度、空から、魔物の軍勢が押しよせて来る、陣太鼓のように気味悪く思われた。恐らく、あの天候と、土蔵の中の異様な空気が、私達二人を気違ひにしたものではなかつたか。静子も私も、あとになって考えて見ると、正気の沙汰ではなかつたのだ。私はそこに横つてもがいてゐる彼女の汗ばんだ青白い全身を眺めながら、執拗にも私の推理を続けて行つた。

「……一方では、この事件の中に大江春泥がいることは、火の様に明らかな事実なんだ。だが、一方では、日本の警察力がまる二ヶ月かかつて、あの有名な小説家を探し出すことが出来ず、彼奴は煙みたいに完全に消え去つてしまつたのだ。ああ、僕はそれを考えるさえ恐ろしい。こんなことが悪夢でないのが不思議な位だ。何故彼は小山田静子を殺そうとしないのだ。ぶつたりと脅迫状を書かなくなつてしまつたのだ。彼奴はどんな忍術で小山田さんの書齋へ入ることが出来たんだ。そして、あの錠前付きの本棚を開けることが出来たんだ。……僕はある人物を思い出さないではいられなかつた。外でもなく、女流探偵小説家平山日出子だ。世間ではあれを女だと思つてゐる。作家や記者仲間でも、女だと信じてゐる人が多い。日出子の家へは毎日の様に愛読者の青年からのラブ・レターが舞込むそうだと。ところが本当は彼は男なんだよ。しかもれっきとした政府の御役人なんだよ。探偵作家なんて、みんな、僕にしろ、春泥にしろ、平山日出子にしろ、怪物なんだ。男でいて女に化けて見たり、女でいて男に化けて見たり、猟奇の趣味が昂じると、そんな所まで行つてしまうのだ。ある作家は、夜女装をし、浅草をぶらついた。そして、男と恋の真似事さえやつた」と、私はもう夢中になつて、気違ひの様に喋りつづけた。顔中に一杯汗が浮かんで、それが気味悪く口の中に流れ込んだ。

「……さあ、静子さん。よく聞いて下さい。僕の推理が間違つてゐるかいな。春泥の住所をつないだ円の中心はどこか。この地図を見て下さい。あなたの家だ。浅草山の宿

だ。皆、あなたの家から自動車で十分以内のところばかりだ。……小山田氏の帰国と一緒に、なぜ春泥はその姿を隠したのか。もう茶の湯と音楽の稽古に通えなくなったからだ。分かりませんか。あなたは小山田さんの留守中、毎日午後から夜に入るまで、茶の湯と音楽の稽古に通ったのです。……ちゃんとお膳立てをして置いて、僕にあんな推理を立てさせたのは誰だったか。あなたですよ、僕を博物館で捕えて、それから自由自在にあやつたのは。……あなたなれば、日記帳に勝手な文字を書き加えることだって、その外の証拠品を小山田さんの本棚に入れることだって、天井へ鉤を落して置くことだって、自由に出るのです。僕はここまで考えたのです。外に考え様がありますか。さあ、返事をして下さい。返事をして下さい」と迫るのであった。

静子は、「……あんまりです、あんまりです」と、裸体の静子は、ワツと悲鳴を上げて、私にとりすがって来た。そして、私のワイシャツの上に顔をつけて、熱い涙が私の肌を感じられた程にも、さめざめと泣き入るのだった。

「……あなたは何故泣くのです。さつきから何故僕の推理を止めさせようとするのです。当り前なれば、あなたには命がけの問題なのだから、聞きたがる筈じゃありませんか。これだけでも、僕はあなたを疑わないではいられぬのだ。御聞きなさい。まだ僕の推理はおしまいじゃないのだ。大江春泥の細君は何故眼鏡をかけていた、金歯をはめていた、歯痛止めの貼り薬をしていた。洋髪に結って丸顔に見せていた。あれは春泥の『パノラマ国』の変装法そっくりじゃありませんか。春泥はあの小説の中で、日本人の変装の極意を説いている。髪型を変えること、眼鏡をかけること、含み綿をすること、それからまた、『一銭銅貨』の中では、丈夫な歯の上に、夜店の鍍金の金歯をはめる思いつきが書いてある。あなたは人目につき易い八重歯を持っている。それを隠す為に、夜店の鍍金の金歯をかぶせたのだ。あなたの右の頬には大きな黒子がある。それを隠す為に、あなたは歯痛止めの貼り薬をしたのだ。洋髪に結んで瓜実顔を丸顔に見せる位なんでもないことだ。そうしてあなたは春泥の細君に化けたのだ。僕はおととい本田にあなたを隙見させて、春泥の細君と似ていないかを確かめた。本田はあなたの丸鬘を洋髪に変え、眼鏡をかけ、金歯を入れさせたら、春泥の細君にそっくりだと言ったじゃありませんか。さあ、言っておしまいなさい。すっかり分かってしまったのだ。それでもあなたは、まだ僕をごまかせようとするのですか」と言うのであった。

私は、静子を突き離すと、彼女はグツタリとベットのの上に倒れかかり、激しく泣き入って、いつまで待っても答えようとはしない。私はすっかり興奮してしまつて、思わず手にしていた乗馬鞭を振るつて、ピシリと彼女のはだかの背中を叩きつけた。私は夢中になつて、これでもか、これでもかと、幾つも幾つもうち続けた。見る見る、彼女の青白い皮膚は赤味走つて、やがて蚯蚓の這った形に、真赤な血がにじんで来た。彼女は私の鞭の下に、いつもすると同じみだらな恰好で、手足をもがき、身をくねらせた。そして、絶入るばかりの息の下から、「平田、平田」と細い声で口走つた。

すると、主人公（寒川）は、「……平田？ ああ、あなたはまだ私をごまかせようとするのですか。あなたが春泥の細君に化けていたなら、春泥という人物は別にある筈だとも言うのですか。春泥なんているものか。あれは全く架空の人物なんだ。それをごまかす為に、あなたは彼の細君に化けて雑誌記者なんか逢つていたのだ。そして、あんなにも度々住所を変えたのだ。しかし、ある人には、まるで架空の人物ではごまかせないもの

だから、浅草公園の浮浪人を備って、座敷に寝かして置いたんだ。春泥が道化師の男に化けたのではなくて、道化服の男が春泥に化けていたんだ」と言う。(これは「浅草公園の誰か浮浪人を一人備って、自分の座敷に寝かして置いて、いかにも「大江春泥」がそこに存在しているかのように見せかけたのである。)

静子はベットの所で、死んだ様になって、黙り込んでいた。ただ、彼女の背中の赤蚯蚓だけが、まるで生きているかの様に、彼女の呼吸につれて蠢いていた。彼女が黙ってしまったので、私もいくらか興奮がさめて行った。

「……静子さん、僕はこんなにひどくする積もりではなかった。もつと静かに話してもよかったのだ。だが、あなたが、あんまり話を避けようとするものだから、そしてあんな嬌態(男にこびるなまめかしい態度や姿)でごまかそうとするものだから、僕もつい興奮してしまったのですよ。勘弁して下さいね。ではね、あなたは口を利かなくてもいい。僕があなたのやって来たことを、順序を立てて言ってみますからね。若し間違っていたら、そうではないと、一言言ってくださいね」と、そして、私は私の推理を、よく分かる様に話し聞かせたのである。(本文)

*

*

さて、小さな蔵の窓から、鼠色の空が見えていた。恐らく、あの天候と、土蔵の中の異様な空気が、私達二人を気違いにしたのではなかったか。静子も私も、あとになって考えて見ると、正気の沙汰ではなかったのだ。私はそこに横たわりもがいている彼女の汗ばんだ青白い全身を眺めながら、執拗にも私の推理を続けて行った。それは、「……一方では、この事件の中に大江春泥がいることは、火の様に明らかな事実なんだ。だが、一方では、日本の警察力がまる二ヶ月かかって、あの有名な小説家を探し出すことが出来ず、彼奴は煙のように完全に消え去ってしまった。それらは、一体、何を意味するのか？」

主人公(寒川)は、終に、その最終的かつ決定的な「推理」を語るのであった。つまり、それは、「……さあ、静子さん。よく聞いて下さい。僕の推理が間違っているかないか。春泥の住所をつないだ円の中心はどこか。この地図を見て下さい。あなたの家だ。浅草山の宿だ。皆、あなたの家から自動車で十分以内のところばかりだ。……小山田氏の帰国と一緒に、なぜ春泥はその姿を隠したのか。もう茶の湯と音楽の稽古に通えなくなったからだ。分かりますか。あなたは小山田氏の留守中、毎日、午後から夜に入るまで、茶の湯と音楽の稽古に通ったのです。……ちゃんと膳立てをして置いて、僕にあんな推理を立てさせたのは誰だったか。あなたですよ、僕を博物館で捕えて、それから自由自在にあやつったのは。……あなたなれば、日記帳に勝手な文字を書き加えることだって、その外の証拠品を小山田氏の本棚に入れることだって、天井へ鉦を落して置くことだって、自由に出来るのです。僕はここまで考えたのです。外に考え様がありますか。さあ、返事をして下さい。返事をして下さい」と迫るのであった。

静子は、主人公(寒川)をずっと愛してきた。その愛する恋人から浴びせられた言葉に對して、静子は、「……あんまりです、あんまりです」と、裸体の静子は、ワツと悲鳴を上げて、私にとりすがって来た。そして、私のワイシャツの上に顔をつけて、熱い涙が私の肌を感じられた程にも、さめざめと泣き入るのだった」とある。——この静子の「心の中」をもう少し詳しく説明をするならば、それは、「……もし夫がいたならば、こうしてあなたと逢うことも出来なければ、また、あなただっただけでわたしとこうなることを望んでい

たのでしよう。それなのに、わたしだけを『悪者扱い』にするなんて、あんまりです、あんまりです。わたしがどれほどあなたのことを愛しているか！ どうしてそれをわかってくれないのですか」と、彼の胸にその顔を沈めて、さめざめと泣いているのです。

一方、主人公（寒川）は、なお容赦なく、あなたは何故泣くのです。さつきから何故僕の推理を止めさせようとするのです。まだ僕の推理はおしまいじゃないのだ。大江春泥の細君は何故眼鏡をかけ、金歯をはめ、歯痛止めの貼り薬をし、洋髪に結って丸顔に見せていたのか、すべて「変装」のためだ。あなたには八重歯があり、それを隠すために金歯をかぶせ、右の頬の大きな黒子を隠すために、歯痛止めの貼り薬をしていた、洋髪にして瓜実顔を丸顔に見せていたのだ。さあ、言ってしまいなさい、すっかり分かっちゃったのだから、まだ、ぼくをごまかそうとするのですか。

私は、静子を突き離すとともに、すっかり興奮してしまっただけで、思わず手にしていた乗馬鞭を振るって、ピシリと彼女のはだかの背中を叩きつけた。私は夢中になって、これでもか、これでもかと、幾つも幾つもうち続けた。見る見る、彼女の青白い皮膚は赤味走って、やがて蚯蚓腫れの形に、真つ赤な血がにじんで来た。彼女は、いつもと同じみだらな格好で、手足をものがき、身をくねらせていたとある。そして、この「容赦なく」とことん追い詰めていく心理、そうせずにはいられない心理、こそは、まさに典型的な「惨虐色情者」（サディスト）の「深層心理」そのものであり、主人公（寒川）自身、すでに何時しか「惨虐色情者」（サディスト）に、一面では染まっていたのである。

一方、静子は、絶入るばかりの息の下から、「平田、平田」と細い声で口走り、主人公（寒川）は、「……平田？ ああ、あなたはまだ私をごまかそうとするのですか。あなたが春泥の細君に化けていたなら、春泥という人物は別にある筈だとも言うのですか。春泥なんているものか。あれは全く架空の人物なんだ。それをごまかす為に、あなたは彼の細君に化けて雑誌記者なんか逢っていたのだ」と言うのであった。

しかし、この「平田、平田」という「言葉」が、主人公（寒川）の「頭の中」にはつきりと「記憶保存」され、いつまでも「耳の底」に残っては、もしかしたら、実際に「平田一郎」（或いは「大江春泥」という人物は、現実に存在するのではないかと、その後も、主人公（寒川）をずっと悩ませ続けるのであった。

二七、本格的な推理二（その全容を語る）

主人公（寒川）は、では、「あなたは口を利かなくてもいい。僕があなたのやって来たことを順序を立てて言ってみますからね。若し間違っていたら、そうではないと、一言言ってください」と。そして、私は私の推理をよく分かる様に話し聞かせたのである。

あなたは女にしては珍らしく、「理智と文才」に恵まれていた。それは、あなたが私にくれた手紙を読んだだけでも、充分分かるのです。そのあなたが匿名でしかも男名前で、探偵小説を書いて見る気になったのは、ちっとも無理ではありません。しかも、その小説が意外に好評を博した。そして、丁度あなたが有名になりかけた時分に、小山村さんが、二年間も外国へ行くことになった。その淋しさを慰める為、且つはあなたの猟奇癖を満足させる為、あなたはふと「一人三役」という恐ろしいトリックを思いついた。あなたは、『一人二役』という小説を書いているが、その上を行って、一人三役というすばらしいこ

とを思いついたのです。あなたは平田一郎の名前で、根岸に家を借りた。その前の池袋と牛込とはただ手紙の受取場所を造って置いただけでしょう。そして、厭人病や旅行などで、平田という男性を世間の目から隠して置いて、あなたが変装をして平田夫人に化け平田に代わって原稿の話まで一切切り廻していたのです。つまり原稿を書く時には大江春泥の平田になり、雑誌記者に逢ったり、家を借りたりする時には、平田夫人になり、山の宿の小山田家では、小山田夫人になりすましていたのです。つまり「一人三役」なのです。その為に、あなたは殆ど毎日の様に午後一杯、茶の湯や音楽を習うのだと言って、家をあけなければならなかった。半日は小山田夫人、半日は平田夫人と、一つ身体を使い分けていたのです。それには髪も結い変える必要があります、着物を着換えたり変装をしたりする時間が要るので、余り遠方では困るのです。そこで、あなたは住所を変える時、山の宿を中心に、自動車で十分位の所ばかり選んだ訳ですよ。僕は同じ猟奇の徒なから、あなたの心持がよく分かります。随分苦勞な仕事ではあるけれど、世の中に、こんなにも魅力のある遊戯は、恐らく外にはないでしょうからね。僕は思い当ることがありますよ。いくつかある批評家が春泥の作を評して、女でなければ持つていない不愉快な程の猜疑心に充ち満ちている。まるで暗闇に蠢く「陰獣」の様だと言ったのを思い出しますよ。あの評論家は本当のことを言っていたのですね。

その内に、短い二年が過ぎ去って、小山田さんが帰って来た。もうあなたは元の様に一人二役を勤めることは出来ない。そこで大江春泥の行方不明ということになったのです。でも、春泥が極端な厭人病者だということを知っている世間は、その不自然な行方不明をさして疑わなかった。だが、あなたがどうしてあんな恐ろしい罪を犯す気になったのか、その心持は男の僕にはよく分からないけれど、変態心理学の書物を読むと、ヒステリー性の婦人は、屢々自分で自分に当てる脅迫状を書き送るものだそうです。日本にも外国にもそんな実例は沢山あります。つまり、自分でも怖がり、他人にも気の毒がつもらいたい気持なんです。あなたもきつと思えます。自分が化けていた、有名な男性の小説家から、脅迫状を受ける。何というすばらしい魅力でしょう。

同時に、あなたは年をとったあなたの夫に不満を感じて来た。そして、夫の不在中に経験した変態的な自由の生活に止み難いあこがれを抱く様になった。いや、もつと突込んで言えば、嘗てあなたが春泥の小説の中に書いた通り、犯罪そのものに、殺人そのものに、言い知れぬ魅力を感じたのだ。それには丁度春泥という完全に行方不明になった架空の人物がある。この者に嫌疑をかけて置いたならば、あなたは永久に安全でいることが出来た上、いやな夫とは別れ、莫大な遺産を受け継いで、半生を勝手気ままに振舞うことが出来るからである。

だが、あなたはそれだけでは満足しなかった。万全を期する為、二重の予防線を張ることを考えた。そして、選り出されたのが僕なんです。あなたはいつも春泥の作品を非難する僕をまんまと傀儡に使って、敵討ちをしてやろうと思ったのでしょうか。だから僕がああ意見書を見せた時には、あなたはどんなにか、おかしかったことでしょうか。僕をごまかすのは、造作もなかったですね。手袋の飾釦、日記帳、新青年、『屋根裏の遊戯』それで充分だったのですからね。だが、あなたがいつも小説に書いている様に、犯罪者というものは、どこかにほんのつまらないしくじりを残して置くものですね、あなたは小山田さんの手袋からとれた釦を拾って、大切な証拠品に使ったけれど、それがいつとれたか

をよく検べて見なかった。その手袋がとつくの昔運転手に与えられたことを少しも知らずにいたのです。何というつまらないしくじりだったでしょう。小山田さんの致命傷はやっぱり僕の前の推察の通りだと思えます。ただ違うのは、小山田さんが窓の外から覗いたのではなくて、多分、あなたと情痴の遊戯中に（だからあの鬘をかぶっていたのでしょう）あなたが窓の中からつきおとしたのです。（本文）

*

*

さて、あなたは女にしては珍らしく「理智と文才」に恵まれていた。そのあなたが、匿名でも男名前前で、探偵小説を書いて見る気になったのは、無理からぬことであり、その小説が意外に好評を博して、丁度あなたが有名になりかけた時分に、小山田氏が、二年間も外国へ行くことになった。その淋しさを慰める為、且つはあなたの猟奇癖を満足させる為、あなたはふと「一人三役」という恐ろしいトリックを思いついた。一人は、恋人「平田一郎」（かつ探偵作家大江春泥）、一人は、その妻「平田夫人」（かつ春泥夫人）、そして、もう一人は、実業家小山田六助氏の夫人「小山田静子」であった。……

そのために、あなたは殆ど毎日の様に午後一杯、茶の湯や音楽を習うのだと言って、家をあげなければならなかった。つまり、半日は小山田夫人、半日は平田夫人と、一つの身体を使い分けていた。それには髪型も変えたり、着物を替えたりする時間が必要であり、そこで、住所を変える時、山の宿を中心し、自動車で十分ぐらいの所ばかりを選んだのである。やがて、小山田氏が帰って来た。もう元の様に一人二役を勤めることは出来ない。そこで大江春泥の行方不明となるのである。だが、あなたがどうしてあんな恐ろしい罪を犯す気になったのか、男の僕にはよく分からないが、変態心理学の書物を読むと、自分でも怖がり、他人にも気の毒がってもらいたい気持ちなんですね。それと同時に、あなたは年をとったあなたの夫に不満を感じてきた。そして、夫の不在中に経験した変態的な自由の生活に止み難いあこがれを抱く様になった。いや、もつと言えば、犯罪そのものに、殺人そのものに、言い知れぬ魅力を感じたのだ。春泥を犯人に仕立てれば、あなたは永久に安全でいられる上、いやな夫とは別れ、莫大な遺産を受け継いで、半生を勝手気ままに振る舞うことができるからです。

この主人公（寒川）の「推理」は、間違いいではない。間違いいではないが、しかし、最も大事なものが欠落している。それは、一体、何かと問えば、それは、次のようなことである。——つまり、静子が「心の底」から欲したものは、確かに、一つは、夫からの「解放」ではあるが、しかし、それもこれも、すべて「心の恋人」でもあった「寒川」を本当の「恋人」にすることであり、その愛する「寒川」と一緒に暮らすことをずっと夢見ていたのである。この最も大事な静子の「女心」が、主人公（寒川）には、十分に読み解けていなかった。そのために、愛する静子に必要以上に辛く当たってしまったのである、その結果として、静子の「自殺」という悲劇へと向かってしまうのである。

二八、推理後の「二人の様子」

本格的な推理後、主人公（寒川）は、「……さあ、静子さん。僕の推理が間違っていないか。何とか返事をして下さい。出来るなら僕の推理を打破して下さい。ねえ、静子さん」と言うのであった。そして、私はグツタリとしている静子の肩に手をかけて、軽く揺

さぶつたが、彼女は「恥と後悔」の為に顔を上げることが出来なかったのか、身動きもせず、一言も物を言わなかったのである。

私は言いたいだけ言ってしまうと、ガツカリして、その場に茫然と立ちつくしていた。私の前には、昨日まで私の無二の恋人であった女が、傷ける陰獣の正体をあらわにして、倒れている。それをじっと眺めていると、いつか私の眼は熱くなった。

「……では僕はこれで帰ります」と、私は気を取直して言った。「……あなたは、あとでよく考えて下さい。そして、正しい道を選んで下さい。僕はこの一月ばかりの間、あなたのお陰で、まだ経験しなかった、情痴の世界を見ることが出来ました。そして、それをおもうと今でも僕は、あなたと離れ難い気がするのです。しかし、このままあなたとの関係が続けて行くことは、僕の良心が許しません。僕は道徳的に人一倍敏感な男なのです。……では左様なら」と。

私は静子の背中の蚯蚓腫れの上に、心をこめた接吻を残して、暫くの間彼女との情痴の舞台であった、私達の化物屋敷をあとにした。空は愈々低く、気温は一層高まって来た様に思われた。私は身体中無意味な汗にしたりながら、その癖齒と齒をカチカチ言わせて、気違いの様にフラフラと歩いて行った。(本文)

*

さて、主人公(寒川)は、なおも「推理」を推し進め、あなたは、万全を期するため二重の予防線を張った。そして、選り出されたのが私なんです。僕をごまかすのは、造作もなかったでしょう。しかし、犯罪者というものは、どこかにほんのつまらないしくじりだけを残して置くものです。それが、手袋の飾釦であり、何というつまらないしくじりだったでしょう。一方、小山田さんの致命傷は、やっぱり僕の前の推察通りだと思えます。ただ違うのは、小山田さんが窓の外から覗いたのではなく、多分、あなたと情痴の遊戯中に、あなたが窓の中から突き落としたのです。さあ、静子さん。僕の推理が間違っていましたか。何とか返事して下さい。出来るなら僕の推理を打破して下さい。……

静子は、恥と後悔の為に顔を上げることが出来なかったのか、身動きもせず、一言も物を言わなかったとある。これは、一体、何を意味するのかと問えば、それは、次のようなことである。——つまり、主人公(寒川)という人は、自分の「推理」に余りにも酔ってしまい、静子の「心」を「思いやる」ことを怠ってしまったのである。——それは、自分の「推理」の論理展開ばかりに気をとられ、これでもかこれでもかと容赦なく相手を追い詰めるばかりで、静子の「せつない女心」というものを少しも理解しようとはしなかった。そのことが、結果として、静子を「自殺」へと追いやってしまうのである。それは、「静子」にもつとやさしく少しでも言い訳の出来るような余地を残しておくべきだったのである。ところが、主人公(寒川)という人は、自分の「推理」に余りにも酔ってしまい、その責めて一つぐらいは残しておくべき「退路」の、すべての「退路」をすべて断ってしまつたのである。それゆえ、静子は、たつた「一言も言えない」、たつた「一言の言いわけ」も出来ない「精神状態」へと追い込まれてしまつたのである。

*

私は言いたいだけ言ってしまうと、ガツカリして、その場に茫然と立ちつくしていた。私の前には、昨日まで私の無二の恋人であった女が、傷ける陰獣の正体をあらわにして、倒れている。それをじっと眺めていると、いつか私の眼は熱くなった。

そして、「……では僕はこれで帰ります」。「……あなたは、あとでよく考えて下さい。そして、正しい道を選んで下さい。僕はこの一月ばかりの間、あなたのお陰で、まだ経験しなかった、情痴の世界を見ることが出来ました。そして、それを思うと今でも僕は、あなたと離れ難い気がするのです。しかし、このままあなたとの関係を続けて行くことは、僕の良心が許しません。僕は道徳的に人一倍敏感な男なのです。……では左様なら」。私は静子の背中の蚯蚓腫れの上に、心をこめた接吻を残して、暫くの間彼女との情痴の舞台であった、私達の化物屋敷をあとにした、とある。

*

*

さて、主人公（寒川）の「目」は、今や犯罪者を「見る目」に変わっている。静子の「深く傷ついた心」を、今こそ、心から癒すべき「相談相手」（恋人）となって、これからどうしたらよいかを、親身になり、二人でどこまでも深く話し合うべきところを、主人公（寒川）という人は、その静子の「深く傷ついた心」をそのまま放置したまま、何のやさしい言葉もかけられることもなく、一人で帰ってしまったのである。——それは、一体、なぜなのか？ それは、主人公（寒川）という人もまた、知らず識らずのうちに、いわゆる「惨虐色情者」（サディスト）の「心理状態」にどこか染まってしまい、本来の主人公（寒川）の「健全な精神」の働きが十分に機能しなくなっていたのである。

それでは、その「絶対的証拠」は、一体、どこにあるのかと問えば、それは、まさに「……私は言いたいだけ言ってしまうと、ガツカリして」という、この「言葉」こそは、まさにその「絶対的証拠」の「言葉」であり、それこそは、「……もつともつと何かないのか」という、まさに「惨虐色情者」（サディスト）の心理そのものであり、主人公（寒川）という人も、知らず識らずのうちに、いつの間にか自らも「陰獣」に染まっていたのである。

二九、事件の結末

そして、その翌日の夕刊で、私は静子の自殺を知ったのだった。彼女は恐らくは、あの洋館の二階から、小山田六助氏と同じ隅田川に身を投じて、覚悟の水死をとげたのである。運命の恐ろしさは、隅田川の流れ方が一定している為に起ったことではあるうけれど、彼女の死体は、やっぱり、あの吾妻橋下の汽船発着所のそばに漂っていて、朝、通行人に発見されたのであった。何も知らぬ新聞記者は、彼の記事の後へ、「小山田夫人は恐らく、夫六郎氏と同じ犯人の手にかかって、あえない最期をとげたものであろう」と附加えた。

私はこの記事を読んで、私の嘗つての恋人の可哀な死に方を憐れみ、深い哀愁を覚えたが、それはそれとして、静子の死は、彼女が彼女の恐ろしい罪を自白したも同然で、まことに当然の成行きであると思っていた。一月ばかりの間は、そんな風に信じ切っていた。だが、やがて、私の妄想の熱度が、徐々に冷えて行くに随って、恐ろしい疑惑が頭を擡げて来た。私は一言さえも、静子の直接の懺悔を聞いた訳ではなかった。様々な証拠が揃っていたとは言え、その証拠の解釈は凡て私の空想であった。二に二を加えて四になるという様な、厳正不動のものではあり得なかった。現に、私は運転手の言葉と、灰汁洗い屋の証言だけを以て、あの一度組み立てたまことしやかな推理を、様々な証拠を、まるで正反対に解釈することが出来たではないか。それと同じ事が、もう一つの推理にも起らないとどうして断言出来よう。事実、私はあの土蔵の二階で静子をせめた際にも、最初は何も

ああまでする積もりではなかった。静かに訳を話して、彼女の弁明を聞く積もりだった。それが、話の半ばから、彼女の態度が変に私の邪推を誘ったので、ついあんな手ひどく、断定的に物を言ってしまったのだ。そして、最後に度々念を押しても、彼女が押し黙って答えなかったので、つっきり彼女の罪を肯定したものと独り合点をしてしまったのだ。だがそれはあくまでも独り合点ではなかったであろうか。

成程、彼女は自殺をした。(だが、果して自殺であったか。他殺！ 他殺だとしたら下手人は何者だ。恐ろしいことだ)。自殺をしたからと言って、それが果して彼女の罪を証することになるであろうか。もつと外に理由があったかも知れないではないか。例えば、頼りと思う私から、あの様に疑い責められ、全く言い解くすべがないと知ると、心の狭い女の身では、一時の激動から、つい世を果敢なむ気になったのではあるまいか。とすれば、彼女を殺したものは、手こそ下さぬ、明かにこの私であったではないか。私はさつき他殺ではないと言ったけれど、これが他殺でなくて何であろう。

だが、私がただ一人の女を殺したかも知れないという疑いだけならば、まだしも忍ぶことが出来る。ところが、私の不幸な妄想癖は、もつともつと恐ろしいことさえ考えるのだ。彼女は明かに私を恋していた。恋する人に疑われ、恐ろしい犯罪人として責めさいなまれた女の心を考えて見なければならぬ。彼女は私を恋すればこそ、その恋人のとき難い疑惑を悲しめばこそ、遂に自殺を決心したのではないだろうか。また、たとえ私のあの恐ろしい推理が当たっていたとしてもだ。彼女はなぜ長年つれ添った夫を殺す気になったのである。自由か、財産か、そんなものが一人の女を殺人罪に陥れる程の力を持っていたのだろうか。それは恋ではなかったか。そして、その恋人というのは外ならぬ私ではなかったか。ああ、私はこの世にも恐ろしい疑惑をどうしたらよいのである。静子が殺人者であったにしろなかったにしろ、私はあれ程私を恋慕していた可哀な女を殺してしまったのだ。私は私のけちな道義の念を呪わずにはいられない。世に恋程強く美しいものがあるのか。私はその清く美しい恋を、道学者の様になくな心で、無残にも打ち砕いてしまったのではないか。

だが、若し彼女が私の想像した通り大江春泥その人であって、あの恐ろしい殺人罪を犯したのであれば、私はまだいくらか安んずるところがある。とは言え、今となって、それがどうして確かめられるのだ。小山田六郎氏は死んでしまった。小山田静子も死んでしまった。そして、大江春泥は永久にこの世から消え去ってしまったとしか考えられぬではないか。本田は静子が春泥の細君に似ていると言った。だが似ているというだけでそれが何の証拠になるのだ。私は幾度も糸崎検事を訪ねて、その後の経過を聞いて見たけれど、彼はいつも曖昧な返事をするばかりで、大江春泥捜索の見込みがついているとも見えぬ。私は又、人を頼んで、平田一郎の故郷である静岡の町を検べて貰ったけれど、彼が全く架空の人物であってくればという空頼みの甲斐もなく、今は行方不明の平田一郎なる人物があったことを報じて来た。だが、たとえ平田という人物が実在していた所で、彼が誠の静子の嘗つての恋人であった所で、それが大江春泥であり六郎氏殺害の犯人であったと、どうして断定することが出来る。彼は今現にどこにも居ないのだし、静子はただの昔の恋人の名を、一人三役の一人の本名に利用しなかったとは言えないのだから。更らに、私は親戚の人の許しを得て、静子の持ち物、手紙類などをすっかり調べさせてもらった。それから何等かの事実を探り出そうとしたのだ。しかし、この試みも何の齎すとも

ころもなかった。

私は私の推理癖を、妄想癖を、悔んでも悔んでも悔やみ足りない程であった。そして、出来るならば、平田一郎の入江春泥の行方を探す為に、たとえそれが無駄だとは分かっている、日本全国を、いや世界の果てまでも、一生涯巡礼をして歩きたい程の気持ちになつてゐる。(だが春泥が見つかつて、彼が下手人であつたとしても、又なかつたとしても、夫々違つた意味で、私の苦痛は一層深くなるかも知れないのだが)。

静子が悲惨な死をとげてから、もう半年にもなる。だが、平田一郎はいつまでたつても現われぬのだ。そして、私の取りかえしのつかぬ、恐ろしい疑惑は、日と共に、月と共に、深まつて行くばかりである。(本文・完)

*

*

さて、翌日の夕刊で、私は、静子の自殺を知つたのだつた。彼女は、恐らくは、あの洋館の二階から、小山田六助氏と同じ隅田川に身を投じて、覚悟の水死をとげたのである。彼女の死体は、やっぱり、あの吾妻橋の汽船発着所のそばに漂つていて、朝、通行人に発見されたのであつた。静子の死は、彼女が彼女の恐ろしい罪を自白したも同然で、まことに当然の成行きであると思つてゐた。少なくとも最初の一ヶ月間は、そう信じてゐた。

だが、やがて、恐ろしい疑惑が頭を擡げてきた。私は一言さえも、静子の直接の懺悔を聞いた訳ではなかつた。様々な証拠が揃つてゐたとは言え、その証拠の解釈は凡て私の空想であつた。——なるほど、彼女は自殺をした。だが、それが果たして彼女の罪を証することになるだろうか。もつと外の理由があつたかも知れない。例えば、頼りと思う私から、あの様に疑い責められ、全く言い解くすべがないと知ると、心の狭い女の身では、一時の激動から、つい世を果敢なむ気になつたのではあるまいか。私はさつき他殺ではないと言つたけれど、これが他殺でなくて何であろうか。

彼女は、明らかに私を恋してゐた。恋する人に疑われ、恐ろしい犯罪人として責めさいなまれた女の心を考えて見なければならぬ。彼女は私を恋すればこそ、その恋人の解き難い疑惑を悲しめばこそ、遂に自殺を決心したのではないだろうか。また、たとえ、私のあの恐ろしい推理が当たつてゐたとしてもだ。彼女はなぜ長年つれ添つた夫を殺す気になつたのだろうか？ 自由か、財産か、そんなものが一人の女を殺人罪に陥れる程の力を持つてゐたのだろうか。それは、恋ではなかつたか。そして、その恋人というのは、外なら私ではなかつたか。——ああ、私はこの世にも恐ろしい疑惑をどうしたらよいのである。静子が殺人者であつたにしろなかつたにしろ、私は、あれ程私を恋慕つてゐた可哀想な女を殺してしまつたのだ。私は、私のけちな道義の念を呪わずにはいられない。世に恋ほど強く美しいものがあるうか。私は、その清く美しい恋を、道学者の様になかたくなな心で、無残にも打ち砕いてしまつたのではないのか、と思ひ悩むのであつた。

*

*

そこで、主人公(寒川)は、その後も、例えば、幾度も磯崎検事を訪ねて、その後の経過を聞いて見たけれど、大江春泥捜索の見込みがついてゐるとも見えぬ。また、人を頼んで、平田一郎の故郷である静岡の町を検べて貰つたけれど、今は行方不明の平田一郎なる人物があつたことを報じて来ただけ、とか、その他、これらは、一体、何のために行なつてゐることかと敢えて問えば、それは、次のようなことである。

つまり、「……私は、自分の推理癖、妄想癖を、悔んでも悔んでも悔み足りない程であ

った」とある。それは、一体、なぜなのか？ それは、自分の余計な「推理癖・妄想癖」が、結果として、静子を「自殺」へと追いやってしまったからである。しかも、「私は一言さえも、静子の直接の懺悔を聞いた訳ではない」とある。つまり、本人（静子）の「自白」（自供）というものは一言もなかったのである。それに加えて、また、なぜ「夫を殺した」のか、その「動機」もよく分からなければ、どのように殺したのか、その「殺害方法」さへもよく分かかっていないのである。すべては主人公（寒川）の勝手な「推理・妄想」に過ぎないのである。——つまり、何一つ「確たるもの」はないのである。確かに、「……様々な証拠が揃っていたとは言え、その証拠の解釈は凡て彼の空想（妄想）に過ぎない」のである。また、「平田一郎」についても、静子が言うようなことが実際にあったのかどうか、また、そもそも「平田一郎」という人間は、この世に現実に存在する人間なのかどうか、それすらもよく分からない。それは、探偵作家大江春泥という人物も、どこまでがどうなのか、厳密には何一つ分かっていないのである。すべては主人公（寒川）の勝手な「推理・妄想」に過ぎないのである。だからこそ、もう一度、「平田一郎」や「大江春泥」について、できるだけ「正確な情報」を得ようとしているのである。そして、「……出来るならば、平田一郎の大江春泥の行方を捜す為に、たとえそれが無駄だとは分かっている、日本全国を、いや世界の果てまでも、一生涯巡礼をして歩きたい程の気持ちになっている」とある。それは、一体、なぜなのか？ それは、自分の勝手な「推理・妄想」によつて、愛する静子を無惨にも「自殺」へと追いやってしまったことに対する、まさに「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）であり、それは、つまり、心の底から「すまない」という想いに深く襲われているということである。……

つまり、主人公（寒川）の恋人静子を見る「目」は、今や犯罪者を「見る目」に変わってしまった。本来ならば、静子の「深く傷ついた心」を、今こそ、心から癒すべき「相談相手」（恋人）となつて、これからどうしたらよいかを、親身になり、二人でどこまでも深く話し合うべきところを、主人公（寒川）という人は、その静子の「深く傷ついた心」をそのまま放置したまま、何のやさしい言葉をかけることもなく、一人で帰ってしまったのである。その結果として、愛する静子を無惨にも「自殺」へと追いやってしまったのだ。そのことを主人公（寒川）は、今、心の底から「すまない」と悔んでいるのである。（完）

「参考文献」

※底本「陰獣」江戸川乱歩著（「角川ホラー文庫」）